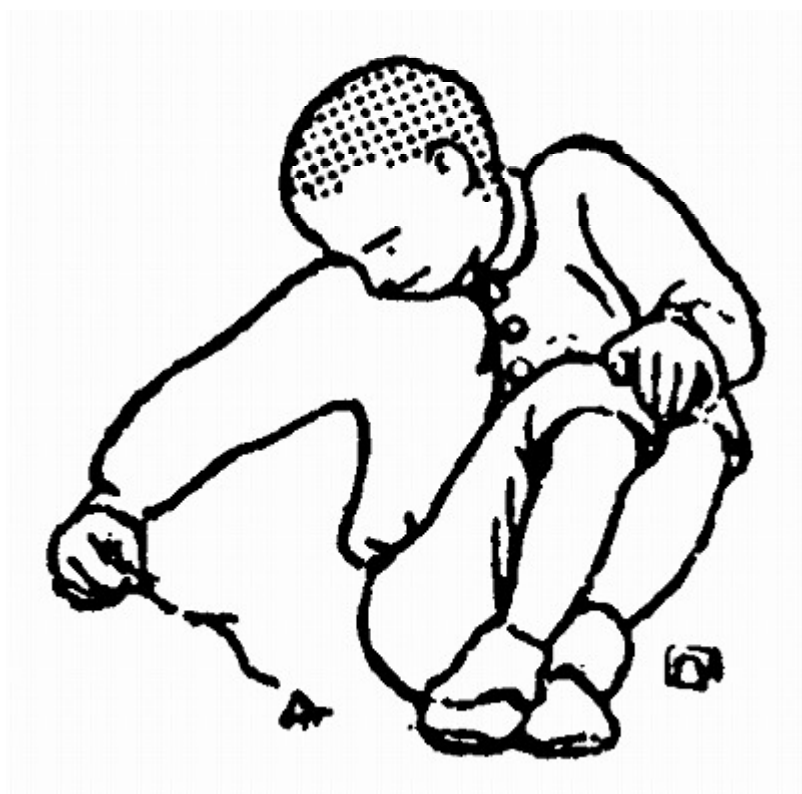






ルピック夫人は
いう——

「はあ……オノ
リイヌは、きつと
また鶏小舎の戸を
閉めるのを忘れた
ね」

そのとおりだ。
窓から見ればちゃ
んとわかるのであ
る。向こうの、広
い中庭のずっと奥
のほうに、鶏小舎
の小さな屋根が、
暗闇の中に、戸の
いているところだ
け、黒く、四角く、

くぎっている。

「フェリックスや、お前ちよつと行って、閉めて来るかい」

と、ルピック夫人は、三人の子供のうち、一番上の男の子にいう。

「僕あ、鶏の世話をしにここにいるんじゃないよ」

蒼白い顔をした無精で、臆病なフェリックスがいう。

「じゃ、お前は、エルネスチイヌ？」

「あら、母さん、あたし、こわいわ」

兄貴のフェリックスも、姉のエルネスチイヌも、ろくろく顔さ
え上げないで返事をする。二人ともテーブルについて、ほとん
ど額と額とをくつつけるようにしながら、夢中で本を読ん
でいる。

「そうそう、なんてあたしや馬鹿なんだろう」と、ルピック夫人
はいう——「すっかり忘れていた。にんじん、お前いつて鶏小舎
を閉めておいで」

彼女は、こういう愛称で末っ子を呼んでいた。というのは、髪
の毛が赤く、顔じゅうにがあるからである。テーブルの下で、何
もせずに遊んでいたにんじんは、突っ立ちあがる。そして、おど
おどしながら、

「だって、母さん、僕だってこわいよ」

「なに？」と、ルピック夫人は答える——「大きなりをして……
嘘だろう。さ、早く行くんですよ」

「わかってるわ。そりゃ、強いったらないのよ。まるでみたい……
……」

姉のエルネスチイヌがいう。

「こわいものなしさ、こいつは……。こわい人だつてないんだ」
と、これは兄貴のフェリックスである。

おだてられて、にんじんはり返った。そういわれて、できな
ければ恥だ。彼は怯む心と闘う。最後に、元氣をつけるために、母
親は、痛いめに遭わすといひ出した。そこで、とうとう——

「そんなら、明りを見せてよ」

ルピック夫人は、知らないよというをする。フェリックスは、

鼻で笑っている。エルネスチヌが、それでも、可哀そうになつて、蠟燭ろうそくをとりあげる。そしてにんじんを廊下ろうかのとおっぱなまで送って行く。

「ここで待っててあげるわ」

が、彼女は、じ気づいて、すぐ逃げ出す。風が、ぱつと来て、蠟燭の火をゆすぶり、消してしまったからである。にんじんは、尻しりつぺたに力を籠こめ、踵かかとを地べたにめり込ませて、闇の中で、ぶるぶる顫ふるえ出す。暗いことといったら、それこそ、盲めくらになつたとしか思えない。おりおり、北風が、冷たい敷布しきふのようにからだを包んで、どこかへ持つて行こうとする。狐か、それともあるいは狼が、指の間や頬ほべたに息をふきかけるようなことはないか。いっそ、頭を前へ突き出し、鶏小舎めがけて、いいかげんに駈かけ出したほうがましだ。そこには、隠れるところがあるからだ。手探てさぐりで、戸の鉤かぎをつかむ。と、その跽音あしおとに愕おどろいた鶏とりどもは、宿木とまりぎの上で、きやあきやあ騒ぐ。にんじんは怒鳴る——

「やかましいな。おれだよ」

戸を閉めて走り出す——手にも、足にも、羽根がえたように。やがて、暖かな、明るいところへ帰つて来ると、息をはずませ、内心得意だ。雨と泥で重くなつた着物を、新しい軽いやつと着替きかえたようだ。そこで、反り身そみになり、突つ立つたまま、昂然こうぜんと笑つて見せる。みんなが褒めてくれるのを待っている。危険はもう過ぎた。両親の顔色のどこかに、心配をした跡あとが見えはせぬかと、それを捜さがしている。

ところが、兄貴のフェリックスも、姉のエルネスチヌも、平気で本を読みつづけている。ルピック夫人は落ちつきはらった声

で、彼にいう——

「にんじん、これから、毎晩、お前が閉めに行きなさい」



エルネスチイ又は、毛をむしり、羽根を抜くのである。ところで、にんじんは怪我をしたまま生きているやつ、最後の息の根をとめるのである。この特権は、冷たい心の持主であるということからきている。彼の残忍性は、みんなの認めるところとなっているからである。

二羽の鷓鴣は、じたばたする。首を振る。

いつものように、ルピック氏に、テールの上で、の獲物を始末し、腸を抜くのである。獲物は、二羽の鷓鴣だ。兄貴のフェリックスは、壁にぶらさげてある石板に、そいつを書きつける。それが彼の役目である。子供たちは、めいめい仕事を割当てられている。姉の

ルピック夫人——どうして、さっさと殺さないんだい。にんじん——母さん、僕、石板に書くほうがいいなあ。ルピック夫人——石板は、お前には、がとかないよ。にんじん——そいじゃ、羽根をむしるほうがいいや。ルピック夫人——そんなことは、男のすることじゃない。

にんじんは、二羽の鷓鴣をとりあげる。そばから、親切にやり方を教えるものがある。

「ぎゅっと締めるんだよ、そうさ、頭んところを、羽根を逆さまに持って……」

両手に、一羽ずつ、それをうしろへかくして、彼はやり出す。

ルピック氏——二羽一度にか。無茶しよる。

にんじん——早くやつちやいたいからさ。

ルピック夫人——神経家ぶるのはよしとくれ。心ん中じゃ、うれしくってたまらないくせに……。

鷓鴣はしたように、もぐく。翼をばたばたさせる。羽根を飛ばす。金輪際くたばりそうにもない。彼は、友達の一人ぐらい、もっと楽に、それこそ片手で締め殺せるだろうに。——今度は両膝の間に挟んで、しっかり押え、赤くなったり、白くなったり、汗までかいて、なおも締めつづける。顔は、なんにも見えないように上を向いているのである。

鷓鴣は、頑強だ。

どうしてもためなので、をおこし、二羽とも、脚をもったまま、靴の先で、頭を踏みつける。

「やあ、冷血！ 冷血！」

兄貴のフェリックスと、姉のエルネスチヌが叫んだ。

「なに、あれで、うまくやったつもりなのさ」と、ルピック夫人はいう——「可哀そうに……。あたしがこんなめにあうんだったら、まっぴらだ。ああ怖い、怖い」

ルピック氏は、年功をた獵人だが、さすがに、胸を悪くして、どっかへ出て行く。

「これでいいだろう」

にんじんは、死んだ鷓鴣をテーブルの上に投げ出す。

ルピック夫人は、それを、こっちへ引っくり返し、あっちへ引っくり返しして見る。小さなが、碎けて、血と少しばかりの脳味噌が流れ出している。

「あんとき、取り上げちまえばよかったのさ。これじゃ、目もあてられやしない……」

ルピック夫人はいう。

すると、兄貴のフェリックスが——

「たしかに、いつもよりや、まずいや」



ていたピラムが、ごろごろ喉を鳴らします。

「しいっ!」と、ルピック氏がいった。

ピラムは、一段と声を張り上げる。

「馬鹿」と、ルピック夫人はいう。

が、ピラムは、それこそ、みんなが飛びあがるほど猛烈な声で吠える。ルピック夫人は心臓へ手をあてる。ルピック氏は、歯を喰

ルピック氏と姉

のエルネスチヌは、ランプの下で、
 脇をついて、一人は新聞を一人は賞
 与の本を読んでい
 る。ルピック夫人
 は編物をし、兄貴
 のフェリックスは
 暖炉で両脚をあ
 ぶつている。それ
 から、にんじんは、
 床の上に坐って、
 何か考え事をして
 いる。

だしぬけに、
 靴拭いの下で眠っ

いしばって、横目で犬を睨む。兄貴のフェリックスは怒鳴りつけ
 る。もう、お互いのいうことすら耳にはいらぬ。

「黙らないかい、しょうがない犬だね。お黙りしたら、畜生!」
 ピラムはますます調子を上げる。ルピック夫人は手の平でぶつ。
 ルピック氏は新聞で擲る。それから、足で蹴る。ピラムは、殴ら
 れるのが怖さに、腹を床にすりつけ、鼻を下に向け、やたらに吠
 える。見ていると、まるで気が狂って、自分の口を靴拭いにぶつ
 け、声を微塵に叩き割っているとしか思えない。

ルピック一家はかんかに怒る。みんな総立ちになり、いっば
 う腹ばいになったまま、頑としていうことをきかない犬に業を煮
 やす。

窓ガラスがむ。暖炉の煙突が音をたてる。姉のエルネスチヌ
 まだが金切声をしぼる。

にんじんは、いいつけられもしないのに、外の様子を見に行っ
 た。たぶんけのおそい駅員が表を通るのだらう。それも、ゆっ
 くり自分の家に帰って行く途中に違いない。まさか泥坊をしに庭
 の塀を攀じ登っているのではあるまい。

にんじんは、暗い、長い廊下を、両手を戸のほうにつき出して、
 歩いて行く。門を探り、がたがた音を立てて、引っぱってみる。
 しかし、戸は開けようとしない。

昔なら、危険を冒してでも外に出て、口笛を吹いたり、歌を唱
 ったり、足を踏みならしたりして、さかんに相手を威かさうとし
 たものだ。

近頃は、要領がいい。

両親は、彼が勇敢に隅から隅を探り、忠実な番人として、屋敷

のまわりを見廻っているものと思っている。ところが、それは大間違いである。彼は戸のうしろに身を寄せて、じっとしているのである。

いつかは思い知ることがあるだろう。しかし、もうよほど前から彼の計略が図にあたっている。

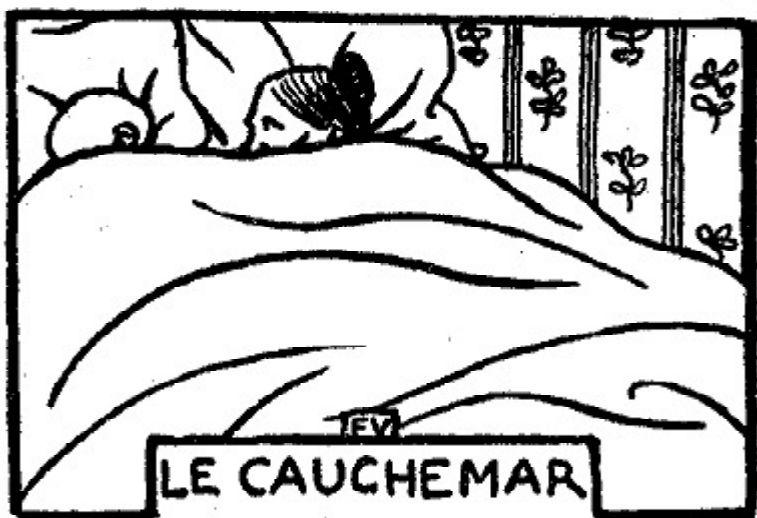
心配なのは、と咳をすることだ。彼は息をこらす。そして、目をあげると、戸の上の小さな窓から、星が三つ四つ見える。冴え渡った煌きに、彼は竦みあがる。

さて、戻ってもいい時間だ。お芝居に暇をかけ過ぎてはよくない。怪しいと思われたらそれまでだ。

再び、か細い手で、重い門をゆすぶる。門は錆びついた錠の中で軋む。それから、そいつを溝の奥まで騒々しく押し込む。この物音で、みなのは、彼が遠いところから帰って来たのだな、もう務めをすませたのだなと思う！ 背中の真中が擦ったいような気持で、彼は、みんなを安心させにとんで行く。

ところで、やっとこさ、ピラムは、彼の留守の間に黙ってしまつたので、安心したルピック一家は、また、めいめい、きまりの場所に着いていた。で、誰もねもしないのに、にんじんは、ともかく、いつものとおりにいう――

「犬が寝とぼけたんだよ」



としか思えない。

八月でさえ冷え^ひびえる広い部屋に、寝台が二つ置いてある。一つはルピック氏ので、もう一つのほうへは、にんじんが母親と並んで、壁に近い奥のほうに寝ることになるのである。

眠る前に、彼は掛布団^{かけぶとん}をかぶって、こんこん咳^{せき}をする。喉^{のど}を掃除するためである。しかし、鼾^{いびき}をかくのは、ことによると、鼻

にんじんは泊

り客がいである。

部屋を追い出さ

れ、寝台を占領

され、そして、

母親と一緒に寝

なければならな

いからである。

ところで、もし

彼が、昼間あら

ゆる欠点を備え

ているとすれば、

夜は夜で、とり

わけ、鼾^{いびき}をかく

という欠点をも

っている。わざ

と鼾^{いびき}をかくんだ

かもしれない。そこで、鼻の孔^{あな}がつまっていけないかどうか、そつと鼻から息を出してみる。それから、あんまり大きく呼吸^{いき}をしな

い練習をする。

それにもかかわらず、彼は、眠ったかと思うと、もう鼾^{いびき}をかい

ている。こればかりはどうしても止められないとみえる。

すると、ルピック夫人は、彼のつぺたの一番肉^{にく}附きのよさそう

なところを、爪で、血の出るほどつねる。彼女は、この方法に限

ると思っている。

にんじんの悲鳴で、ルピック氏はにわかに眼をます。そして、

こう訊^{たず}ねる――

「夢でうなされているんですよ」

と、ルピック夫人は答える。

それから、彼女は、がやるように、子守歌のひと節を口の中で唄^{うた}

う。これはインドの節らしい。

にんじんは壁に額とを押しつける。壁を突き破らんばかりに

押しつける。両手で尻^{はこ}つぺたを隠す。鳴動が始まると同時に襲来

する爪の鋒^{ほこさき}先を防ぐためである。こうして、彼は、大きな寝台の

中で、再び眠りに就^つくのである――母親と並んで奥のほうに寝る、

その大きな寝台の中で。



ちつとずうずうしい量見た！

また、ある晩は、ちゃんと、適當の距^{へだた}りを置いて、堀^{へい}の角^{かど}に陣取^{しきふ}っている夢を見た。その結果、なんにも知らずに、眠^かったまま、敷布^{しきふ}の中へしてしまったのである。彼は眼をさました。

自分のそばには、あるはずの堀^{へい}がないので驚いた。

ルピック夫人は、怒るところを怒らない。かに、寛大に、母親

こんな話をして

もいだろうか。

しなければならな

いだろうか。ほか

の者が、心もから

だも真白になつて、

洗礼を受けようと

いう年に、にんじ

んはまだないところ

ろがあつた。ある

晩は、いい出せず

に我慢^{がまん}をしすぎた

のである。

からだをだんだ

ん大きくつて、苦

しい要求を抑えよ

うと思つた。

らしく、始末をしてやる。そればかりか、翌朝は、甘ったれた小僧のように、にんじんは、寝床^{ねどこ}を離れる前に食事をする。

さよう、寝床へスープを持って来てくれるのである。それは、なかなか手のかかったスープで、ルピック夫人が、木のでもって、少しばかり例のものを溶かし込んだのである。なに、ほんの少しである。

枕もとには、兄貴のフェリックスと姉のエルネスチヌが、陰険な顔つきをしてにんじんを見張っている。今にも、合図さえあれば、大きな声を立てて笑う用意をしているのである。ルピック夫人は、で少しづつ、息子^{むすこ}の口へ入れてやる。彼女は、横目で、兄貴のフェリックスと姉のエルネスチヌに、こういつているらしい――

「さ、いいかい！ 用意はできたね！」

「ああ、いいよ！」

今からもう、二人は、そら、めつ面^{つら}だと、面白^{おもしろ}がつている。近所の人たちを招待できるものなら招待するところだったに違いない。さて、ルピック夫人は、最後の眼くばせで、上の子供たちに問いかける――

「さ、いいね！」

ゆっくり、ゆっくり、最後のひとをあげる。それを、にんじんが大きく開^あけた口の中へ、喉^{のど}の奥まで突つ込む。流し込む。押し込む。そして、嘲^{あざけ}るように、顔をそむけながら、こういう――

「ああ、汚^{きた}ない。食べた、食べた。自分のだよ、おまけに……。

昨夜のだよ」

「そうだろうと思つた」

こう、なんでもなく、にんじんは答える。みんなが当てにしていたような顔つきはしない。

彼は、そういうことにれている。あることに慣れると、そのことはもうおかしくもなるともない。



なる。日が暮れて、鶏小舎を閉めると、彼は、第一の用心をしておくのであるが、それも無駄で、明日の朝までは、とても持ちそうにない。晩飯を食い、ぐずぐずしていると、九時が鳴る。もうとつくに夜である。そして、その夜は、いつまでも続くのである。

もう何度も、のことで不幸な出来事が起こったので、にんじんは、毎晩、警戒を怠らないようにしている。夏は、楽なもんだ。九時に、ルピック夫人が寝ておいでという、にんじんは、自分から進んで、外をひとまわりして来る。それで、ひと晩中、安心である。

冬は、この散歩が、なかなか苦に

にんじんは、第二の用心をしておかなければならない。

で、その晩も、毎晩のように、自分で自分に尋ねてみる――

「したいか、したくないか？」

平生は、「したい」と答える。もっともそれは、いよいよ我慢ができないか、さまなければ、月が出ていて、その光で元気をつけられるような時である。時としては、ルピック氏や兄貴のフェリックスがお手本を示してくれる。それに、要求の程度からいって、いつもそんなに遠くへ行くには及ばない。ほんとうなら、通りの溝まで行くのである。それは、ほとんど野原の真中といったいい。たいていは、階段の下まで降りるだけである。その時々で違ふ。

ところが、その晩は、雨が窓ガラスを叩き、風が星を消してしまい、胡桃の木が牧場の中で暴れている。

「こういうこともあるんだ」――落ち着いて思案をしたあげく、にんじんは結論を与える――「したくない！」

彼はみんなに「お休みなさい」といい、に火をつけ、それから、廊下の突き当りで右側の、がらんとして、人つ気のない自分の部屋にはいる。着物を脱ぐ。横になる。ルピック夫人の入来を待つ。彼女は、掛布団の縁をぎゅっとひと息に押し込んでくれる。それから蠟燭の火を消す。その蠟燭は置いて行くが、マッチなるものは残して行かない。戸を閉めて鍵をかける。彼が臆病だからである。にんじんは、その時まず、一人でいることの快楽を味わうのだ。彼は暗闇の中でいろんなことを考えるのが好きである。一日中のことを思い出してみる。幾度となく、危いところを助かってよかった。明日もやっぱり運がいいように。彼は、二日続けて、

母親が自分のほうに注意を向けてくれなければいいがと思う。そういう空想をしながら、彼は眠りに就こうとする。

と、眼をつぶるかつぶらないうちに、彼はまた例の張りつめて来るような気持を感じ出す。

——やっぱり仕方がない。

心の中で、にんじんは呟く。

だれでも、普通なら起きるところだ。しかし、にんじんは、寝台の下に、小便壺が置いてないことを知っている。ルピック夫人が、どんなに、そんなはずはないとつても、彼女は、いつも、それを持って来て置くのを忘れるのである。それに第一、壺があったって、なんの役にも立たないわけである。どうせ、にんじんは寝る前に用心をするんだから。

で、にんじんは、起きるかわりに、理窟をこねる。

——かれ早かれ、降参しなければなるまい。ところが、我慢すればするほど、溜るわけだ。今すぐやっちゃえば、ぽつちりしか出ないんだ。すると、敷布が濡れても、からだのぬくもりで、乾くの人間はかからない。これまでの経験で、そうすりゃきつと、母さんに見つからずにすむだろう。

にんじんは、ほっとする。ゆうゆうと眼を閉じる。そして、ぐっすり眠り込んでしまうのである。

二

にわかに、彼は眼を覚ます。そして、下腹の加減はどうかと耳を澄ましてみる。

——やあ、こいつあ、しいぞ！

さっきは、だと思った。話がうますぎた。昨晚、横着をしたのがわるかったのだ。天罰靦面である。

彼は寝床の上に坐り、思案してみる。戸には鍵がかかっている。窓にはがはまっている。外に出るわけにいかない。

それでも、彼は起き上がって、戸と、窓の鉄格子にさわってみる。それから床の上にいになり、両手を寝台の下につつこんで權のように動かす。ないことがわかつている壺を捜してみるのである。

彼は寝床にはいる。そして、また起きる。眠るよりも、からだをゆすぶるか、歩き廻るか、を踏むほうがいい。両方の握り拳で、つつぱってくる腹を抑える。

「母さん！ 母さん！」

聞こえては困ると思うので、力の抜けたような声を出す。なぜなら、もし、ルピック夫人がここへ姿を現わそうものなら、にんじんは、けろりとなおってしまい、まるで彼女を馬鹿にしているとしか思えないからである。明日になって、呼んだということが嘘をつくことにならなければ、それでいいのである。

それに、声を立てるといっても、声の立てようがないではないか。全身の力は、ことごとく、禍を延ばすために使い果している。

やがて、極度の苦痛が襲ってきて、にんじんは、踊りはじめる。壁にぶつかって行く。それから、ね上がる。寝台の鉄具にぶつかる。椅子にぶつかる。暖炉にぶつかる。そこで彼は、勢いよく焚口の仕切り戸を開ける。そして、からだを捻じ曲げ、兜を脱いで、

絶対の幸福に浸りながら、暖炉の薪台の上へ、全身を、根こそぎ、叩きつける。

部屋の暗さが度を増してくる。

三

にんじんは、やっと朝がた、眠りに就いた。そして、寝坊をしている。ルピック夫人は戸を開けると、さも、どっちを向いていても鼻は利くというように、顔をしかめながらいう――

「なんて変な臭いだい」

「母さん、おはよう」

と、にんじんはいう。

ルピック夫人は、敷布を引きずり出す。部屋のを嗅いで廻る。見つけるのに造作はない。

「僕、病気だったの。それに壺がないんだもの」

にんじんは、急いでこういう。それが一番都合のいい弁解だと思つたからである。

「嘘つき！ 嘘つき！」

ルピック夫人はこういいながらどこかへ出て行く。やがて壺を匿して持ってくる。それを、手早く寝台の下に押し込む。立っているにんじんを突き倒す。家じゅうのものを呼ぶ。それから大声でいう――

「こんな子供をもつなんて、いったい、何の因果だろう……」

それから、今度は、とバケツとを持ってくる。火でも消すように暖炉へ水をかける。寝具をふるう。そして、忙しそうに、訴え

るように――

「息がつまる、息がつまる」

というのである。

それから、また、にんじんの鼻先で、たっぷりの文句を並べる

「ない子だね！ まるで無神経だ。いよいよ当り前じゃなくなってきた！ これじゃ、とおんなじだ！ 畜生だって、壺をやっとけば、その使い方ぐらいわかる。それにお前どうさ。するにも事をかいて、暖炉の中なんぞへ、だらしがない……。あたしや、もう、お前のおかげで頭が変になるよ。それこそ、気が狂って死にまうから、気が狂って……」

にんじんは、シャツ一枚で、素足のまま、壺を見つめている。夜中には、この壺はなかった。それに、今になって、その、寝台のもとに壺がある。この空っぽの、白い壺を見ると、彼は眼が眩む。それでもまだ、そんなものはなかったなんていい張ると、今度はずうずうしい奴だということになるのである。

家のものが、やれやれという顔をしている。口の悪い近所の奴らが列を作っている。郵便屋まで来ている。そういう連中が、うるさくいろんなことを問いかけるので、とうとう――

「嘘だったら首をやる」――こう、壺の上に眼を注ぎながら、にんじんは答える――

「僕あ、もう知らないよ。勝手にしろい」



「メロンはもうな

いよ、お前の分は……」と、ルピッ

ク夫人はいう――

「それに、お前はあたとおんなじで、メロンはいだ

ね」

「そうだったかも

知れない」

と、にんじんは考

えるのである。

好き嫌いは、こ

うやって、人が勝

手に決めてくれる。

大体において、母

親が好きなものだ

けを好きとしておかなければならない。チーズが来る。

「こりゃ、にんじんは食べないにきまつてる」

と、こころルピック夫人がいうので、にんじんは――

「母^{かあ}さんが、きまつてるといふんだから、食べてみなくたっていい」と思ふのである。

それに、もうじき、誰も知らない場所で、この上もなく奇妙な欲望を満たす暇があるではないか。デザートになると、ルピック夫人が彼にいうのである――

「このメロンの皮を兎に持つてつておやり」

にんじんは、血をひっくり返さないように、できるだけ水平に持つて、で使いに出かける。

小舎^{こや}にはいつて行くと、兎どもは、に、耳の帽子を深くかぶり、鼻を仰^{あおむ}向け、太鼓でも叩^{たた}くように前足を突き出し、がさが彼のまわりにたかつて来る。

「こら、待て、待て」と、にんじんはいう――「ちょっと待つてくれ、半分ずつにしよう」

そこでまず、糞^{ふん}だとか、根だけ食い残したのぼろ菊^{きく}だとか、玉菜^{たまな}の芯^{しん}だとか、葵^{あおい}の葉^はだとかいうものの堆^{うすたか}高く積まれた上に、彼は腰をおろす。それから、兎どもにはメロンの種をやり、自分は汁を飲む。それは、葡萄^{ぶどう}液^{えき}のように甘い。

そこで今度は、みんなが残した甘味のある黄色いところ、口へ入れて溶^とけるところを残らず歯^{かじ}で齧^{かじ}り取る。そして、緑色のところだけを、尻^{しり}の上で丸まつている兎にくれてやる。

小舎の戸は閉^しまつている。

午睡の時間を照らす太陽が、屋根の透^{すか}して、その光線的一端を冷^ひえびえした蔭の中に浸している。



に——災難にぶつかるのは、常にそういう瞬間に限られている
——にんじんは、額の真中^{まんなか}に、鶴嘴の一撃を喰^くったのである。
すると間もなく、兄貴のフェリックスを寝台の上に運んで行き、
そつと寝させなければならぬ。弟の血を見て、ふらふらとな
ったからである。家のもの^{うち}は、みんなそこへ来て、丈^せ伸びをして
いる。それから、恐る恐る溜息^{ためいき}をつく。

兄貴のフェリッ
クスとにんじんと
が、一緒に並んで
働いている。めい
めいをもっている。
兄貴のは、蹄鉄屋^{ていてつや}
に注文して鉄で作
らせたのである。
にんじんは、木で
自分のやつをひと
りで作った。二人
は庭作りをしてい
る。仕事はぐんぐ
んはかどる。一所
懸命の競争である。
突然、それは実に
思い設けない瞬間

——塩はどこにある？

——冷たい水を少し……頭を冷やすんだから……。

にんじんは、椅子の上にあがっている。みんなの頭の間から、
肩越しにのぞくためである。額は布片^{きれ}で鉢巻をし、その布片がも
う赤くなっている。血が滲^{にじ}み出して、ひろがっているのである。
ルピック氏はにんじんにいった——

「ひどい目にやがった」

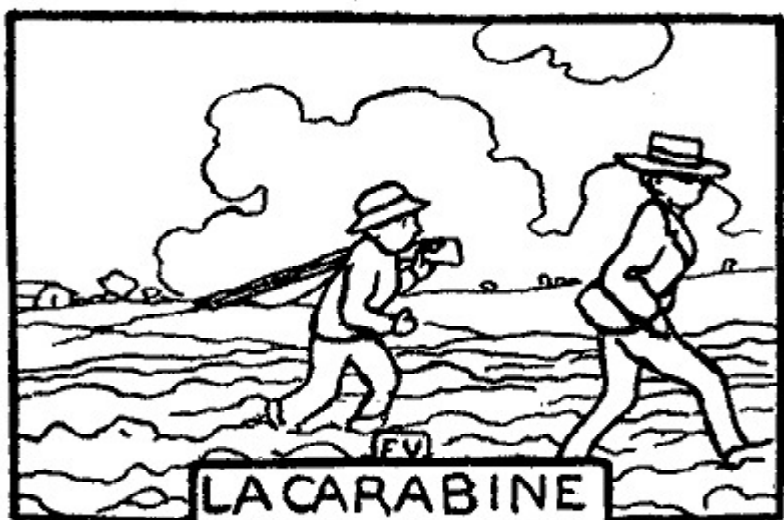
それから、姉のエルネスチヌは、傷口にをしてやりながら

「バタの中へを開^あけたようだわ」

彼は声を立てなかった。なぜなら、それは、何の役にも立たな
いということ、あらかじめ警告^{きこく}されていたから。

ところが、そのうちに、兄貴のフェリックスが、片方の眼を開
ける。それからもう一方の眼を開ける。怖^{こわ}かっただけで、無事に
すんだのである。その顔色が、だんだん血の氣^けを帯びてくるにつ
れて、不安と驚^{きやう}愕^{がく}が、人々の心から消えて行く。

「いつでもこの通りだ」とルピック夫人はにんじんに向かつてい
う——「お前、氣をつけることはできなかったのかい。しょうが
ないぽんつくだね」



ルピック氏は、

たちにいう。

「鉄砲は、二人で

一あればたくさん

さ。仲の善い兄弟

は、なんでも催合

いにするもんだ」

「ああ、それでい

いよ」と兄貴のフ

エリックスは答え

る——「二人で代

りばんこに持つか

ら……。なあに、

時々になんじんが貸

してくれりや、僕

それでいいんだよ」

になんじんは、い

いとも、わるいともいわない。どうせ油断はならないと思ってい

る。
ルピック氏は、緑色の袋から鉄砲を出して、ねる——

「初めにどっちが持つんだ？ そりや、さんだろうな」

兄貴のフェリックス——その光栄はになんじんに譲るよ。先へ持て。

ルピック氏——フェリックス、今日はなかなか感心だ。そうなら
そうで、父さんにも考えがあるぞ。

ルピック氏は、鉄砲をになんじんの肩にのつけてやる。

ルピック氏——さ、行つて遊んでこい。喧嘩をするんじゃないぞ。

になんじん——犬は連れてくの？

ルピック氏——連れて行かんでええ。お前たち、代りばんこに犬

になれ。それに第一、お前たちほどの猟師が、獲物に傷だけ負

わせるなんていうことはない。一発で仕留めるんだ。

になんじんと兄貴のフェリックスは出かけて行く。服装は簡単だ。

不断のままである。長靴がないことは少し残念だが、ルピック氏

は常々、ほんとうの猟師は、そんなものを眼中に置かないといっ

ている。ほんとうの猟師は、ズボンを踵の上に引きずっている。

決してまくり上げたりなんぞしない。それで、泥の中や、耕した

土の上やを歩く。すると、長靴がひとりでに出来て、膝のところ

までくる。この長靴は丈夫で、いや味がない。これは、女中が大

事にするようにいつかつている。

「手ぶらで帰るようなことはないよ、お前は……」

と、兄貴のフェリックスがいう。

「そりや、大丈夫だよ」

と、になんじんもいう。

肩が殺げているので、なんだか窮屈だ。銃身がうまくのつか
っていない。

「そらね、いくらだって持たしてやるから、きるほど……」

兄貴のフェリックスがいう。

「やっぱり、兄さんだよ」

と、にんじんはいう。

一群の雀が飛び立つと、彼は、兄貴のフェリックスに動くなという合図をする。雀の群れは生籬から生籬に飛びうつる。二人の猟師は、雀が眠ってでもいるかのように、背中を丸くして、そうと近づいて行く。雀の群れはじっとしていない。ちゅうちゅう啼きながら、またほかへ行って止まる。二人の猟師は起ち上がる。兄貴のフェリックスは、それに悪口雑言を浴びせかける。にんじんは、心臓がどきどきしているにもかかわらず、それほどあせっている様子はない。自分の腕を見せなければならぬ瞬間を懼れているからである。

もしも失敗したら！ 延びるたびにほっとするのだ。

ところが、今度こそは、雀のほうで、彼を待っているらしい。

兄貴のフェリックス——まだつなよ。遠すぎるぞ。

にんじん——そうかなあ……。

兄貴のフェリックス——当りキよ。からだを低くすると勝手が違ってくるんだぜ。すぐそばだと思っても、実際はかなり遠いんだ。

そこで、兄貴のフェリックスは、自分のいったとおりだということを示すために、いきなり顔を出す。雀は、驚いて飛んで行ってしまふ。

が、そのうち、一羽だけ、しなった枝の先に止まったまま、その枝に揺られている。尾をぴんと上げ、頭を左右にかしげ、腹をむき出している。

にんじん——しめたぞ、こいつなら撃てら、大丈夫……。

兄貴のフェリックス——どら、どいてみる。うん、なるほど、なやつだ。さ、早く、鉄砲を貸せ。

すると、もう、にんじんは、鉄砲を取り上げられ、両手をつばにして、口を開けているのである。その前で、兄貴のフェリックスが、彼の代りに、鉄砲を肩に当て、狙いを定め、引鉄を引く。そして、雀が落ちる。

それは、まるで手品のようだ。にんじんは、さっきまで、この鉄砲を、それこそ、胸に抱き締めていた。突然、彼はそれを失った。ところが、今また、それが彼の手に戻ってきた。いうまでもなく、兄貴のフェリックスが返したのである。兄貴のフェリックスは、それから、自分で犬の代りもする。駈け出して行って雀を拾う。そうしていう——

「ぐずぐずしちゃだめだよ。もっと急がなくっちゃ……」

にんじん——ゆっくり急ぐよ。

兄貴のフェリックス——ようし、膨れっ面をするんだね。

にんじん——だって……。じゃ、歌をえばいいのかい。

兄貴のフェリックス——雀がとれたんだから、なんにもいうことはないじゃないか。もしか、らなかつたらどうする！

にんじん——うん、僕あ、そんな……。

兄貴のフェリックス——お前だって、兄さんだって、おんなじこと。今日は兄さんがとった、明日はお前がとる、それでいいだろう。

にんじん——明日ったって……。

兄貴のフェリックス——きつとだよ。

にんじん——わかるもんか。きつとなんて、明日になりや……。

兄貴のフェリックス——もしだったら、なんでもやらあ。それでいいだろう。

にんじん——まあいいや……。それより、もつとろうよ。僕が撃つてみら……。

兄貴のフェリックス——だめだよ、もう遅いから。さ、帰って、こいつをさんに焼いてもらおう。そら、そっちへやるよ。カクシへ入れとけ。なんだい、馬鹿だなあ、おい、くちばし嘴を出しとけよ。

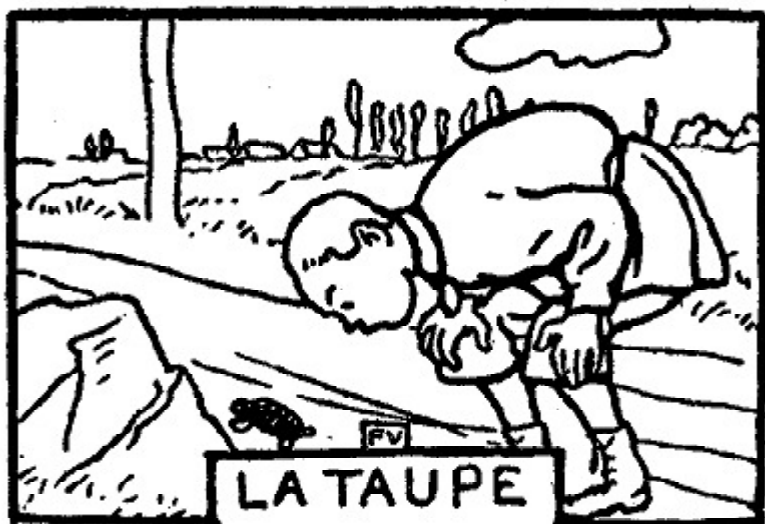
二人の猟師はへ帰って行く。その途中でどこかの百姓に会うと、その百姓はお辞儀じぎをしてこういいかける——

「ちゃん、お前たちや、まさかお父とつつあんを撃つたんじゃあるめえな」

にんじんは、いい気持になり、さっきからのことを忘れてしまふ。彼らは、仲よく、りで帰って来る。ルピック氏は二人の姿を見かけると、驚いてこういう——

「おや、にんじん、まだ鉄砲をもっているな。ずっとお前がもち通しか？」

「うん、たいてい……」
と、にんじんは答える。



にんじんは道ばたで、煙突掃除のように黒い一匹の土竜を見つける。いいかげん玩具にしたあげく、そいつを殺そうと決心する。そこで、何べんも空中へ抛り上げるのであるが、それは石の上へ落ちるようになまく投げるのである。初めは、なかなか工合よく、すらすら行く。

土竜はもうが折れ、頭が割れ、背中が破れ、根っからいぶどくもなさそうだ。

すると、驚いた。にんじんは、土竜がどうしても死なないということに気がつく。の高さよりも高く、天まで届くほど抛り上げても、さっぱり効き目がない。

「こね！ 死なねえや」

なるほど、血まみれになった石の上で、土竜はびくびく動く。

脂肪だらけの腹が、ごりのように顫え、その顫え方が、さも生命のある証拠のように見える。

「こね野郎！」と、にんじんは躍気になって怒鳴る——「まだ死なねえか」

彼はまたそれを拾い上げる。する。そして、方法を変える。

顔をにし、眼に涙を溜め、彼は土竜に唾をひっかける。それから、すぐそばの石の上を目がけて、力まかせに叩きつける。

それでも、例のな腹は、相変わらず動いている。

こうして、にんじんが、死にもの狂いになって、叩きつけられ叩きつけるほど、土竜は、よけい死なないように見えてくる。



にんじんと兄貴のフェリックスは、夕方のお祈りから帰ると、急いで家へはいる。それは、四時のおやつだからである。

兄貴のフェリックスは、バタやジャムをつけたパンをうことになっている。それから、にんじんは、なんにもつけないパンである。なぜなら、彼は、あんまり早く大人のふりをしようと思つて、みんなの前で、自分は食いしんぼうじゃないと宣言してしまつたからである。彼はなんでも自然のままが好きだ。平生、好んで、パンを何もつけずに食うのである。で、その晩もやはり、兄貴のフェリックスより早く歩く——自分が先に貰いたいからである。

時として、なんにもつけないパンは固い。すると、にんじんは、

敵に向かうようにそれにぶつかつて行くのである。ぎゅっと掴む。齧りつく。頭をぶつける。粉ごなにする。そして、かけらを飛ばす。まわりに居並ぶ親同胞は、珍しそうにそれを見ている。駝鳥のような彼の胃の腑は、石だらうが、青錆のついた古銅貨だらうが、わけなく消化するに違いない。

要するに、彼はちつとも食べ物の好みをしなない。彼は戸のを引く。閉まつているのである。

「さんも母さんもないんだよ、きつと……。足で蹴つてごらん、よう」

と、彼がいう。

兄貴のフェリックスは、「こん畜生」といいながら、釘の頭が並んでいる重い戸にぶつかつて行く。戸はしばらく音を立てている。それから二人は、力を併せて、肩で押す。むだである。

にんじん——たしかに、いないよ。

兄貴のフェリックス——どこへ行つたんだろう。

にんじん——そこまではわからん。坐ろう。

階段の尻に冷たく、二人は近來稀な空腹を感じる。欠伸をしたり、心窩を握。拳で叩いたりして、その激しさを訴える。

兄貴のフェリックス——帰るまで待つていると思つたら間違いだぞ。

にんじん——そいじゃ、ほかにうまい工夫があるかい。

兄貴のフェリックス——待つてなんかいるもんか。え死をしたか

ないからなあ、おれは……。今すぐ食いたいんだ。なんでもいい、草でもいい。

にんじん——草……！ そいつあい。父さんや母さんも、それを聞いたらぎやふんだ。

兄貴のフェリックス——だって、サラダを食べるじゃないか。こだけの話だけど、なんか、サラダとおんなじに軟かいよ。つまり、油と酢をつけないサラダさ。

にんじん——かきまわすこともいらぬし……。

兄貴のフェリックス——賭けをしよう。僕も、苜蓿なら食べるよ。お前は食べられないぜ、きつと。

にんじん——どうして、さんに食べられて、僕に食べられないんだい？

兄貴のフェリックス——さ、いいから賭けをしよう。いやか？

にんじん——うん、だけど、その前に、お隣りへ行つて、パンを一片ずつと、それへヨーグルトを少し貰ってきたら？

兄貴のフェリックス——僕あのほうがいい。

にんじん——行こう。

やがて苜蓿の畑が、美味そうな緑の葉を、彼らの眼の下にひろげる。その中にはいつて行くと、二人は、面白がつて靴を引きずる。軟かい茎を踏み切る。細い道をつける。

——なんだろう、どんな獣だろう、ここを通つたのは……？

いつまでも、人は心配をして、こういうに違いない。

ぼつぼつ疲れかげんになってきた脛のあたりへ、ズボンを透して、ひやりとしたものが浸み込んでくる。

彼らは畑ので止まる。そして、べったり、腹這いになる。

「いい気持だね」と、兄貴のフェリックスがいう。

顔がくすぐったい。それで二人は、むかし同じ寢床の中で寝た時のようにふざけるのである。あの頃、すると、ルピック氏が、隣りの部屋から怒鳴つたものだ——

「もう眠ろよ、餓鬼ども！」

彼らはじさを忘れ、水夫の真似をして泳ぎを始める。それから犬の真似をし、蛙の真似をする。二つの頭だけが浮き出ている。彼らは、砕けやすい小さな緑の波を手でかきわけ、足で押しのける。波は、崩れたまま、もとの形を取らない。

「僕、頃までつくよ」

と、兄貴のフェリックスがいえば、

「こら、こんなに進むぜ」

と、にんじんがいう。

ひと息ついて、もっと静かに、自分たちの幸福を味わうべきである。

そこで、をついて、土竜の掘つた塚を見渡してみる。それは、老人の皮膚にもりあがる血管のように、電光形を描いて地面にもりあがつている。時に見失つたかと思うと、また空地へ行つてひよっこり顔を出している。その空地には、上等な苜蓿を喰い荒す性のよくない寄生虫、コレラのような冤糸子が、赤ちゃけた繊維の髭を伸ばしている。土竜の塚は、そこで、インドふう建てられた小屋そのまま、ひと塊りになって小さな村を形づくっている。

「することはこれっきりじゃないぜ。おい、食べよう。はじめる

よ。僕の領分にさわっちゃいけないよ」

兄貴のフェリックスはこういう。そして、片腕を半径に、彼はを描く。

「僕あ、残ってるだけでたくさんだ」

と、にんじんがいう。

二つの頭がかくれる。もうどこにいるかわからない。

風が静かな吐息を送って、苜蓿の薄い葉をひるがえすと、蒼白いその裏が見える。そして、畑一面に身ぶるいが伝わる。

兄貴のフェリックスは、しこたま草を引き抜いて、そいつを頭の上に被り、さかんに口の中へ詰め込むふりをする。そして、乳を放れたばかりの犢が、草を食う時に歯を噛み合わせる、その音の真似までして見せる。彼は根でもなんでも食ってしまうように見せかける。世の中を識っているからである。ところが、にんじんは、それをほんとだと思う。ただ、もっと上品に、美しい葉のところだけを選ぶのである。

鼻の先でそいつを曲げ、口へもってきて、悠然と噛みしめる。どうして急ぐ必要がある？

テーブルを時間で借りたわけでもなく、橋の上に市が立っているわけでもない。

歯をませ、舌を苦くし、胸をむかむかせながら、彼は呑み込む。なるほど御馳走である。



が、いつものように、彼の湯呑みに葡萄酒を注ぐとすると、彼はこういった——

「僕いらないよ。渴いてないから」

夕飯の時、彼はまたいった——

「僕いらないよ。喉渴いてないから」

「なかなか経済だね、この子は」——ルピック夫人はいう——「み

にんじんは、こ

れからもう、食事の時に、葡萄酒を飲まないことになった。彼はこの数日の間に葡萄酒を飲む習慣をなくしてしまったのだが、あんまり造作がないので、親同胞も、出入りの人たちも、これは意外に思った。そもその話はこうである。

ある日の朝、母親のルピック夫人

んな大助かりだ」

そういうふうで、彼は、はじめの一日、朝から晩まで、葡萄酒を飲まずにいた。陽気が穏かで、それに、ただ、なんということなしに、喉が渴かなかつたからである。

翌日、ルピック夫人は、食器を並べながら、彼に訊ねた——

「今日は、葡萄酒を飲むかい、にんじん？」

「そうだなあ」と彼はいった——「まあ、どうだかわからない」

「じゃ、好きなようにおし」と、ルピック夫人はいった——「湯呑みがしかったら自分で戸棚から出しといで」

彼は、出しに行かない。なのか、忘れたのか、それとも、自分で取りに行くのはいけないと思つてか？

みんなが、そろそろ意外な顔をし出す。

「えらくなつたもんさ」と、ルピック夫人がいう——「お前には、そんな芸当もできるんだね」

「しい芸当だ」——ルピック氏はいう——「そいつは、と、なんかの役に立つさ。ことにおつつけ、一人きりで、駱駝にも乗らず、砂漠の中で道に迷いでもしたような時にはなおさらだ」

兄貴のフェリックスと姉のエルネスチヌは、断乎としていい放った。

姉のエルネスチヌ——「きつと一週間ぐらい飲まないでいられてよ」

兄貴のフェリックス——「なあに、この日曜まで、三日もてば、大したもんだ」

「だって」と、にんじんは、薄笑いを浮かべながらいう——「だって、喉が渴かなくなったら、僕、いつまでだって飲みやしないよ。兎やをみてごらん。あれのどこがえらいんだい」

「天竺鼠とお前とは別だよ」

兄貴のフェリックスがいう。

にんじんは、にさわった。そこで彼らに、これでもかというところをみせることになるのである。ルピック夫人は、相変わず、湯呑みを出し忘れていた。彼は、決してそいつを催促しない。皮肉なお世辞をいわれても、真面目に感心したようなふうをされても、彼は、等しく我れ閑せずで聞き流していた。

「病気でなけりや、気が狂ったんだ」

あるものは、こういった。また、あるものは、こうもいった

「内証で飲んでるんだ」

だが、何事も、珍しいうちが花だ。舌がちつとも渴いてないという証拠をみせるために、にんじんが、舌を出して見せる回数は、だんだんにつく。

両親も、近所の人たちも、根気負けがしてきた。ただ、なんでもない人が、どうかしてその話を聞くと、また両腕を高くげた

「いっちゃいけない。自然の要求というものは、こりゃ、誰一人おさえることはできないんだから……」

医者に相談すると、そういう例はどうも奇妙には奇妙だが、しかし、要するにあり得ないということは、なに一つないわけだと宣言した。

ところで、にんじんは、自分ながら不思議だった。そのうちに苦しくなりはせぬかと思っていたからである。彼は、規則正しく強情を張りさえすれば、どんなことでもできるという事実を確かめた。彼は、最初から、苦しい欠乏に堪え、一大難関を突破しなければならぬと覚悟した。それが、いっこう、痛くも痒くもないのである。以前よりも、からだの調子はいくらいいだ。これなら、喉の渴きばかりでなく、腹が空くのだって我慢できないはずはない！ 飯なんか食わなかったってもいい。空気だけで生きてみせる。

彼は、もう、自分の湯呑みのことさえとくに忘れていた。湯呑みは、長い間使わずについてある。すると、女中のオノリイヌが、その中へ、ランプの金具を磨く赤い磨き砂を容れてしまった。



ルピック氏は、

それでも、機嫌きげんのいい時には、自分から子供たちの相手になって遊ぶようなこともある。

裏庭こみちの小径せみちでいろんな囁はなをして聞かせるのである。

すると、兄貴にいさまのフリックスとにんじんとが、しまい

には地べたの上を転ころがりまわる。彼

らはそんなにはしやぐ。今朝も、そ

ういうふうで、三

人がへとへとになっていると、そこへ、姉のエルネスチヌがやって来て、お昼の用意ができたという。やっと、それで鎮しずまった。

家族が集まると、どの顔も、みんな苦虫にがむしを噛かみつぶしたようだ。

いつものとおり、大急ぎで、口もきかずに飯を食う。もし、これが料理屋なら、そろそろ、テーブルを次のお客に明け渡しても差支えないのだが、その時分になってルピック夫人は――

「パンのかけらを一つ、こっちへちようだい、砂糖煮を食べちまうんだから……」

誰にそういったのか？

たいがいの場合、ルピック夫人は、自分の食べるものは自分で取るのである。そして話をするといえば犬相手である。彼女は、犬に野菜の値段をいつて聞かせる。そして、当節とうせつ、わずかの金で、六人の人間と一匹の獣とを養って行くことが、どんなに困難かという説明をしたりする。

「馬鹿おいしい」と、彼女は、お愛想に喉のどを鳴らし、靴拭くつぬぐいを尻尾しつぽで叩たたいているピラムに向かつていうのである――「お前にはわからないんだよ、この家うちを持って行くのに、あたしがどんなに苦勞くろうしてるか……。お前も、男の人たちみたいに、台所で使うものは、みんなただで手にはいると思ってるんだらう。バタが高くなると、卵が法外な値にならうと、そんなことはいつこう平気なんだらう」

ところが、今日という今日、ルピック夫人は、大変なことをしでかした。慣例を破って、彼女は、じかにルピック氏に言葉かけたのだ。相手もあらうに、彼女が砂糖煮を食べてしまうためにパンのかけらを請求したのは、正しく彼に向かつてだ。もう、誰も、それを疑う余地はないのである。第一彼女はルピック氏の顔を見つめている。第二に、ルピック氏のそばに、パンがある。彼はおどろいて躊躇ちゅうちよしている。が、やがて、指の先で、自分の皿の底からパンのかけらを掴つかみ上げ、真面目まじめに、無愛想に、そいつをルピック夫人めがけて抛ほうつたものである。

戯談じやうたんか？ 喧嘩けんかか？ それがわからない。姉のエルネスチ

イヌは、母親のために侮辱を感じ、なんとなく胸騒ぎがしている。

「おやじは、あれで、今日は気分がいいんだ」

兄貴のフェリックスは、椅子の脚を傍若無人にがたがたいわせながら、こう考えている。

にんじんはどうかというと、ぴりっとも身動きをせず、を壁土のように固くさせ、耳の奥がごろごろ鳴り、頬ぺたを焼林檎で膨らませながら、じっとしている。もしもルピック夫人が、息子や娘の前で、人間の屑みたいな取り扱われながら、すぐに食卓を離れずにいたら、それこそ彼は、屁でもしてやりたかったのだ。



ルピック氏は、

今朝、パリから帰って来たところである。をあける。

お土産が出る。兄貴のフェリックスと姉のエルネスチイヌへの素敵なお土産だ。それもちょうど——なんと
いう不思議なことだろう——彼らがひと晩じゅう夢に見たというものばかりだ。それからあとで、ルピック氏は、両手を後ろ

へまわし、にんじんのほうをからかうように見ている——「今度はお前だ、なにが一番欲しい。ラッパか、それともピストルか？」

事実、にんじんは、それほど向こう見ずではないのである。むしろ、用心深いほうである。そこで、彼は、どっちかというラッパのほうがいい。手に持っていて飛び出す心配がない。しかし、ふだん聞くところによると、自分くらいの男の子は、飛び道具か

剣か、戦争で使う道具でなければ、遊んだって本気になれないらしい。年からいっても、火薬の臭いを嗅ぎ、物という物を粉碎したい年になっているのだ。おやじは子供を識っている。詭え向きのものを持って来てくれたに違いない。

「僕あ、ピストルのほうがいいや」

と、彼は、大胆にいった。てつきりを指したつもりなのだ。

それだけならいいが、彼は少し調子に乗り過ぎた。そして、こ
う付け加えた——

「匿したってだめだよ。ちゃんと見えてるんだもの」

「へえ、そうか」と、ルピック氏は、当惑していった——「お前はピストルのほうがいいのか。じゃ、また変わったんだね」

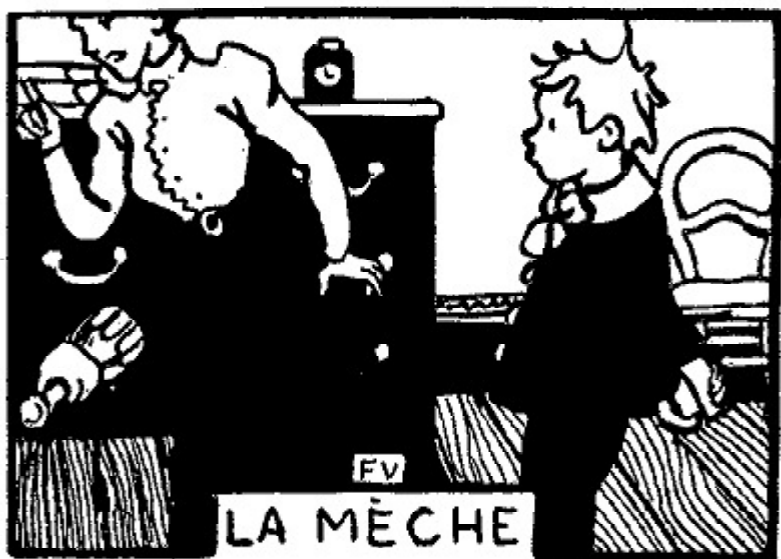
にんじんは、たちどころに、応えた。

「ううん、そうじゃないよ、ふざけていつてみたんだよ。心配しないだっていいよ。僕あ、大嫌いだ、ピストルなんか。さ、早く、ラッパをおくれよ。吹いてみせるからさ。僕、ラッパを吹くのが好きさ」

ルピック夫人——「そんなら、どうして嘘を吐くんさい。お父さんを困らせようと思ってだろう。ラッパが好きなら、ピストルが好きだなんていうもんじゃない。おまけに、なんにも見えないくせに、ピストルが見えているなんていうもんじゃない。だから、その罰に、ピストルもラッパも、お前にはあげないよ。よくこれを見とくとい。赤い総と、金の縁飾のある旗がついている。よく見たね。じゃ、もういいから台所へ行って、もう一人母さんがいるかどうか見といで。さっさと走って！ 指で

「笛を吹いてるがいい」

戸棚のてっぺんの、白い下着類を重ねた上で、三つの赤い総と、金の縁飾のある旗にくるまって、にんじんのラッパは、手も届かず、見えもせず、音も立てず、最後の審判のそのように、誰かに吹かれるのを待っている。



いに怒るぞと念を押すのである。が、姉は姉で、こういつてごまかすのである。

「ああ、また今日も忘れちゃった。わざとやったんじゃないわよ。この次の日曜から、きつとつけない」

で、相変わらず、彼女は、その時になると、指の先でひとい、彼の頭へなすってしまうのである。

「覚えてろ」

と、兄貴はいう。

今朝も、タオルにくるまり、頭を下へ向けているところを、姉のエルネスチヌは、またこっそりやったのだが、彼は、気がつかぬらしい。

「さ、いうことを聞いたげてよ。だから、ぶつぶついっこなしよ。あのとおり、罎びんは蓋ふたをしたまま暖炉だんろの上に置いたるじゃないの。感心でしょう。だけど、あたし、自慢はできないわ。だって、にんじんの髪の毛なら、セメントでなくちゃだめだけど、あんなのなら、ポマードもいらなくらいだわ。ひとりで縮ちぢれて、ふつくらしてるわ。あんなの頭は、花キャベツみたいよ。この分けたとこだって、晩までそのまま持つわよ」

「ありがとう」

と、兄貴のフェリックスはいった。

彼は、別に疑ようすう様子もなく起たち上がった。ふだんのように、頭へ手をやってほんとかどうか調べてもみない。

姉のエルネスチヌは、彼に服を着せてしまう。飾るところは飾った。それから白い絹の手袋をはめさせる。

「もういいんだね」

タイを選んでやり、爪を磨いてやり、祈祷書を持たせる。一番大きなのをにんじんに渡すのである。だが、なんといつても、仕事は、兄弟たちの頭へポマードを塗ることだ。

これをやらないと、どうにも気がすまぬらしい。

にんじんは、それでも、おとなしくされるままになっている。しかし、兄貴のフェリックスは、あらかじめ姉に向かって、しま

と、兄貴のフェリックスはいう。

「素敵^{すてき}よ。まるでプリンスだわ」と、姉のエルネスチヌはいう——「それで、帽子さえかぶればいいんだわ。開き筆^{だんす}笥の中にあるから取ってらっしゃい」

だが、兄貴のフェリックスは、間違えている。彼は、開き筆笥の前を通り過ぎてしまう。急いで食器戸棚のほうへ行く。戸を開ける。水のいっぱいはいった水差しを取り上げる。そして、これを、平然と、頭へぶっつけたのである。

「ちゃんとそういつといたろう、エルネスチヌ」と、彼はいう——「僕あ、人から馬鹿にされるのは嫌いなんだ。そんな小^ちっぽけなくせして、この古強^{ふるつわもの}者をちよろまかそうったって、そりや無理だよ。こんどやったら、ポマードの鑊^{びん}を川ん中へぶち込んじゃうから……」

髪の毛はぺしゃんこになり、日曜の晴着^{はれぎ}から滴^{しずく}がたれている。そこで、びしょ濡^ぬれの彼は、着物を着替えさせてくれるか、日に当たって乾^{かわ}くか、そのどっちかを待っているのである。彼は、どっちでもいい。

「ひでえ奴^{やつ}……」と、にんじんは、じつと感心している——「あいつあ、怖^{こわ}いものなした。おれがあ^まの真似^{まね}をしたら、みんな大笑いをするだろう。ポマードが嫌いじゃないっていうふうに思わせとくほうが得^{とく}だ」

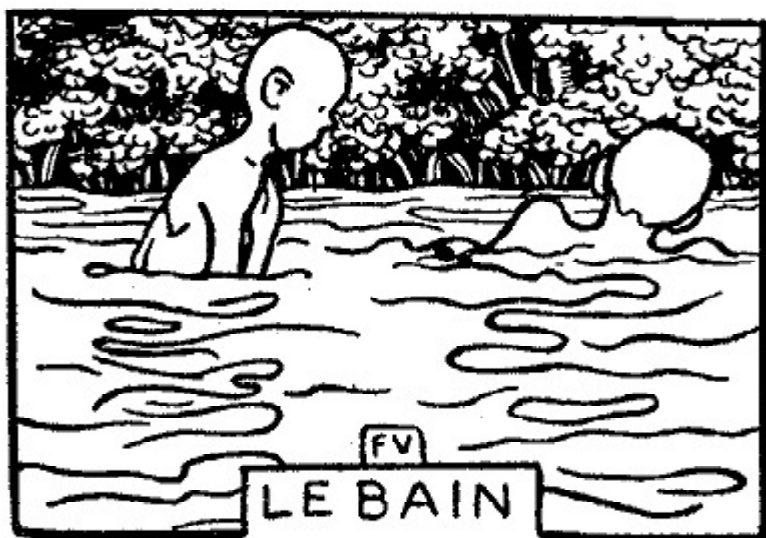
しかし、にんじんが、いつもの調子であきらめていても、髪の毛は、いつの間にか、彼の髻^{かたき}を打っている。

ポマードで無理に寝かせつけられて、は死んだ真似をしているが、やがて、むくむくと起き上がる。どこがどう押されてか、て

かてかの軽い鑄^い型^{がた}に、ところどころ凸凹^{こぼ}ができ、亀裂^{ひび}がはいり、ぱくりと口をあくのである。

藁^{わら}葺^ふ尾^び根^ねの氷が解けるようだ。

すると、間もなく、髪の毛の最初のひと束^{たば}が、ぴんと空中に跳^はね上がる、まっすぐに、自由に。



だ暑いぞ、きつと。

兄貴のフェリックス——僕あ、日が照ってる時のほうがいいや。
にんじん——それに、さんだつて、ここより水っ縁^{ぶち}のほうがいい

よ。草の上へ寝転^{ねころ}んどいでよ。

ルピック氏——さ、先へ歩け。ゆっくりだぞ。死んじまっちゃなんにもならん。

やがて時計が四

時を打とうとして
いるので、にんじ
んは、矢も楯^{たて}もた
まらず、ルピック
氏と、兄貴のフェ
リックスを起こす
のである。二人は、
裏庭の榛^{はしばみ}の木の
下で眠っていた。
「出かけるんだろ
う」と、彼はいう。

兄貴のフェリッ
クス——行こう。を
持つといで。

ルピック氏——ま

だが、にんじんは、早くなる足並みを、やつのことで緩^{ゆる}めて
いるのである。足の中を蟻^{あり}が這^はっているような気持だ。肩には、
模様のない、厳^{いかめ}しい自分の猿股と、それから、兄貴の、赤と青
との縞^{しま}の猿股をかついでいる。元氣いっぱいという顔つきで、彼
は喋^{しゃべ}る。自分だけのために歌を唱^{うた}う。木の枝へぶらさがって跳
ぶ。空中で泳ぐ真似^{まね}をする。さて兄貴にいう——
「ねえ、兄^{にい}さん、水へはいると、きつといい気持だね。うんと泳
いでやらあ」

「いえ！」

と、兄貴のフェリックスは、馬鹿にしきつた返事をする。

なるほど、にんじんは、ぴたりと鎮^{しず}まる。

彼は、今、乾ききつた低い石垣を、まっさきに、ひらりと飛び
越えた。すると、たちまち、眼の前を小川が流れているのである。
はしゃいでいる暇もなかった。

魔性^{まじよう}の水は、その表面に、寒々^{さむさむ}とした影を反射させていた。
歯をみ合わせるように、ひたひたと波の音を立て、臭いともつ
かぬ臭いが立ち昇っている。

この中へはいるわけである。ルピック氏が、時計を眺めて、め
ただけの時間を計っている間、この中でじつとしてい、この中で
動きまわらなければならない。にんじんは、顫^{ふる}えあがる。元氣を
出して、こんどこそはと思うのだが、いよいよとなると、またそ
の元氣がどっかへ行ってしまふ。水を見ると、遠くのほうが引
っ張られるようで、ついぐらぐらつとなるのである。

にんじんは、一人離れて、着物を脱^ぬぎはじめる。瘡^やせていると

ころや、足の恰好かっこうを見られるのがいやでもあるが、それより、ひとりで、誰だれ憚はばらず顫ふるえたいのだ。

彼は、一枚二枚脱いでいって、そいつを丁寧ていねいに草の上でたたむ。靴の紐ひもを結び合わせ、それをまた、いつまでもかかつてほどく。

猿股さるまたをく。短いシャツを脱ぐ。だが、もうしばらく待っているのである。彼は包み紙の中でべたべたになる林檎糖りんごとうのように汗をかいているからだ。

そうこうするうちに、兄貴のフェリックスは、もう川を占領し、わがもの顔に荒しまわっている。腕で、踵かかとで叩き、泡を立てる。そして、流れのまん中で、猛烈果敢もうれつかくんに、騒ぎ狂う波の群れを、岸めがけて追い散らすのである。

「お前はもう、やめか」

ルピック氏はにんじんにいった。

「からだを乾かしてんだよ」

やっと、彼は決心する。地べたに坐る。そして、水を触ふれてみる。その足の趾ゆびは、靴が小さすぎて擦りむけていた。そうしながら、また胃の腑ふのあたりをさすってみた。恐らく、食ったものがまだこなれていないだろう。それから木の根に沿ってからだを滑すべらせる。

木の根で、脛すね、腿もも、それから臀しりをひっかかれる。水が腹まで来ると、もう上へあがろうとする。逃げ出そうとする。濡ぬれた糸が、こまの紐を捲まくように、だんだんからだへ捲きついて行くような気持だ。が、からだを支えていた土塊つちくれが崩れる。すると、にんじんは滑り落ちる。姿を消す。水の底を這う。やっと立ち上がる。咳せき込み、唾つばを吐き、息をつまらせ、眼がかすみ、頭がぼうつとす

る。

「潜もぐりはうまいじゃないか」

と、ルピック氏はいう。

にんじんは、すると、

「ああ、だけど、僕あ、きらいさ。耳中へ水がっちゃった。頭が痛くなるよ、きつと……」

彼は、そこで、泳ぎの練習ができる場所、つまり、膝で砂の上を歩きながら、両腕を前のほうへ動かせるところをす。

「あんまり急にやるからいけないんだ。手を握ったまま動かしちゃだめだよ。髪の毛をるんじやあるまいし。その足を使うんだ、足を……。どうもしないじゃないか」

こうルピック氏がいうと、

「足を使わないで泳ぐほうがむずかしいんだよ」

と、にんじんはいう。

が、一所懸命にやってみようとする、兄貴のフェリックスがそれをさせない。しょっちゅう邪魔じゃまをするのである。

「こっちへおいでよ、にんじん。もつと深いところがあるぜ。こら、足がつかないや。沈むぜ。ごらんよ、ほら、僕が見えるだろう。そらこのとおり……見えなくなるよ。そいじゃ、こんだ、あの柳の木の後へ行ってるよ。動いちゃいけないよ。そこまで十ぺんで行くからね」

「数えてるよ」

と、にんじんは、がたがた顫えながら、肩を水から出し、まるで棒杭のように動かずにいるのである。

さらに、彼は、泳ぐうとしてからだを屈かがめる。ところが、兄貴

のフェリックスは、その背中へ攀じ登って、飛び込みをやる。

「こんだ、お前の番さ、ね、僕の背中へおあがりよ」

「僕あ、自分で練習してるんだから、ほつといておくれよ」
にんじんは、こういうのである。

「もう、よし。みんな出る。ラムをひと口ずつ飲みこい」と、ルピック氏は呼ぶ。

「もう出るの？」

と、にんじんがいう。

今になると、彼はまだ出るのが厭なのだ。水浴びに來たのに、これくらいでは物足りない。出なければならぬと思うと、水がもう怖くはないのである。さつきは鉛、今は、羽根だ。獅子奮迅の勢いで暴れまくる。危険など眼中にない。人を救うために、自分の命を棄ててかかったようだ。おまけに、誰もしてみろといわないのに水の中へ頭を突っ込む。溺れた人間の苦しみを味わうためである。

「早くしろよ」と、ルピック氏は叫ぶ——「さもないと、兄さんがラムをみんな飲んじまうぞ」

ラムなら、あんまり好きじゃないのだが、にんじんは、いう

「僕の分は、誰にもやらないよ」

そうして、彼は、それをのごとく飲み干す。

ルピック氏——よく洗わなかったな。くるつぷしに、まだ垢がついてる。

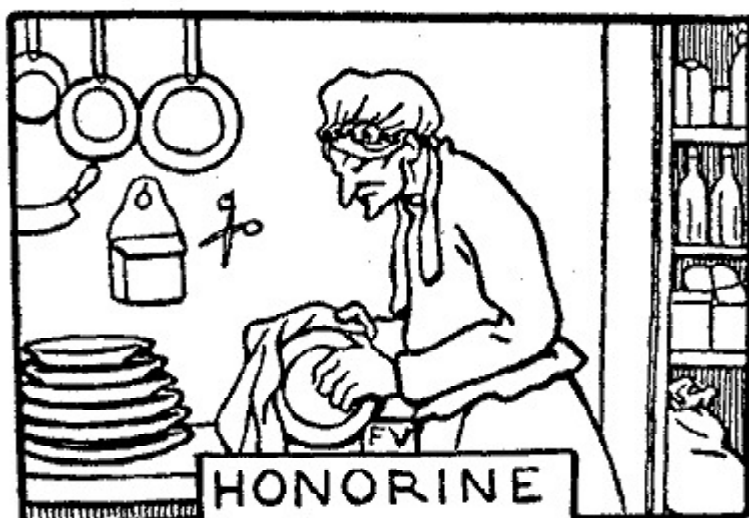
にんじん——泥だよ、こりゃ。

ルピック氏——いいや、垢だ。

にんじん——もう一度水へはいつてこようか。

ルピック氏——明日除ればいい。また来よう。
にんじん——うまい具合に天気ならね。

彼は、指の先へ、タオルの乾いたところを、つまり兄貴が濡らさずにおいてくれたところを捲きつけて、からだを拭く。頭が重く、喉はいがらつぽいのだが、彼は、大声を立てて笑うのである。というのは、兄貴とルピック氏が、彼の捻じくれた足の趾を見て、へんてこな戯談をいったからだ。



ルピック夫人——

お前さんは、もうだっけ、オノリイヌ？

オノリイヌ——こので、ちょうど六十七になりまして、奥さん。

ルピック夫人——そいじゃ、もう、いい年だね。

オノリイヌ——だからって、別にどうもありませんよ、まだ働けるだもの。病氣なんぞしたこと

なしね。巖^{がんじょう}丈なときちや馬にだつて負けやしませんからね。

ルピック夫人——そんなこというなら、あたしが考えてることをいってあげようか。お前さんは、ぼくりと死ぬよ。どうかした日の晩方^{ばんがた}、川から帰りがけに、背負^{しょ}つてる籠^{かご}がいつもの晩より重く、押してる車^{くるま}が思うように動かないのさ。お前さんは、

車の梶棒^{かじぼう}の間へ膝^{ひざ}をついて倒れる。濡^ぬれた洗濯物の上へ顔を押しつけてね。それっきりさ。誰か行つて起こしてみると、もうお前さんは死んでるんだよ。

オノリイヌ——笑わしちゃ困るよ、奥さん。心配しないでおくんなさい。脚^{あし}だつて、まだびんぴんしてるんだもの。

ルピック夫人——そういや、少しばかり前ごみになってきたね。だけど背中が丸くなると、洗濯をする時に、腰が疲れなくていい。ただどうにも困ることは、お前さんの眼が、そろそろ弱ってきたことだよ。そうじゃないとはいわせないよ。この頃、それがちゃんと、あたしにはわかるんだ。

オノリイヌ——そんなことはないね。嫁に行った頃とおんなじに、眼ははつきり見えるがね。

ルピック夫人——よし。それじゃ、袋戸棚^{ふくろだな}を開けて、お皿を一枚持つて来てごらん、どれでもいい。もしお前さんが、ちゃんと皿拭布^{さらふきん}をかけたというなら、この曇りかたはどうしたんだらう。

オノリイヌ——戸棚の中に、湿^{しめ}りっ気があるだね。

ルピック夫人——そんなら、戸棚の中に、指が幾本もあるのかねえ。そうして、お皿の上をあっちこっちうろつきっているのかねえ。この跡はなにさ。

オノリイヌ——あれま、どこにね、奥さん。なんにも見えませんよ。

ルピック夫人——そうだろう？ そいつを、あたしがめてるんだよ。いいかい、婆^{ばあ}や、あたしは、なにも、お前さんが骨惜しみをしてるっていいやしないよ。そんなことでもいったら、そり

や、あたしが間違いだ。この土地で、お前さんぐらい精を出して働く女は一人だつていやしない。ただ、お前さんは、年を取ってきた。もっとも、あたしだつて年を取る。誰だつてみんな年を取るのさ。こうもしよう、ああもしようと思つたつて、それだけじゃどうすることもできないようになる。だからさ、お前さんだつて、時おりは、眼の中が、布を張つたように霞むこともあるだろうつていうのさ。いくらこすつても、なんにもならない。そうなつてしまつたんだから……。

オノリイヌ——それにしたつて、わしや、ちゃんと眼は開けてるだよ。水桶の中へ顔をつつこんだ時みたいに、皆目方角もわからないなんてこたあないんだけどね。

ルピック夫人——いや、いや、あたしのいうことは間違いなし。

昨日だつてそうだよ、旦那さんに、よごれたコップを差し上げたろう。あたしはなんにもいやしなかった。なんだかんだつていうことになつて、お前さんがまた氣に病むといけなひと思つてさ。旦那さんも、そうだ。なんにもおつしやらなかった。これはまた、ふだんから、なんにもおつしやらない方だからね。だけど、なに一つ見逃しはなさらない。世間では、無頓着な人だと思つてるけど、こりや間違いだ。そりや、氣がつくんだからね。なんでも額の奥へ刻み込んで。だから、そのコップだつて、指で押しやつて、ただそれだけさ。お昼には、辛抱して、とうとうなんにもお飲みにならなかった。あたしや、お前さんと、旦那さんと、二人分、辛い思いをしたよ。

オノリイヌ——そんな馬鹿な話つてあるもんじゃない。旦那さんが女中に氣兼ねするなんて……。そういいなさればいいのに……

……。コップを代えるぐらいなんでもありやしない。

ルピック夫人——それもそうだろう。だが、お前さんよりもっと抜け目のない女たちが、どうしたつてあの人に口をきかせることはできないんだよ。旦那さんは、物を言うまいつて決心してらつしやるんだからね。あたしは、もう諦めてる、自分じゃ。ところで、今話してるのは、そんなことじゃない。ひと口にいつてみれば、お前さんの眼は日一日に弱つてくる。これが、洗濯とか、なんとか、そういう大きな仕事は、まあ、半分の粗相ですむにしたところで、細かな仕事になると、こりやもう、お前さんの手にやおえない。入費は殖えるけれど、しかたがない。あたしや、誰か、お前さんの手助けになる人をみつけようと思ふんだよ……。

オノリイヌ——わしや、ほかの女に尻イくつついていられちゃ、一緒にやつて行けませんや、奥さん。

ルピック夫人——それを、こつちでいおうと思つてるとさ。だとすると、どうしよう。正直なところ、あたしやどうすればいいかねえ。

オノリイヌ——わしが死ぬまで、こういうふうにして、結構やつて行けますよ。

ルピック夫人——お前さんが死ぬつて……？　ほんとにそんなことを考へてるのかい。あたしたちをあいにくみんなお墓へ送りかねないお前さんじゃないか。そのお前さんが死ぬなんてことを、人が当てにしているとでも思つてゐるのかい。

オノリイヌ——奥さんは、だけど、きんのあてようがちよつくら間違つてたぐらいで、わしに暇をくれようつていうつもりは多

分おあんなさるまい。だいいち、わしや、奥さんが出て行け
ていいなさらにや、この家から離れませんよ。いったん外へ出
りや、けっく、野たれ死をするだけのこった。

ルピック夫人——誰が暇を出すなんていったい、オノリイヌ。な
にさ、そんな真赤な顔をして……。あたしたちは、今、お互い
に、心置きなく話をしてるんだ。すると、お前さんは腹を立て
る。お寺の本堂よりとてつもない無茶をいい出す。

オノリイヌ——わしにそんなこといったって、しょうがないだよ。
ルピック夫人——じゃ、あたしはどうなのさ。お前さんの眼が見
えなくなったのはお前さんの罪でもなく、あたしの罪でもない。
お医者にしてもらうさ。治ることだってあるんだから。それは
そうと、あたしと、お前さんと、一体、どっちが余計難儀をし
てるだろう。お前さんは、自分で眼を患^{わづら}つてることもしらず
にいる。家中^{うちゅう}のものが、そのために不自由をする。あたしや、
お前さんが気の毒だから、万一の粗相^{そそう}がないように、そういっ
てあげたまでだ。それに、言葉優しく何をこうしろつていう権
利は、こりや、あたしにあると思^{おも}うからさ。

オノリイヌ——いくらでもいっとくんない。どうにでも好きな
ようになさるがいいさ。わしや、さつき、ちつとの間、町の真中^{まんなか}
へおっぱり出されたような気がしたけれど、奥さんがそうい
いなさるなら安心しましたよ。わしのほうでも、これから皿の
こたあ気をつけます。うけ合いました。

ルピック夫人——そうしてもらえりや、なんにもいうことはない
さ。あたしや、これで、評判よりやましな人間だからね。どう
してもいうことをきかない時は、こりや仕方がないが、さもな

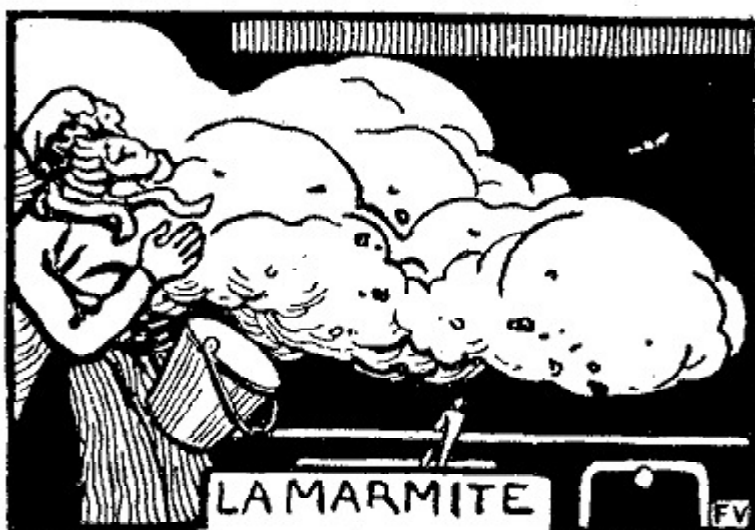
けりや、お前さんを手放すなんてことはしないよ。

オノリイヌ——そんなら、奥さん、もうなんにもいいなさるな。
今という今、わしや、自分がまだ役にたつて気がしてきまし
たよ。もしも奥さんが出て行けつていいなすつたら、わしや、
そんな法はないって怒鳴^{どな}るから……。だけでも、そのうちに、
自分で厄介者^{やっかいもの}だつていうことがわかつたら、そうして、水を容
れた鍋^{なべ}を火へかけて沸^わかすこともできんようになったら、そん
時や、さつきと、ひとりで、追い出される前に出て行きますよ。
ルピック夫人——いつなんどきでも、この家へ来りや、スープの
残りがとつてあるつてことを忘れずにね、オノリイヌ。

オノリイヌ——いいや、奥さん、スープはいらん、いらん。パン
だけで。マイツト婆さんは、パンだけしか食わんようになって
から、てんで死にそうもないからね。

ルピック夫人——それがさ、あの婆さんは、もう百を越してるん
だからね。ところで、お前さんは、まだこういうことを知つて
るか？　つていうものは、あたしたちより仕合せ^{しあわせ}なんだよ。
あたしがそいうんだから、オノリイヌ。

オノリイヌ——奥さんがそういいなさるなら、わしもそういつと
こう。



家族のために何

か役に立つという
機会は、にんじん
にとって、めった
に來ないのである。

どこかのに縮こま
っていて、彼はそ
いつが通るのを待
ち構えている。あ
らかじめこれとい
う当てもなく、彼
は耳を澄まし、い
ざという場合に、
物蔭から現われ出
ようというのだ。

そして、いづれを
見ても、煩惱に心

を乱されている人々の中で、ただ一人、頭の働きを失っていない
遠謀深慮ある人物のごとく、事件いっさいの始末を引き受けよう
というのだ。

ところで彼は、ルピック夫人が、利口で確かな助手を欲しがっ
ているということを感じた。どうせ彼女は、それを口に出して
いうはずはない。それほど負け惜しみが強いのだ。契約は暗黙の

うちに結ばばいい。それで、にんじんは、今後、督促を俟たず、
しかも、報酬を当てにしないで働かなければならぬ。
決心がついた。

朝から晩まで、の自在鉤に鍋が一つ懸かっている。冬は、湯が
たくさんいるので、この鍋が幾度となく、いっぱいになったり、空
っぽになったりする。鍋は燃え盛る火の上で、ぐらぐら音を立て
ている。

夏は、食事の後で、皿を洗うためにその湯を使うだけである。
ほかの時は絶えず小さな口笛を吹きながら、用もないのに沸いて
いるのだが、その鍋の罅だらけの腹の下で、消えかかった二本の薪
が燻っている。

どうかすると、オノリイヌは、その口笛が聞こえなくなるので
ある。彼女は、こごんで耳を押しつける。

「みんなになっちゃった」

彼女は、鍋の中へ、に一杯水を入れる。二本の薪をくつつけ、
灰を掻きまわす。やがてまた、懐かしいしゃんしゃんいう音が聞
こえ出す。すると、オノリイヌは安心して、ほかの用事をしに行
くのである。

仮に誰かが彼女にこういったとする――

「オノリイヌ、もう使いもしない湯を、どうして沸かすんだい。
鍋をおろしておしまい。火を消し。お前さんは、ただみだりに
薪を燃すんだね。寒くなると、がたがたえてる貧乏人がどれだけ
あるか知れないんだよ。お前さんは一体、締るところは締る女な
んだのにね」

彼女は、返事に困って、頭をゆすぶるだろう。

自在鉤の先に、鍋が一つ懸かっているのを、彼女は年が年じゅう見て来たのだ。

彼女は、年が年じゅう、湯がかるのを聞き、鍋が空っぽになれば、たとえ雨が降ろうが、風が吹こうが、また日が照ろうが、年が年じゅう、そいつをいっばいにして来たのだ。

で、今ではもう、鍋に手を触れることはもちろん、それを眼で見る必要もない。彼女は、語で覚えていたのである。ただ耳を澄まして音を聴けばいい。それでもし、鍋が音を立てていなかったら、柄杓で一杯水を注ぎ込むのである。それはちょうど、彼女が南京玉へ糸を通すように、これこそ慣れっこになっていて、未だ嘗て見当を外したことはないのだ。

それが、今日はじめて、彼女は見当を外したのである。

水がごとごとく火の上に落ち、灰の雲が、うるさいものに腹を立てた獣のように、オノリイヌ目がけて飛びかかり、からだを包み、呼吸をつまらせ、皮膚をがした。

彼女は、後ずざりをしながら、叫び声を立てた。をした。唾を吐いた。そしていう――

「地べたから鬼が飛び出したかと思った」

眼がくつつき、それがちくちくと痛む。だが彼女は、真黒になった手を伸ばして竈の闇を探った。

「ああ、わかった」と、彼女は、びっくりしていう――「鍋がなくなってる」

「いや、そんなはずはない。さっぱりわからん」と、またいう――「鍋は、さっきまでちゃんとあったんだ。たしかにあった。蘆笛のように、ぴいぴい音を立てていた」

してみると、オノリイヌが、野菜の切り屑でいっばいになった前掛けを窓からふるうために、向こうをむいている間に、誰かがそれはずして行ったに違いない。

だが、それは、一体、誰だ？

ルピック夫人は、しくそして落ち着きはらった様子で、寝室の靴拭いの上へ現われる――

「なにを大騒ぎしてるんだい、オノリイヌ」

「騒ぎも騒ぎも、大変なことが起こったから、騒いでるんですよ」と、彼女は叫ぶ――「もうちつとで、わしゃ丸焦げになるとこだ。まあ、この木履を見ておくんない。このスカートを、この手を……。下着は跳ねだらけだし、カクシの中へは炭の塊りが飛び込んでるだし……。」

ルピック夫人――その水溜りはなにさ。竈がびしょびしょじゃないか。これで、綺麗になるこつたろう。

オノリイヌ――わしの鍋を、どうして黙って持ってくだね。どうせ、あんたがはずしたに違いない。

ルピック夫人――鍋は、この家じゅうみんなのものなんだからね。それとも、あたしにしろ、旦那さまにしろ、また子供たちにしろ、その鍋を使うのに、いちいちお前さんの許しを受けなきゃならないのかい？

オノリイヌ――わしゃ、無茶をいうかも知れませんが。腹が立ってしょうがないんだから。

ルピック夫人――あたしたちにかい、それともお前さん自身にかい？ そうさ、どっちにだい？ あたしや物好きじゃないが、

それが知りたいもんだね。まったくれた女だよ、お前さんは、鍋がそこないからって、火の中へ柄杓にいっぱい水をぶっかけるとは、ずいぶん思いきったことをするじゃないか。おまけに意地を張ってさ、自分の粗相そそうは棚に上げて、他人に、あたしに、罪をなすくろうとする。こうなったら、あたしやどこまでもお前さんをとっちめるよ。

オノリイヌ——にんじん坊ちゃんぼっ、わしの鍋は、どこへ行ったか知りなさんか？

ルピック夫人——なにを知ってるもんか、あの子が。第一、子供には責任はない。お前さんの鍋はどうでもいいから、それより、昨日きのうお前さんはなんといったか、それを思い出してごらん。

——「そのうちに、自分で、湯ひとつ沸かすことができなくなつたっていうことに気がついたら、追い出されなくつても、勝手にひとりで出て行く」——こういったらう。現に、あたしには、お前さんの眼のわるいことはわかつてた。だが、それほどまでひどいとは思ってなかったよ。もう、これ以上なんにもいわない。あたしの身になつて考えてごらん。お前さんも、あたし同様、さっきからの事情はわかつてるんだからね。自分で始末をつけるがいい。ああ、ああ、遠慮はいらないから、いくらでも泣くさ。それだけのことはあるんだもの。



「さん！ オノリイヌ！」

.....

にんじんは、また、なにをしようというのか？ 彼は、せっかくの話をつまなしにしそうだ。幸い、ルピック夫人の冷やかな視線の下で、彼は、ぴたりと口を閉じしめる。

オノリイヌに、こういう必要があるだろうか——

「僕がしたんだよ」

どんなにしても、この婆さんを助けることはできないのだ。彼女はもう眼が見えない。もう眼が見えないのだ。気の毒だが、しかたがない。早晚、彼女は、我を折らねばならぬだろう。ここで、彼が告白をしても、それは彼女をいっそう悲しませるだけの話だ。出て行くなら出て行くがいい。そして、それがにんじんのとは気づかず、運命の避け難き兇手が、わが身に降りかかったものと

思っているがいい。

それからまた、母親にこういって、どういふことになるのだ

「母さん、僕がしたんだよ」

自分の手柄をし、褒美の一笑にありつこうとしたところで、

さあ、それが何になる？ おまけに、うっかりすると、ひどい目にあうかも知れない。なぜなら、こういう事件に、彼が容れる資格はないなんていうことを、ルピック夫人は誰の前でもいいか知らないからだ。彼はそれを知っているのである。むしろ、母親とオノリイヌが鍋をさがす、それを手伝うようなふうをしているに限る。

で、いよいよ、三人が一緒になって鍋をさがしはじめると、彼は誰よりも熱心らしく見えるのである。

ルピック夫人は、うわの空で、真つ先に断念する。

オノリイヌも、諦めて、なにかぶつぶついいながら向こうへ行ってしまう。するとやがて、にんじんは、心配のあまり気が遠くなりそうだったのを、やっと我れに返るのである。それはちょうど、正義の刃もちうるに要なく、再び鞘に納まった形だ。



オノリイヌの代

りには、その孫娘
のアガートが来る
ことになった。

物珍し^{ものめず}そうに、

にんじんは、この
新来の客を観察し
た。この数日間、
ルピック一家の注
意は、彼から彼女
のほうへ移るわけ
である。

「アガートや」と、
ルピック夫人はい
う——「部屋へは
いる前には、叩い
て合図をするんだ

よ。だからって、なにも、馬ミたいな力で戸をらなくったってい
いんだからね」

「そろそろ始まった」と、にんじんは心の中でいった——「まあ、
昼飯の時、どんなか見ててやろう」

食事は、広い台所するのである。アガートはナフキンを腕に
かけ、竈^{へっつい}から戸棚へ、戸棚から食卓へ、いつでも走る用意をし

ている。というのが、彼女はしずしずと歩くなんていうことがほ
とんどできないのである。頬^ほぺたを真赤^{まっか}にし、呼吸をきらしてい
るほうがいいらしい。

そして、ものを言うときは、あんまり早口だし、笑うときは声
が大きすぎ、それになんでも、あんまり一所懸命になりすぎるの
である。

ルピック氏が一番先へ席に着き、ナフキンをほどき、自分の皿
を正面にある大皿のほうへ押しやり、肉をよそい、ソースをかけ、
またその皿を引き寄せる。飲みものも自分でぐ。それから、背中
を丸くし、眼を伏せたまま、つましく、今日もいつもと同じよ
うに、我れ関せずというふうで食事をするのである。

皿をえるときは、彼は椅子のほうへからだをそらし、尻^{しり}をちょ
っと動かす。

ルピック夫人は、自分手ずから、子供たちの皿につけてやる。
第一番に兄貴のフェリックス。これは、もう我慢ができないほど
腹をかしているからだ。次は姉のエルネスチヌ。年長の故にで
ある。おしまいがにんじん。彼は食卓の一等隅^{すみ}っこにいたのであ
る。

彼は固く禁じられてでもいるように、決してお代りをしない。

一度よそった分だけで満足しているらしい。だが、もつとあげよ
うといえ、それはうのである。飲みものなしで、彼は、嫌いな
米^{こめ}を頼^{たの}張^はる。ルピック夫人の御機嫌^{ごきげん}を取るつもりである。一家
のうちで、たった一人、彼女だけは米が大好きなのである。

これに反して、誰に気兼ね^{きかへ}もない兄貴のフェリックスと姉
のエルネスチヌは、お代りが欲^ほしければ、ルピック氏のやり方

に倣^{なら}って、自分の皿を大皿のほうへ押しやるのである。

ただ、誰もしやべらない。

「この人たちは一体どうしたんだろう」

アガアトは、そう思っている。

彼らはどうもしないのである。そういうふうなのだ。ただそれだけである。

彼女は、誰の前でもかまわない、両腕を伸ばして欠伸^{あくび}をしないではいられない。

ルピック氏は、ガラスのかけらでも噛むように、ゆっくり食べている。

ルピック夫人は、これはまた、食事の時以外は鵲^{かさぎ}よりもおしやべりなのだが、食卓につくと、手真似^{てまね}と顔つきでものをいっているのである。

姉のエルネスチヌは、眼を天井に向けている。

兄貴のフェリックスはパンの屑^{くず}で彫刻をこしらえ、にんじんは、湯呑みがもうないので、皿についたソースを拭^ふき取るのに、あんまり早すぎでは食いしんぼうみたいだし、あんまり遅すぎてもぐずぐずしていたようだし、そこをうまくやろうと、そのことばかりに心を遣^{つか}っている。この目的から、彼は、複雑な計算に没頭する。

だしぬけに、ルピック氏が、水差しに水を入れに行く。

「わたしが行きますのに……」
と、アガアトがいう。

あるいは、むしろ、そういったのではなく、ただそう考えただけである。彼女は、それだけでもう、世の中のあらゆる不幸に見

舞われたように、舌が硬^{こわ}ばり、口をきくことができない。だが、自分の越度^{おちど}として、注意を倍加するのである。

ルピック氏のところには、もうほとんどパンがない。アガアトは、今度こそ、先手を打たれないようにしなければならぬ。彼女は、ほかの者のことを忘れるくらいにまで、彼のほうに気をつけている。

そこで、ルピック夫人は、つつけんどんに、
「アガアトや、お前、そうしてると、からだから枝がえやしないかい」

やっと、をつけられて、

「はい、なんでございます」
と、答える。

それでも、彼女は、ルピック氏から眼を離さずに、心を四方に
ついているのである。彼女は、気がきくという点で、彼を感心させ、
自分の値打ちを認めてもらおうというのだ。

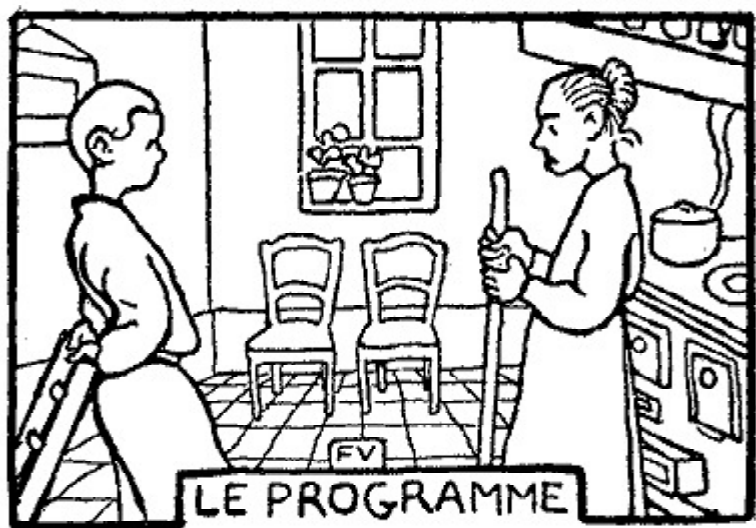
時こそ来たれである。

ルピック氏がパンの最後のひと口を、今や口へ抛^{ほう}り込んだと思
うと、彼女は戸棚のほうへ飛んで行き、まだ庖^{ほう}刀^{うちよう}も入れてない
五斤分の花輪形パンをもって来て、それをいそいそと彼のほうに
差し出した。主人の欲^ほしいものが、黙^{もく}っていてもわかるというう
れしさで、胸がいっぱいだ。

ところが、ルピック氏は、ナフキンを結び、食卓を離れ、帽子
をかぶり、裏庭^{たばこ}へ煙草^すを喫^すいに行くのである。

食事がすんでから、またはじめるなんていうことを、彼はしな
い。

釘づけみたいに、そこへ立ったまま、アガアトは、ぽかんとして、五斤かかる花輪形パンをお腹なかの上に抱え、浮袋会社の細工看板そっくりである。



ぶなくって、女の人は滑^{すべ}って首の骨をへし折^おつちまいそうなんだ。そいつを僕が平気で降り^おられたもんで、それから、この僕でなけりやならないってことになったんだ。赤い封蝋^{ふうろう}と青い封蝋^{ふうろう}をちゃんと見分けられるしね。僕が空樽^{あきたる}を売ると、そいつは僕の収入^{みいり}になるんだぜ。兎の皮^かだってそうだよ。お金はお母^{かあ}さんに預^かけとくんた。

「拍子抜けがしたろう」と、にんじんは、台所で、アガアトと二人きりになってから言った——「がっかりしちやだめだよ。こんなことはしよっちゅうあるんだから……。だけど、そんな罌^{びん}をもつてどこへ行くの」

「穴倉^{あなぐら}へですよ、にんじん坊^{ぼっ}ちゃん」

よく打合せをしとこう、いいかい、お互いに仕事の邪魔をしないようにね。

朝は、僕が犬の小屋をける。それから、スー^{すー}も僕がやることになってる。晩は、これも僕が、口笛で呼んで寝かせつける。町へ出てなかなか帰ってこないような時は、待つてるんだ。それから、母さんとの約束で、鶏小舎^{とりこや}は、僕がいつも閉^しめに行くことになってる。僕はまた草むしりもする。どんな草でもいいってわけにいかないからね。くつついてる土は、足ではらって、あとの穴を埋^うめとく。草は家畜にやるんだ。

運動のために、僕は、父^{とう}さんの手伝いをして薪^{たきぎ}を切ることになっている。

父さんが生きたまま持つて帰った猟のは、僕が首をひねる。君とエルネスチイ姉さんが羽根をむしるんだぜ。

魚のは、僕が割^さく。腸^{わた}も出す。それから、浮囊^{うきぶくろ}は踵^{かかと}でぴちんと潰^{つぶ}す。

そういう時、を取るのは君だよ。それから、井戸から水を汲み上げるのもね。

糸巻の糸をほどく時は、僕が手伝うから。

コーヒーは、僕が挽^ひく。

旦那さんが泥だらけの靴をいだら、僕がそいつを廊下へ持つて出る。だが、エルネスチイ姉さんは、上履^{うわぐつ}を持つてくる権利をだれにも譲らないんだ。自分で刺繡^{ししゅう}をしたからなんだ。

大事な使いは僕が引き受ける。遠道^{とんみち}をするときだとか、薬屋や医者へ行く時もそうだ。

君のほうは、小さな買物やなんか、村だけの走り使いをするわ

けた。

しかし、君は、毎日二、三時間、それも年が年じゅう、川で洗濯をしなければならぬ。こいつが一等つらい仕事だろう。気の毒だがやってくれ。僕にや、それだけはどうすることもできないんだ。でも、時々、暇があったら、僕も手をかしてあげるよ、洗濯物を上へひろげる時なんかね。

ああ、そうそう、注意しとくけどね、洗濯物は、決して果物の樹の上へひろげちゃいけないよ。旦那さんは君になんか言やしない。いきなりそいつを地べたの上へ弾き飛ばしちまうから。すると奥さんは、ちょっと泥がついただけで、もう一度川へ行ってこいというよ。

靴の手入れは君に頼むよ。猟に行く靴へは、うんと油を塗ってくれたまえ。ゴム靴には、ぽつちり靴墨をつけるんだ。でないと、あいつは、こちこちになるからね。

泥のついた半ズボンは、一所懸命に落とさなくったっていい。旦那さんは、泥がついてたほうがズボンの持ちがいいっていうんだ。なにしろ、掘り返した土ん中を、裾もまくらずに歩くんだからね。旦那さんは僕を連れてく時がある。獲物を僕が持つんだ。そういう時、僕は、ズボンの裾をまくったほうがいい。すると、旦那さんは僕にこういうんだ――

「にんじん、お前はろくな猟師になれんぞ」

しかし、奥さんは、僕にこういうんだ――

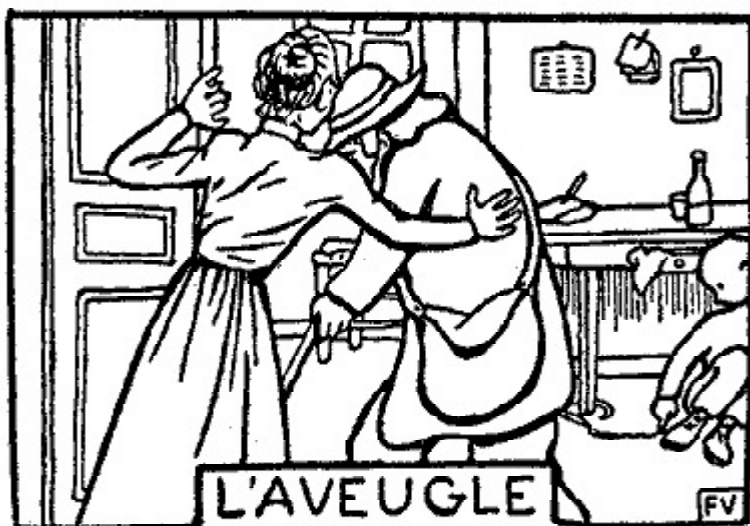
「ズボンを汚したら承知しないから……。耳がちぎれても知らないよ」

こいつは、趣味の問題だ。

要するに、君だってそんなに悲観することはないさ。僕の休暇中は、二人で用事を分担しよう。それから、姉さんと兄さんと僕が、また寄宿へ帰るようになったら、君の用事も少なくなる。つまり、おんなじわけだ。

それに、誰も君に対しちや、それほど辛く当りやしないよ。うちに来る人たちに訊いてみたまえ、みんなそういうから。――姉さんのエルネスチイヌは優しきこと天使のごとしだし、兄貴のフェリックスは心ばえいとも気高く、旦那さんは、資性廉直、判断に狂いが無い。奥さんは、こりや、まれに見る料理の名人だ。君の目からは、恐らく、家族じゅうで僕が一等むずかし屋に見えるだろう。なに、根を洗や、ほかのものと違いはないのさ。ただ、扱い方を知ってりやいいんだ。それに、僕のほうでも考えるし、悪いところは直しもする。謙遜ぶらずにいえば、僕、だんだん人間がましにはなつて来たんだ。もし君のほうで、少しでもその気になつてくれりや、僕たちは、非常にうまく調子を合わして行けると思うんだ。

ああ、だめだぜ、僕のことをこれから「にんじん坊ちゃん」なんて呼んじや。「にんじん」って呼びたまえ、みんなとおんなじように。「若旦那さん」っていうよりや短くっていい。ただ君のお祖母さんのオノリイヌみたいに、「こうだよ」とか、「こうしてやろう」なんていわないでくれたまえ。僕あ、それが嫌いさ。君のお祖母さんは、いつもそういうんだもの、僕あ癪にさわってね。



杖つえの先で、彼は、
そっと戸を叩く。

ルピック夫人——

またやって来た。一体なんの
用があるんだろ
う。

ルピック氏——そ

れがわからんのか、お前は。い
つもの十銭玉が
欲しいからさ。
一日の食い分
だ。戸を開け
てやれ。

ルピック夫人は、をして、戸を開ける。盲人めくらの腕をとって、あ
わただしく引きずりこむ。自分が寒いからだ。

「こんにちは、そこにいるみなさん」
と盲人めくらはいった。

彼は前に進む。短い杖が、鼠ねずみをうように、小刻こきざみに床石ゆかいしの上を
走る。そして、一つの、椅子いすにぶつかる。盲人は腰をおろす。か

じかんだ手を暖炉だんろのほうに伸ばす。

ルピック氏は、十銭の銀貨をつまんで、こういう——

「そら！」

彼は、それつきり相手にならない。新聞を読みつづける。
にんじんは、がつている。例の隅すみつこにしゃがんで、盲人の木履きくつ
を眺めている。それがだんだん溶けて行くのである。そして、そ
のまわりには、もう、溝みぞが描かれていた。

ルピック夫人はそれに気がつく——

「そのを貸してごらん、お爺さん」

彼女はそれを暖炉の下へ持つて行く。もう遅い。あとには水溜
りが残っている。盲人は不安ふあん気である。足が湿しめり気を感じ、片
方ずつ上へあがる。泥のまじった雪を押しわけ、そいつを遠く
へ散らかす。

にんじんは、爪で地べたをこすり、汚れた水に、こっちへ流れ
てこいという合図をし、深い石のを教えてやる。

「十銭もらったんだから、それでももういいじゃないか」
聞こえよがしに、ルピック夫人は、こういのである。

が、は、政治の話をしだす。はじめは恐る恐る、しまいには誰
はばからず。言葉につかえると、彼は杖を振りまわす。ストーヴ
の煙突へ握にぎりこがし拳をぶつけ、あわてて引つ込める。それから、油断
はならぬというふうに、溜かききらない涙の奥で、白眼をくりりと
動かすのである。

時として、ルピック氏は、新聞を裏返しながら——

「なるほど、そりやそうだろう。だが、爺さん、そりや、たしか
なことかい？」

「たしかなことかって……？」と、は叫ぶ——「そいつあ、あんまりだ。まあ、聴いておくんさい、旦那。わしがどうして目をつぶしたかっていうと、そりやこうだ」

「ちよっくら出て行きそうもない」と、ルピック夫人はいう。

なるほど、は、すっかりいい気持になり、自分の災難というのを話す。伸びをする。そして、全身飴のごとく、そのままそこへ、へばりついてしまう。今までは、血管の中を、氷の塊りが、溶けながらぐるぐる廻っていたのだ。それが、こうしていると、その着物や手足は油汗をかいているとしか思えない。地べたを見ると、水溜りがだんだん拡がり、にんじんのほうへ近づいて行く。いよいよやって来た。

目標は彼女なのだ。

やがて、にんじんは、それで遊べるのである。

だが、そのうちに、ルピック夫人は、巧妙な手段をめぐらし始める。彼女は、盲人のそばをすれすれに歩き、わざと脇をぶついたり、足を踏んだりするのである。彼はしかたがなく、後退りする。で、とうとう、火の気の伝わってこない食器棚と袋戸棚の間へ押し込められてしまう。盲人は、途方に暮れ、手探りをし、手真似で何かいい、指の先が獣のように這いまわるのである。彼は、自分だけの闇を払いのけようとする。またぞろ、氷の塊りができてきた。なんのことはない、彼は、以前どおり、凍えつきそうだ。

そこで、盲人は涙声で彼の物語を終わるのである——

「そういうわけさ、ね、それでおしまいさ。眼玉もなくなるし、

なにもかもなくなる。のなかの暗闇ばかり……」

彼の杖が手からすべり落ちる。ルピック夫人は、それを待っていたのだ。駆け寄って、杖を拾いあげる。そして、そいつを盲人に渡すのだが……実際は渡さない。

盲人は、受け取ったつもりだが、手にはなんにも持っていないのである。

彼女は、うまくだまして、また相手を引き寄せる。そして、をはかせ、戸口のほうへ連れて行く。

それから、彼女は、ちょっと意趣返しのもつりで、盲人の腕をつねり、通りへ押し出す。そこは、雪をふるい落とした灰色の絨毛の下である。締め出しを食った犬みたいに、鼻を鳴らしている風の真面である。

で、戸を閉める前に、ルピック夫人は、聾にでもいうように怒鳴る——

「またおいで。今のお金をおつことさないようにね。今度の日曜だよ、お天気がよかったら。それから、お前さんがまだこの世にいたらね。まったく、お前さんのいうとおりさ。誰が死んで誰が生きてるかわかるもんじゃない。誰でも苦労するというものはあるし、神さまはみんなのものだからね！」



雪が降っている。

元日がおめでたい
ためには、雪が降
らなければならぬ。

ルピック夫人は、
用心深く、中庭の
開き戸を締めたま
まにしておくので

ある。すると、も

う子供たちがやつ
て来て、をゆすぶ
っている。下のほ

うをこじ開けよう
とする。はじめは
遠慮がちに、だが、

しまいには、いま
いましそうに、

木履で蹴り散らす。ルピック夫人は窓から、そつとようすを窺

っているのである。いよいよだめと知ると、彼らは、それでもま
だ眼だけは窓のほうを見上げたまま、後すざりをして遠ざかって
行く。その聲音が雪の中に吸い込まれてしまう。

にんじんは、寝台から飛びおり、裏庭の水槽へ顔を洗いに行く。
石鹸は持って行かない。水槽は凍っている。氷を割らなければな

らない。この、しょっぱなの運動は、暖炉の熱よりも健康な熱を
全身に伝えるのである。ところで、顔は濡らしたことにしておく。
いつ見ても汚いといわれ、それが大々的にお化粧をした時でさ
えそうなのだから、彼は一番汚れたところだけ拭けばいいのであ
る。

儀式らしく、朗らかに、さわやかに、彼は兄貴のフェリックス
の後ろへ並んで立つ。兄貴のフェリックスは総領である姉のエル
ネスチヌの後ろに控えている。三人は食堂になっている台所へ
はいつて行く。ルピック夫妻はなんでもないような顔をして、そ
こへ列席しにやってくる。

姉のエルネスチヌが、この二人に接吻をして、さていう――
「おはよう、さん、おはよう、母さん。新年おめでとう。本年も
お達者でお暮しになりますように。それから、来世は極楽へおい
でになりますように……」

兄貴のフェリックスも、同じことを、きわめて早く、文句の終
りへいちもくさんに駆け出して行く。そして、同様に接吻をする。
が、にんじんは、帽子の中から、一通の手紙を取り出す。封を
した封筒の上に「我が親愛なる両親の君へ」とある。所番地は書
いてない。種類稀なる鳥が、色彩華やかに、その一隅を掠めて
いるのである。

にんじんは、そいつをルピック夫人のほうに差し出す。彼女は
封を切る。紙一面、満開の花に飾られ、その上、レースの縁が取
つてある。そして、レースの孔へは、しばしばにんじんのペンが
落ち込んだらしく、隣りの字が霞んでしまっている。

ルピック氏——わたしは、なんにもないんだね。

にんじん——それ、二人にあげるんだよ、母さんがすんでから見るといいや。

ルピック氏——よし、お前は、わしより母さんのほうが好きなんだね。それならそれで、この新しい十銭玉が、お前のポケットの中へはいるかどうか見ているがいい。

にんじん——ちよっと待ってたら……母さんがもうすむから。ルピック夫人——文章はしゃれてるけれど、字がへたで、あたしにや読めないよ。

「さ、今度は父さんの番だ」と、にんじんは急ぎ込んでいう。にんじんが、まっすぐに突っ立って、返事を待っている間、ルピック氏は、一度、それからもう一度、手紙を読む。じっと見ている。いつもので、「ふむ、ふむ」という。そして、テーブルの上に、そいつを置く。

目的が完全に達せられると、手紙は、もう何の役にも立たない。それこそ、みんなのものである。見ようと、触ろうと、めいめいの勝手だ。姉のエルネスチヌと兄貴のフェリックスが、順番に取り上げて、綴りの間違いを捜し出す。ここで、にんじんはペンを取り替えたとは思えない。読めないという字がちゃんと読めるのである。手紙が彼の手にかえる。

それを、こっちへひっくり返し、あっちへひっくり返しして見る。薄穢い笑い方をする。

「これで気に入らないうのかい？」
そう問い返しているように見える。

やっと、彼は、手紙を帽子の中へ押し込む。

お年玉の分配がはじまる。姉のエルネスチヌは自分の丈ほどの、いや、それよりも大きい人形である。兄貴のフェリックスは、箱入りの鉛の兵隊——今やまさに戦争をしようとしているところだ。

「お前には、取って置きのあるものがあるんだよ。なんだか当ててごらん」

ルピック夫人は、にんじんにこういう。

にんじん——ああ、そうか。

ルピック夫人——なにが「ああ、そうか」だい。もう知っているなら、見せる必要はないね。

にんじん——ううん、そうじゃないよ。もし知ってたら、僕、首だってあげらあ。

彼は、自らを信ずるものごとく、おごそかに両手を上に差し上げる。ルピック夫人は食器棚を開ける。にんじんはをはずませる。彼女は、腕を肩のところまで突っ込み、ゆるゆると、靈妙不可思議な手つきで、黄色い紙にのせた赤い砂糖細工のパイプを引き出してくる。

にんじんは、ためらわず、喜びにを輝かす。彼は、この場合、自分のすべきことを知っている。即座に、両親の面前で、同時に、姉のエルネスチヌと兄貴のフェリックスの羨ましそうな眼つき（だが、何人もすべてのものを得るわけには行かぬ）をえに、一服喫おうと思う。赤い砂糖のパイプを、二本の指だけでつまみ、

ぐつとからだを反^そらして、頭を左のほうへかしげる。彼は、口を丸め、頬^ほをへこまし、力を入れ、音を立てて吸い込む。

それから、どれらい煙を天まで届^{とど}くように吹きあげ、さて彼はいう――

「こいつは、具合がいい。よく通るぜ」



ルピックさんの
ちゃんたちとお嬢
さんが、休暇で帰
って来る。乗合馬
車から降り、遠く
のほうに両親の姿
が見えると、にん
じんは、「さてどう
したものか」と思
う。

——この辺から
走って行ってもい
いだろうか？

彼はする。

——まだ早い。

そんなことをする
と息が切れちまう。

それに、でも、程度を越えてはいかん。

そこで、もう少したつてということにする。

——ここいらから走ってやろうかな……いや、あの辺からにし
よう……。

彼は、自分自身に、いろんなことを問いかける。

——帽子は、いつ脱いだもんだろう？ どっちへ前に接吻すべ

きだろうか？

ところが、兄貴のフェリックスと姉のエルネスチヌとは、彼
を置いてきぼりにする。そして、両親の愛撫を、二人っきりで半
分ずつとってしまう。にんじんがやって来た時には、もうほとん
ど、彼の分は残っていないのである。

「なんだい、そりゃ」と、ルピック夫人はいう——「お前は、そ
の年になって、まだ父さんなんていうのかい？ お父さんってお
いい。そうして、ちゃんと握手をするんだ。そのほうが、男ら
しい」

そういつておいて、彼女は、たった一度、そのに接吻してやる。僻
むといけないから。

にんじんは、いよいよ休暇だと思うと、うれしくってたまらな
い。あんまりうれしくて、涙が出るのである。もっともこうい
うことは、しばしばあるので、彼は、しばしば、心とあべこべの
顔つきをする。

寮へもどるといいう日（それは十月二日、月曜の朝となっていて、
授業の始まりは聖霊のミサである）——その日、ルピック夫人は、
乗合の鈴が遠くから聞こえだすと、いきなり、子供たちのほうへ
のしかかり、彼らを、ひとまとめにして、両腕で抱き締める。に
んじんは、ところが、その中にはいつていないのである。彼は根
気よく、自分の順番を待っている。手だけは、もう、馬車の革具
のほうへ伸ばし、別れの言葉もちゃんと用意している。彼は、ま
ったく悲しいのである。だからこそ、唱いたくもない歌を、ふん
ふん唱っている。

「さよなら、お母さん……」と、に、彼はいった。

「おや、一体お前は、なんのつもりだい、そりや……。みんなとおんなじに、あたしを、母さんって呼んだらいいじゃないか。こんな子がどこかにいるだろうか。まだい、鼻垂れはなた小僧のくせして、それで、人と違ったことがしたいなんて……」

だが、ルピック夫人は、彼の額に、一度だけ接吻してやるのである。むとけないから。



ルピック氏が、
兄貴のフェリックス
と弟のにんじん
とを入れたサン・

マルク寮というの
は、そこから、中
学校へ通って、課
業だけを受けに行
くことになってい
る。で、毎日四度、

寮生たちは同じ道
を往き帰りするわ
けである。時候が
好ければ、すこぶ
るせいせいするし、
また、雨降りでも、
ごく近くなのなか

ら、濡れても大したことはなく、かえってからだのほてりを冷まして、すぐらいのもので、その点、この往復は寮生にとって、一年を通じての健康法なのである。

今日もお昼に、彼らは、足を引きずり、羊の群れのようにぞろぞろ中学校から帰ってくる。にんじんは、首を垂れて歩いていて、「おい、にんじん、お前のがいるじゃないか、見ろよ」

誰かがそういった。

ルピック氏は、こういうふうにして、息子たちに不意打ちを喰わすのが好きである。手紙もよこさずにおいて、やって来る。で、だしぬけに、街の角で向い側の歩道の上に突っ立ち、両手を後ろに組み、巻き煙草を口にくわえている彼の姿を見つけ出すのである。

にんじんと兄貴のフェリックスは、列から離れ、父親のほうへ駆け出して行く。

「やっぱりそうだ!」と、にんじんはいう——「僕、誰かと思っただ……。だって、さんのことなんか、ちっとも考えてなかったんだもの」

「お前は、わしの顔を見なきや、わしのことは考えんのだ」と、ルピック氏はいう。

にんじんは、そこで、なんとか愛情をめた返事をしたいと思っただ。が、何ひとつ頭に浮かばない。それほど、一方に気を取られている。彼は、爪先で伸びあがり、父親に接吻しようと、一所懸命なのだ。最初一度、唇の先が髭にさわった。ところが、ルピック氏は、逃げるように、つんと頭を持ち上げてしまったのである。それからもう一度、前へ屈みかけて、また後退りをした。にんじんは、その頬ぺたをと思ったのだが、それも、だめだった。鼻の頭をやっとかすったぐらいだ。彼は、空間に接吻をした。それ以上やろうとはしない。彼は、もう、気持がこじれ、一体なぜこんな待遇を受けるのか、そのわけを知りたいと思った。

——おやじは、もうおれを愛してはいないのかしら。と、心の中で呟いた——おやじは、兄貴のフェリックスにはちゃんと接

吻をした。後退りなんかしないで、するままにさせていた。どういうわけで、このおれを避けるのだ。おれを僻ませようっていうのか。大体ふだんから、そういうところが見える。おれは三月も両親のそばを離れていると、もう会いたくってしょうがないんだ。こんど会ったら仔犬のように首つ玉へ飛びついてやろうと、そういつも思っている。愛撫と愛撫の貪り合いだ。ところが、いよいよ会ってみる。先生たちは、きつとおれの氣持を腐らしちまうんだ。

頭が、この悲しい考えでいっぱいになる。すると、にんじんはギリシヤ語がちつとは進むかというルピック氏の問いに対して、うまい返事ができないのである。

にんじん——それも科目によるさ。訳のほうは作文よりや楽だよ。だって、訳のほうは想像で行くもの。

ルピック氏——そんなら、ドイツ語は？

にんじん——こいつは、発音がとてもむづかしいや。

ルピック氏——こね！ それじゃお前、戦争が始まって、プロシヤ人に勝てるかい、さんたちの言葉も話せないで……。

にんじん——ああ、そりゃ、そんな時までは、ものにするさ。父さんはいつでも、戦争戦争ってかすけど、僕が学校を卒業するまで、戦争は起こりっこないよ。待つてくれるよ。

ルピック氏——この前の試験には、何番だった？ まさか、ぶりっこじゃあるまいな。

にんじん——ぶりっこけの奴も、一人はいなくっちゃ。

ルピック氏——こね野郎！ わしは、お前たちに昼飯を御馳走し

てやろうと思つてたんだぜ。それがさ、今日は日曜だとまだつてこともあるが——普通の日じゃ、お前たちの勉強の妨げになるといかなからな。

にんじん——僕自身としちや、別に大してすることもないんだけど……。兄さんは、どう……？

兄貴のフェリックス——それが、うまい工合に、今朝、先生が宿題を出すのを忘れたんだよ。

ルピック氏——それだけ余計復習ができるわけだ。

兄貴のフェリックス——もうとつくに覚えてるよ。のところとおんなじなもの。

ルピック氏——なにはともあれ、今日は帰ったほうがよからう。

わしは、なるべく日曜までいることにする。そうしたら、今日のめ合わせをしよう。

兄貴が口をらしても、にんじんが黙りこくついても、それで、「さよなら」が延びるわけではない。別れなければならない時が来た。

にんじんは、それを心配しながら待つていたのである。

——今度は前よりうまく行くかどうか、ひとつ、やってみよう。おやじは、おれが接吻するのを厭がっているのか、それが、今いいいよ、そうかそうでないかがわかるんだ。

そこで、意を決し、視線をまともに向け、口を上へ差し出して、彼は、近づいて行く。

が、ルピック氏は、また容赦なく、その手で彼をさえぎり、そしてこういった——

「お前は、その耳へ挟^{はさ}んでるペンで、しまいにわしの眼へ穴をあけるぜ。わしに接吻する時だけは、どこかほかへしまつてくれることはできるか？ わしを見てくれ、ちゃんと煙草^{たばこ}は口からとつてるじゃないか」

にんじん——ああ、ごめんよ、父さん……。ほんとだ。僕がうっかりしてると、いつ、どんな間違いをしでかすか知れないね。前にも、誰かにそういわれたんだよ。だけど、このペンは、僕の耳んとこへ、そりやうまくまるもんだから、しょっちゅう、そのままにしとくのさ。で、つい忘れちゃうんだ。まったく、ペンだけでもはずさないって法はないね。

ああ、僕、ほんとうに、うれしいや、父さんは、このペンがかったんだっていうことがわかつて……。

ルピック氏——こね野郎！ 笑ってやがる。わしを眼つかちにしている……。

にんじん——ううん、そうじゃないんだよ、父さん。僕、ほかのことで笑ってるんだよ。さつきから、また、の馬鹿馬鹿しい考えを起こしたからさ、この頭ん中へ……。



夜の点呼がすむと、サン・マルクの寮監先生は寢室から出て行く。

すると生徒はめいめい、莢の中へ納まるように、できるだけ縮こまって毛布の中へすべり込む。外へはみ出ないようにだ。室長のヴィオロオ又は、くると左右を見廻し、みんなが床に就いたかどうかをたしかめる。それから爪先を立て、やがて、隣り同士

で、そつと燈火を小さくする。そうすると、で、おしやべりが始まるのである。枕から枕へ、ひそひそと声が伝わり、動く唇からは、寢室いっぱい、なんともつかぬざわめきが立ち昇って、時々、その中で、子音の短く擦れる響きが聞

き分けられる。

これが、低く鈍く、絶え間なく、はては、じれったくなる。実際、この種の囁きは、まるで鼠のように、姿は見せず、ただそこそこで、せつせと沈黙を齧っているのだと思えない。

ヴィオロオ又は、古靴をひっかけ、一時寝台の間をうろつき廻る。こつちでは一人の生徒の足をくすぐってみたり、あつちでは、もう一人の生徒の頭巾の紵をひっぱたりする。そうした挙句、マルソオのそばで立ち停るのである。この生徒とは、毎晩、夜の更けるまで長つ話をし続けて、彼はそれこそ、みんなに模範を示すのだ。たいていの場合、生徒たちは、話をやめてしまっている——口の上へ、毛布をだんだん引つかぶせて、順ぐりに呼吸が止まったというふうだ。そこで、みんな眠ってしまうのだが、その間、室長は、まだマルソオの寝台の上へからだをこごめ、肱をしっかりと鉄の棒の上に支え、前腕がしびれても気がつかず、指の先までむず痒くなっても、それはいつこう平気なのである。

彼は子供らしい物語に自ら興じ、ざつくばらんな打明け話や、いわゆる「心の想い出」というやつで、相手の眼を冴え返らしてしまふ。やがて、相手の顔は、ほのかに、透き通るほど色づきはじめる。内側から照らされたようだ。彼は、それが可愛くてたまらぬ。こうなるともう、皮膚ではない。髄のような組織だ。その後ろでは、透し紙をあてた地図のように、ちよつとした雰囲気の変化で、小静脈がみるみるうちに纏れ合うのである。マルソオは、それに、第一、なぜともわからず、不意に顔を赤らめるといふ魅惑的な手段をもっていて、それでまた、彼は、少女のように誰かれから好かれるわけなのだ。よく、仲間の一人が、片っ方の頬

ぺたを指の先で押さえ、急にそれを放すと、そこへ白い跡が残り、やがて、そいつが、見事な赤い色でおおわれる。それは、清水の中へ葡萄酒をたらしたようにぱつと拡がるのだが、その色合いはしごく変化に富み、薔薇色の鼻先からライラック色の耳に至るまで、徐々にばかされて行くのである。誰でも、めいめいが、それをやってみようと思えば、マルソオは機嫌よく実験の需めに応じるのだ。人はそこで彼に「行燈」とか、「提燈」とか、「赤頬」とかという異名をつけた。が、この、自分勝手に顔色をほてらせ得るという性能に対して、彼を羨むものは寡くなかった。

にんじんは、ちょうど、彼と寝台を並べていたし、わけでも、彼を妬ましく思った。自分は、淋巴質の、ひよろひよろの、顔に粉をふいたピエロ——むだとは知りながら、痛くなるほど、血の氣のない自分の皮膚を抓りあげた。そんなことをして、どうしようというんだ！ なに、それも毎度のことではないが、ちよっぴり、怪しげな褐色の跡をつけるためである。彼は、マルソオの朱色の頬を、いやというほど引つ掻きむしり、蜜柑のように皮をひんむいてやりたいほどだ。

よほど前から、どうも気になっていたので、彼は、その晩、ヴィオロオオが来ると、じつと聴き耳を立てていた。怪しいぞと思うのは、恐らく無理ではあるまい。室長のうさんくさい素振から、ほんとのことを嗅ぎ出そうと思ったのだ。彼は、彼独特の、あらゆる少年スパイ術策をめぐらす。空躰をかき、ことさら寝返りを打ち、そっちへちようど背中を向けてしまうようにする。それから、うなされでもしたように、ひと声、けたたましい叫びを立てる。これで、室全体がびっくりして眼を覚まし、毛布とい

う毛布は、激しく波形の運動を起こすのである。さて、ヴィオロオオが向こうへ行ってしまうと、彼は、鼻息荒く、上半身を寝台から乗り出し、マルソオに向かつていう——

「あめちよこ！ あめちよこ！」

返事がない。にんじんは膝で起ちあがってマルソオの腕をつかむ。そして、力まかせにゆすぶりながら、

「やい、あめちよこ！」

あめちよこは、聞こえないらしい。にんじんは、躍気となり、またやり出す——

「だらしがねえぞ！ おれが見てなかったと思うのか！ やい、こら、あいつにキスさせなかったか！ え、どうだ。それでも、てめえ、あいつのあめちよこじゃないのか！」

彼は、人にかからわれたみたいに、首を前に突き出し、握り拳を寝台の縁にあてて伸び上がる。

が今度は、返事があった。

「だから、それがどうしたんだ」

腰を浮かしたと思うと、にんじんは、毛布を引つかぶった。

室長が、とつさの間に現われて、その場へ舞い戻っていたのだ。

二

「そうだ」と、ヴィオロオオはいった——「そうだ、僕はお前にキスした。なあ、マルソオ、その通りいったていいよ。お前はちっとも悪かないんだもの……。僕は、お前のにキスしたんだ。それに、にんじんは、あの年で、もう邪氣満々なもんだから、そ

れが純粹な、清淨潔白な接吻で、父親が子供にする接吻みたいなものだってことがわからないんだ。僕は、お前を子供のように愛してるんだ。あるいは、弟のようにっていうほうがよけりや、それでもいい。それがあいつにやわからないんだから、明日になったら、そこいらじゅうへ、なんのканのつていい触らずがいいさ、あのちびごろの間抜け野郎！」

この言葉を聞いて、にんじんは、まだヴィオロオヌの声がかすかに耳へ響いてくるのに、急に眠った振りをしはじめる。それでも、頭だけは持ちあげて、その先を聞こうとしていた。

マルソオは、呼吸をするかしないかで、室長の言葉に聴き入っている。それは、どこまでも当たり前だとは思いつながら、彼は、ある秘密の暴露をおそれるように、慄えているからだ。ヴィオロオヌは、できるだけ小声で続ける。何を言ってるのか、ほそぼそと、遙か遠くで、音節の区切りもわからないくらいだ。にんじんは、またそつちへ向き直るわけにもいかず、腰をずらしながら、目立たないようにからだを寄せていったが、もうなんにも聞こえない。彼の注意力はいやが上にもかき立てられ、耳がうつろになり、漏斗の口のように口を開くかと思われた。が、それでも、音らしい音は、はいつてこないのである。

彼は、時たま部屋の戸口に立って、中のようすを窺ったことがある。片眼を錠前に押しつけ、できればこの孔をもつと拡げて、見たいものを銚かすがい。なかなかで手近へ引き寄せられたらと思う、あの努力感がこれに似たものだったことを覚えていて。それにしても、ヴィオロオヌは、どうせ同じ文句を繰り返しているにきまっているのだ――

「そうだ、僕の愛情は純の純なるものだ。それがつまり、このちびごろの間抜け野郎にやわからないんだ！」

さて、室長は、影のごとく静かに、マルソオの額の上へここんでこれにキスをし、ちよび髭の先をこすりつけ、それから、からだを起こして、そこを立ち去る。寝台の列の間をすべり抜けて行く間、にんじんはそいつを見送っている。ヴィオロオヌの手がどうかして誰かの枕の端に触れると、こいつは安眠妨害だ。その生徒は、大きく溜息をついて寝返りをうつののである。

にんじんは、しばらくようすを窺っている。ヴィオロオヌがまた突然引返してこないとも限らないからだ。すでもうマルソオは、寝床の中で縮こまっている。毛布を眼までかぶり、その実、眠るところではなく、どう考えていいかわからないさっきの出来事を、それからそれへと想い浮かべているのだ。あんなことはちつとも厭らしいことではない、だから、苦にするには及ばないと彼は思った。それにしても、掛布団の下かけぶとんの暗闇の中に、ヴィオロオヌの面影がちらちらと浮かびあがる。それは今まで数々の夢の中で、彼をぼっとさせた、あの、女たちの面影のように優しいものだ。

にんじんは待ちくたびれた。睨まぶたが、磁気を帯びたように、両方から近づく。彼は、消えそうで消えないガスの燈をじつと見つめていようと思う。が、パツパツと音を立てて、火口から出流る小さな焰の明滅を、やっと三つ数えたきりで、彼は眠入ってしまった。

あくる朝、洗面所で、みんながタオルの隅をちよいと水に浸し、頬骨の上を、さも冷たそうに、軽くでている間に、にんじんは、意地の悪い眼つきでマルソオのほうを視ていた。が、やがて、精いっぱい獐猛な調子で、一音一音を喰いしばった歯の間から吹き出すように、またぞろ、喰ってかかる――

「あめちよこ！ あめちよこ！」

マルソオの頬は朱色に染まる。が、彼は怒らずに、ほとんど哀願せんばかりの眼つきで応える――

「だって、そりや嘘だっていつてゐるじゃないか。君が勝手にそう思ってるんだ」

室長が手の検査をしにやって来た。生徒たちは、二列に並んで、機械的に最初は手の甲、次にと、すばやくひっくり返して見せるのである。それがすむと、その両手なるべく温かいところへしまい込む。ポケットの中とか、あるいは、一番近くにある羽根布団のぬくもりの下とか。日頃、ヴィオロオ又は、手なんか見ないのが普通である。それが、今日に限って、あいにく、にんじんの手が綺麗でないという。もう一度水道で洗ってくるように――この注意が、にんじんの気に入らない。なるほど、青味がかった汚点のようなものが目につく。しかし、彼は、それが凍傷の始まりだといひ張った。どうせ、睨まれてゐるんだ。

ヴィオロオ又は、彼を寮監先生のところへやらねばならぬ。

寮監は、朝早くから起き、暗緑色の書斎で、歴史の講義を準備している。これは自分の暇々に、上級組の生徒にしてやろうというのだ。テーブル掛けの上へ、太い指先を平たく押しつけて、主

要なところへを樹てたつもりになる。――ここはローマ帝国の没落、まん中はトルコ軍の君府攻略、その先は、近代史、これがどこから始まるかわからず、どこまで行っても終わらない代物だ。彼は、だぶだぶの部屋着を着ている。縞いのはいった飾り紐が厳丈な胸を取り巻き、円柱のまわりに綱を取りつけたようだ。この男、ひと目見れば、物を喰いすぎるといことがわかる。顔つきが、腫ればったく、いつも、ややぎらぎらしている。彼は怒鳴るように話をする。婦人に向かつてさえもそうだ。頸筋の皺が、カラアの上で、緩やかに韻律正しく波を打っている。彼はまた眼のくり玉の丸いことと、髭の濃いことが特徴である。

にんじんは、彼の前へ突つ立った。帽子を股ぐらに挟んでいる。動作の自由を保つためである。

恐ろしい声で、寮監はねた。

「なんの用だ？」

「先生、室長が、僕の手はきたないから、そういいに行けつていっただんです。だけど、そんなことないんです」

で、もう一度、に恥じずとばかり、にんじんは、両手をひっくり返して見せた――初めは裏、次は表と、なお念のため、彼は繰り返した――初めに表、次に裏。

「なに、そんなことはない?! 四日、わかったか」

と、寮監はいった。

「先生、室長に、僕、にらまれてるんです」

にんじんがいった。

「なに? にらまれてる! 八日だ、わかったか」

にんじんは、相手の人物を識っていた。こんな生優しいことで

は、びくともしない。なんでも来いと覚悟をしているからだ。彼は直立不動の姿勢を取り、両膝をぎゅっと締め合わせ、横面をぴしやりと来るぐらい屁とも思わず、いよいよ図に乗ってきた。

というのは、この寮監先生、実は時折、手の甲のことで強情たりする生徒を、ぴしやり！ とやる罪のない癖があるのだ。そこで、来るなと思ったら、時を測って、ぴよこりとむ。うまく行けば、寮監は、すかを喰ってよろける。みんながどつと吹き出す。ところが、先生は、もう一度やり直そうとはしない。自分の番にずるい真似をするのは、彼の威厳に係わるからだ。この頬をと思つたら、一発で撃ち止めるか、さもなくば、手出しはしないことだ。

「先生……」と、にんじんは、ほんとにふてぶてしく、昂然とい放つた——「室長とマルソオとが、変なんです」

すると寮監の眼は、不意にでも飛び込んだように、しばしばとする。テーブルの端を両方の拳で押さえ、腰を浮かし、にんじんの胸へぶつからんばかりに、顔を突き出し、そして、喉の奥から訊ねるのである——

「どう変なんだ？」

にんじんは、当てがはずれたらしい。彼が待ち設けていたのは——もつとも、その後はどうなるかわからないが——たとえば、アンリ・マルタンすところの歴史大全が、覗いて過たず飛んで来ることだった。ところが、これはまた、詳しいわけを聴こうというのだ。

寮監は、待っている。の皺がみんな集まって、ただ一つの円座をつくり、皮でできた太い環の上に、頭が斜かに載っているの

だ。

にんじんはためらっている。うまい言葉が見つかりそうもないとわかるまでの間である。すると、急にしよげた顔をし、背中をまるめ、見るからにぎごちなく、照れくさそうに、彼は膝の間へ手をやり、ペしゃんこになった帽子を抜き出す。だんだん前ごこみになる。肩をすぼめる。それから、その帽子をそつと頭のあたりまで持ち上げ、それからまたゆつくり、さりげなく、せいっぱい神妙に、綿のはいった帽子の裏へ、黙って、その猿面を埋めてしまう。

四

その日、簡単に取調べがあつて、ヴィオロオ又は暇を出された。出て行く時は悲痛だった。まず儀式というところだ。

「また還ってくるよ。ちつと休むだけだ」

ヴィオロオ又はそういうた。

しかし、誰にもそうとは信じられなかった。寮では、よく職員の入替えをやる。まるで、徴が生えらると思つてるようだ。今度も多分、室長の更迭というわけだろう。彼が出て行くのは、他のものが出て行った、あれと変わりはない。ただ、好いのは、早く出て行く。ほとんど全体が、彼を愛していた。ノートの表題を書く技術では、彼に匹敵するものはないと認めていた。たとえば、ギリシャ語の練習帳の表紙に「(Cahiers d'exercices grecs appartenant a)……」と、書くのだが、頭文字は看板の字のような恰好が取れていた。どの椅子も空っぽになる。彼の机の前

に、みんなが円陣を作る。指環の緑の石が光っている彼の美しい手が、しなやかに紙の上を往き来する。ページの下に、即興的な署名をする。その署名たるや、水に石を投げ込んだように、正確で、しかも気紛れな線の、波と渦だ。そして、それが、ちゃんと花押になり、小さな傑作なのだ。花押の尻尾はくねりくねって花押そのものの中へ没し去っている。そいつを見つけ出すのには、ごくそばで眺め、よくよく捜さなければならぬ。いうまでもなく、全体はひと筆の続け書きだ。ある時のごとき、彼は「天井の中心飾り」と称する線のこんぐらかりを見事に描いてみせた。小さい連中は、感嘆これを久しゅうした。

彼が暇を出されたというので、この連中は、ひどく悲しがった。彼らは、最初の機会に、寮監をとつちめなけりやならんと相談を決めた。つまり頬を膨らし、唇で山蜂の飛ぶ音を真似、かくて不満の意を表わすという次第だ。そのうちに、きつとやらすにはいないだろう。

さしあたり、彼らは、悲しみを分ち合った。ヴィオロオ又は、自分が慕われているのを知り、休みの時間に発つという思わせぶりをやったものだ。彼の姿が運動場に現われる。小使いが鞆をかついて後からついて来る。さあ、小さい連中は、ことごとく、駈けつけた。彼は、一人ひとり手を握り、顔を撫でる。そして、取り囲まれ、押しのめされ、微笑みながら、感動しつつ、自分のフロックの襞を、破れない程度に引き寄せる努力をしていた。鉄棒にぶらさがっていたものは、でんぐり返しを途中で止め、それから、口を開けたまま、額に汗をかき、シャツの袖をまくり上げ、粘土のついた指を上げたまま、地べたへ飛びおる。もっとおと

なしいものは、運動場の中を千篇一律に廻っていたが、これは、「さようなら」のしるしに手を振ってみせる。小使いは、鞆の下で背中を曲げ、隔たりを保つために止まっている。ところが、それをいいことに、一番小さいのが、濡れた砂の中へつつこんだ五本の指を、その小使いの白い前掛けへべったりと押しつける。マルソオの頬は、絵に描いたように薔薇色に染まった。彼は、生まれてはじめて、真剣な心の苦しみを味わった。が、しかし、室長に対して、いくぶん、「従妹」のような気持で名残を惜しんでいることは、なんとしても自分にわかり、それが、またそら恐ろしく、彼は、ずっと離れて、不安げに、ほとんど顔もあげ得ずに立っている。ヴィオロオ又は、なんのこたわりもなく、彼のほうへ進んで行った。ちょうどその時、ガラスがどこかで、こつぱみじんに破れる音がした。

みんなの視線が、鉄格子のはまった、謹慎室の小さな窓のほうへ昇って行った。不細工な、野蠻な、にんじんの顔がのぞいている。彼はしかめつ面をしてみせた。眼が髪の毛の間から見え、白い歯を残らずむき出し、檻の中の蒼ざめた小悪獣そのままだ。彼は、右手を、喰い込むようなガラスの割れ目へ威勢よくつつこみ、そして、その血みどろな拳固でヴィオロオ又はを威嚇した。

ヴィオロオ又ははそれに応えた――

「ちびころの間抜け野郎！ これで気がすんだか！」

「へん！」と、にんじんは、叫ぶがいなや、もう一枚のガラスを陽気にぶちこわし――「なんだって、そいつにキスするんだい。どうして俺にしないんだ、え？」

それから、彼は、切れた手から流れる血を、顔いちめんに塗り

たくり、こう附け加えた――

「おれだって、赤い頬ほぺたになれるんだ、いざっていや……」



う、にんじん

ルピック夫人はいうのである。

彼女のいったとおりだ。にんじんの、兄貴のより、いつも黒いのだ。どうしてだろう。二人は、すぐ側で、同じ制度のもとで、同じ空気の中で暮らしてきたのだ。なるほど、三月の後には、兄貴のフェリックスも、白い足を出してみせることはできない。が、

兄貴のフェリックスとにんじんとが、サン・マルク寮から帰って来ると、ルピック夫人は二人に足の行水をさせるのである。三月も前からその必要があるのに、寮では足を洗わないからである。もとより、規則書のどの箇条にもその場合はうたっていない。「お前のときたさぞ黒いこつたら

にんじんは、自分でも告白するとおり、誰の足だかわからなくなっているのである。

恥ずかしいので、彼は、手品師の芸当よろしく、足を水の中へ突っ込む。いつのまに靴を脱いだか、彼は、兄貴のフェリックスがもうバケツの底へ沈めているその足の間へ、いきなり自分の足を割り込ませる。それまで誰も気がつかない。するとやがて、垢の層が布ぎれのように拡がって、この四つの化物を包むのだ。

ルピック氏は、いつもの癖で、窓から窓を往ったり来たりしている。彼は、息子たちの通信簿、ことに、校長先生自筆の注意書を読み返してみる。兄貴のフェリックスについては――

「不注意、然れども伶俐。及第の見込み」

それから、にんじんについては――

「その気になれば優秀なる成績を示す。但し、常にその気にならず」

にんじんが、これでたまには成績がいいのかと思うと、家族のものは、誰でも可笑しくなるのである。そういう今、彼は膝の上で両腕を組み合わせ、足を水の中で存分に膨らましている。彼はみんなから試験をされている気だ。赤黒く伸びすぎた髪の毛の下で、彼はむしろみつともなくなっていた。ルピック氏は、真情流露を逆に行く人物だから、久々で彼の顔を見た悦びを、擲諭の形でしか表わさない。向こうへ往きがけに彼の耳を弾く。こつちへ来がけには、肱で小突く。すると、にんじんは、待ってましたと笑いこけるのである。

それからさらに、ルピック氏は、彼のもじやもじやの頭髮へ手を通し、そして、虱でも潰すように爪をばちんと鳴らす。これ

が、先生得意の戯談である。

ところが、狙い過たず、最初に、一匹、殺ったのである。

「やあ、うまいもんだ。仕留めたぞ」

と、彼はいう。さて、いくぶんげんなりして、そいつをにんじんの髪の毛へなすりつける。するとルピック夫人は、両腕を空に向けて差し伸べ、さも精がなさそうに――

「そんなこったろうと思った。やれやれ、とんだ御馳走だ。エルネスチヌ、急いで金盥を持っていで。そら、お前の用事ができた」

姉のエルネスチヌは、金盥を持って来る。それから、目の細かい櫛と、皿いっぱい酢と……。虱退治が始まるのである。

「僕のを先へやってくれ」と、兄貴のフェリックスが叫ぶ――「僕にもよこしやがったに違いない」

彼は、がむしやらの指で頭をかきむしる。そして、頭ごとつこむんだからバケツに一杯水を持ってこいという。

「静かにおしよ」と、姉はいう。心づくしを見せることが好きなのだ――「痛くしやしないわ」

彼女は、彼の首のまわりへタオルを捲きつけ、母親の手際と丹念さとを示す。一方の手で髪の毛を押し分け、もう一方の手で軽く櫛を取り上げる。彼女は、捜す。口を曲げて馬鹿にするふうもなく、獲物がひつかってもびくともしない。

彼女が、「また一匹いた」というごとに、兄貴のフェリックスはバケツの中で足をじたばたさせながら、にんじんを拳固で威かす。一方は静かに自分の番を待っている。

「あんたのほうは済んだ、フェリックス」と、姉のエルネスチヌ

又はいう――「七つか八つきりいなかったわ。勘定してごらん。にんじんの幾ついるか、さあ」

最初のひと櫛で、にんじんは、それ以上の得点だ。姉のエルネスチヌは、これこそ巢にぶつかったようなものだと思った。それもそのはず、蟻塚の中を手当り次第にかき寄せるのと違いはない。

一同がにんじんを取り囲む。姉のエルネスチヌは腕に撚りかける。ルピック氏は、両手を背中に組んで、物好きな他人みたいに、仕事の運びを見物している。ルピック夫人は、情ない声で嘆息の叫びを発する――

「これは、これは……。鋤と熊手を持って来なけりや……」

兄貴のフェリックスは、蹲まって、金盥をゆすぶり、獲物を受け取っている。彼らは、雲脂に混って落ちてくる。剪った睫毛のように細かな脚が、ぴくぴく動くのが見分けられる。彼らは金盥の揺れるのに従い、そして、酢のために、またたく間に死んでしまう。

ルピック夫人――にんじん！ お前はこういう量見でいるんだか、あたしたちにやもうわからないよ。その年になって、大きな男の子が、それで恥ずかしくはないかい？ 足のことはまあいわないさ、ここで初めて見るんだろうから……。だが虱が食ってるのにさ、それを先生にいつて取り締っても貰わず、家のものに始末をしてくれともいわず……。どうしたっていうんだい、一体……。どんなにいい気持なのさ、生きたまま齧られるっていうのは……。髪の毛中が、血だらけじゃないか。

にんじん——櫛でかきむしったんだよ。

ルピック夫人——どうだろう、櫛だとさ。それが姉さんへのお礼のしかたかい？ 聞いたろうね、エルネスチヌ？ 旦那は、気むずかしくっていらっしやるから、床屋の姐さんねえに苦情をおっしゃるよ。わるいことはいわない、好きで食われてるんだから、さっさと虫の餌えさにしておやり。

エルネスチヌ——今日は、もうこれでおしまいよ、母さん。大きいだけ落としたわ。明日もうひと撫なでしてみるの。オードコロオニユを振りかけるってやり方があるのよ。ルピック夫人——さあ、にんじん、お前は、金盥きんぐわんを持ってって、裏庭どべいの土塀どべいの上へ出してお置き。村じゅうのものがぞろぞろ見て通れば、お前だつてちったあ恥はずかしいだろう。

にんじんは金盥を取り上げ、出て行く。そして、そいつを太陽の下に晒さらして、その側そばで見張しやうりをしている。

最初に近寄つて来たのが、マリイ・ナネット婆さんである。彼女はにんじんの顔さえ見れば立ち止まって、近視すくの、小さな狡さうそうな眼で彼をじろじろ見るのである。そして、黒い頭巾ずきんを動かしながら、何事かを捜し当てようとする。

「なんだね、そいつは……」

にんじんは返事をしない。彼女は金盥をのぞき込む。

「小豆あずきかね。あいた、もう眼がはつきり見えないよ。息子のピエエルが眼鏡めがねを買かつてくれるといいんだけど……」

彼女は指でさわってみる。口へ入れそうな手つきだ。なんとしても、わからないらしい。

「そいで、お前さんはそこでなにしてるんだい。膨ふくれっ面つらをして、眼をぼうつとさせて……？ ははあ、怒られたな。罰にそうしてろつてわけか。いいかい、わしや、お前さんのお祖母ばあ母あじやないが、それでも、考えることだきや、考えてるよ。わしや、不便ふびんでならん。家のもんがみんなで、いじめるんだらう」

にんじんは、ちらりと眼を外そらす。そして母親が聞いていないことを確かめる。すると、彼はマリイ・ナネット婆さんに言うのである——

「だからどうしたんだい？ そんなこと、婆さんには関係ないだらう。自分のことだけ心配するがいいや。僕ぼくのことは、ほうつといてくれ」



ルピック氏——

おい、にんじん、お前は前学年には、わしの望みどおり勉強しなかった。通信簿に、もっとやれば出来るはずだと書いてある。お前はほかのことばかり考えている。禁じられた書物を読む。暗記力はなかなかあると見えて、試験の点は相当よろしい。ただ宿題を怠けるんだ。おい、にんじん

ん、真面目にやろうという気になれ。

にんじん——大丈夫だよ、父さん。まったく、前学年はすごい加減にやったところがあるよ。今度は、せいっぱい頑張ろうって気が起こってるんだ。ただし、全科目、級で一番っていうのは受合えないよ。

ルピック氏——ともかく、そのつもりになってみる。

にんじん——いいや、父さん、僕に望むところが大きすぎるよ。

僕あ、地理や、ドイツ語や、物理化学はだめなんだ。とても出来る奴が二、三人いるのさ。ほかのことときたら零なくせに、そればかりやってるんだもの。こいつらを追い越すなんて不可能だよ。だけど、僕、ねえ、父さん、僕、フランス語の作文でなら、近いうち、だんぜん牛耳って見せるよ。そして、そいつを続けてみせるよ。それが、もし、僕の努力にもかかわらず不成功に終わったら、少なくとも僕はみずから悔ゆるところなしだ。僕は、かのブルタスのごとき誇らかに叫ぶことができる——「おお美德よ、汝はただ一つの名に過ぎず！」

ルピック氏——うむ、そうだ。わしは、お前がやつらに負けないことを信じている。

フェリックス——父さんは、なんていったい？

エルネスチヌ——あたし、聞いてなかったわ。

ルピック夫人——母さんも聞いてなかった。どう、もう一度いつてごらん、にんじん。

にんじん——うん、なんでもないよ。

ルピック夫人——へえ？ なんにもいわなかったのかい？ でも、あんなに、赤い顔をして、拳を振り上げ、えらい勢いでぺらぺら喋ったじゃないか？ あの声ときたら村の端まで届くほどだった。その文句をもう一遍いつてごらん、みんなが聴いとくと為になるからさ。

にんじん——それにや及ばないよ、母さん。

ルピック夫人——いいからさ。誰の話なの？ なんていう名前の入った？

にんじん——母さんの知らない人だよ。

ルピック夫人——なおのことじゃないか。さ、お願いだから、戯談（じようたん）はやめて、母さんのいうことをおきき。

にんじん——そんならいうけど、僕たち、今、二人で話をしてたの。父さんが僕に友だちとしての忠告をしてくれたもんで、そのお礼をいうつもりで、ふと、ある考えが浮かんだのさ。つまり、ブルタスっていうローマ人のように、誓いを立てる……つまり美德のなんたるかを……。

ルピック夫人——つまりつまり、なんだい、そりや……。しどろもどろじゃないか。それより、さっきいった文句を、一字一句変えずに、おんなじ調子でいってごらん。母さんは、別にベルウの国をよこせっていうてゐるわけじゃないだろう。だから、それくらい、母さんのためにしてくれたっていいじゃないか。

フェリックス——僕がいつてみようか、母さん。

ルピック夫人——いいえ、にんじんがまずいつてから、そのつぎ、お前がおいしい。両方較べてみるから……さ、にんじん、早くさ。にんじん（うるみ声で、呟くように）——おお、び、び、びとくよ……なん……なんじは……ただ、ひとつの……な、なにすぎず……。

ルピック夫人——なんともしょうがない。ひとすじ縄（なわ）じゃ動かないや、この大將は……。母親の氣にしていることをするくらいなら、叩きのめされたほうがましだと思つてゐるんだ。

フェリックス——どら、母さん、奴（やつ）はこういつたんだよ——（彼は眼玉をぎよろりとさせ、挑むような視線を投（な）げて）もしも僕がフランス語の作文で一番にならなかつたら……（頬（ほ）をふくら

ませ、足を踏み鳴らし）僕は、かのブルタスのごとく叫ぶだろう……（両腕を高く挙げ）おお、美德よ……（その腕を膝の上にどざりと落とす）汝はただ一つの名に過ぎず！　こういっただよ。

ルピック夫人——ひやひや。大出来だ。にんじん、じゃまあ、おめでとう。それにしても、真似（まね）は実物だけの値打ちはないんだから、それだけに、お前が片意地なことは、母さん、残念だよ。フェリックス——だけど、にんじん、そいつをいつたのは、ほんとにブルタスだったかい？　ケエトオじゃなかつたかい？

にんじん——たしかにブルタスだ。「かくて彼は、友の一人が差し伸べし剣（こさ）に、われとわが身を貫（つらぬ）いて死せり」

エルネスチヌ——にんじんのいう通りだわ。そして、ブルタスは、黄金を杖（つえ）に忍ばせて、氣違いの真似をしたのね。

にんじん——違うよ、姉（ねえ）さん、そんなことをいうと頭（かぶ）がこんぐらかるじゃないか。僕のいうブルタスと姉さんのは別物だよ。

エルネスチヌ——そうかしら……。それにしてもさ、ソフィイ先生が筆記させる歴史のお講義は、あんたの学校の先生と、値打ちからいつて違いはないわよ。

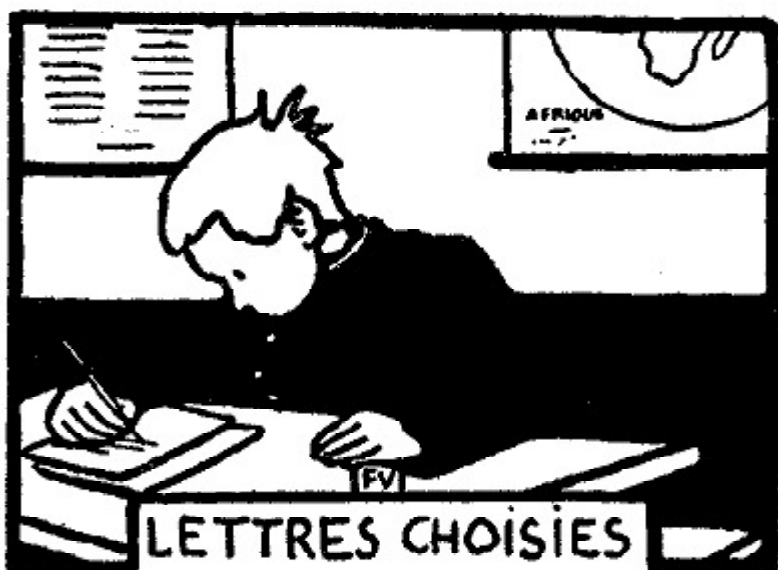
ルピック夫人——そりや、どうでもいい。喧嘩（けんか）はおよし。肝腎（かんじん）なことは、家族の一人に、ブルタスがいるつてこつた。家（うち）には現にゐるんだ。にんじんのお蔭で、あたしたちは肩身が広いわけだ。それに、だあれも、自分たちの名譽（めいよ）を知らずにいたんだ。新しいブルタスを崇（あが）めようじゃないか。このブルタスはラテン語を司教さんのようにしやべる。そのくせ、聾者（つんぼ）がいても、ミサを二度繰り返してくれない。ぐるっとまわらしてごらん。正

面から見ると、今日^{きょう}おろしたばかりの上着にもう汚^{しみ}点をくつつ
け、後^{うし}ろから見ると、ズボンが破けてる。おお神様、どこへま
たもぐり込んだんだろう。戯談じゃない、まあ、見てやってお
くれ、あのブルタスにんじんの顔つきをさ。しょうがないブル
ドックだよ、ほんとに！

にんじんよりルピック氏への書簡一束ひとたば

ならびにルピック氏よりにんじんへの返事若干じゃっかん

頓首とんしゅ



にんじんよりルピック氏へ

サン・マルク寮にて

親愛なる父上

休暇中の魚捕りが

崇たつて、目下気分

に動揺を来たして

います。腿ももに太い

「釘」——つまり

腫物はれものができたので

す。僕は床に就つい

ています。仰向あおもむけ

に寝たきりで、看

護

婦のおばさんが

寛法あんぽうをしてくれま

す。腫物はれものは、ヒヨコの

ように殖ふえるんです。一つがなおると、また三つ飛び出すとい

う具合です。いずれにしても、大したことはないだろうと思

います。

ルピック氏よりの返事

親愛なるにんじん殿そこもと

其許は目前に初の聖体拝受を控え、しかも教理問答にも通かよい

おることなれば、人類が「釘」に悩まされた事実は其許に始ま

らざること承知の筈だ。イエス・キリストは、足にも手にもこ

れを受けた。彼は苦情をいわなんだ。しかも、その「釘」たる

や、本物の釘だったのだ。

元気を出すべし。

*

匆々そうそう

にんじんよりルピック氏へ

親愛なる父上

僕は今日、齒が一本生えたことをお知らせできるのは愉快です。

年からいえばまだですが、これはたしかに、早生の智慧ちえ歯ばで

す。希ねがくは、一本でおしまいにならないことを。そして、希

くは、僕の善行と勉強によって、父上の御満足を得んことを。

頓首

ルピック氏の返事

親愛なるにんじん殿

ちようど其許の歯が生えようとしつつある時、余の歯は一本ぐらつきはじめた。そして、昨朝、ついに思い切つて抜け落ちた。かように、其許の歯が一本殖えることに、其許の父は一本ずつ歯を失う次第だ。それゆえ、すべてもともにして、家族一同の歯は、その数に於いて変りなし。

*

匆々

にんじんよりルピック氏へ

親愛なる父上

まあ聴いてください。昨日は、僕らのラテン語教師、ジャアク先生の聖名祭です。で、衆議一決、生徒たちは、クラス全体の祝意を表するために、僕を総代に選びました。僕は太いこれを光榮とし、適宜にラテン語の引用をはさんで、長々と演説の準備をしました。正直なところ、満足な出来栄です。僕は、そいつを大型の野紙に清書しました。いよいよ当日になり、同僚たちの「やれよ、やれよ」と囁く声に励まされ、ジャアク先生がこつちを向いていない時を見はからって、僕は教壇の前に進み出ました。が、やっと紙をひろげ、せいっぱいの声で、

尊き師の君よ

と読み上げた瞬間、ジャアク先生は、憤然として立ち上がり、こう怒鳴りました——「早く席に着いて！ なにぐずぐずしてる！」

しかたがありません。僕は逃げ出すと、そのまま腰をかけた。同僚たちは、本で顔をかくしています。すると、ジャアク先生は、すごい権幕で、僕にあてました——

「練習文を訳して！」

父上、以て如何となさいます。

ルピック氏の返事

親愛なるにんじん殿

其許が他日代議士にでもなればわかることだ。その手の人物はいくらでもいるよ。人々々その畑あり、先生が教壇に立たるののは、これ明らかに演説をなさるがためであつて、其許の演説を聴かれるためではない。

*

にんじんよりルピック氏へ

親愛なる父上

例の兎はたしかに地歴教師ルグリ先生の処へお届けしておきました。むろん、この贈り物は先生を悦ばせたようです。厚くお礼を申してくれとのことでした。僕がちようど濡れた雨傘を持って部屋へは行って行ったもんですから、先生は自分でそいつを僕の手から奪い取るようにして玄関に持って行かれしました。それから、僕たちは、いろんな話をしました。先生は、僕がその気になれば、学年末には地歴の一等賞を獲得できるのだ

がといわれました。しかし、こんなことがあるでしょうか。僕は、この話の初めから終りまで、のべつ起ちどおしです。ルグリ先生は、その点以外実にお愛想がいいのですが、とうとう僕に椅子ひとつ薦めずじまいです。

忘却か、はたまた、非礼か？

僕はそれを知りません。ただし、できれば、父上の御意見を伺いたいものです。

ルピック氏の返事

親愛なるにんじん殿

よく不平を言う男じゃ。ジャアク先生が席に着けといえ、それが不平、ルグリ先生が起ったままでいさせれば、それがまた不平か。たぶん其許は、まだ一人前の扱いを受けるには、年が若すぎるのだよ。それに、ルグリ先生が椅子を薦められんだことは、まあまあ恕すべきだ。其許の文が低いため、先生はきつと、もう腰かけているものと勘違いされたのだよ。

*

にんじんよりルピック氏へ

親愛なる父上

近々パリへお出かけの由、ああ首府見物、僕も行きたいのですが、今度は心のみ父上のお伴をして、その愉しみを分つことにします。僕は学業のためにこの旅行を断念しなければならな

いことを知っています。しかし、この機会を利用して、父上にお願ひがあるのです。本を一、二冊買つて来ていただけませんか。今持っている本はみんな暗記してしまいました。どんな本でもかまいません。もとを洗えば、似たりよったりです。とはいいますが、僕、そのうちでも特別に、フランソア・マリ・アルウェ・ド・ヴォルテエルの「ラ・アンリヤード」と、それから、ジャン・ジャック・ルウソオの「ラ・ヌウヴェル・エロイズ」とが欲しいんです。もし父上がそれを持って来てくだされば（本はパリではいくらもしません）、断じて、室長が取り上げるようなことはありません。

ルピック氏の返事

親愛なるにんじん殿

御申出の文士は、其許や余らとなんら異なるところなき人間だ。彼らが成したことは其許も成し得るわけだ。せいぜい本を書け。それを後で読むがよろう。

*

ルピック氏よりにんじんへ

親愛なるにんじん殿

今朝の手紙には驚き入った。読み返してみたが、やはり駄目だ。第一、文章も平生と違い、言うことも珍妙不可解で、およそ其許の柄でも、また余の柄でもないと思われることばかりだ。不断

は、細々とした用事を語り、席順がどうなったとか、先生の特長または欠点がどうか、新しい級友の名前、下着類の状態、さては、よく眠るとか、よく食うとか、書いてあることはそんなことだ。

余にとつても、実にそれが興味のあることで、今日はまったく何が何やらわからん。いかなる都合でか、目下、冬だというのに、時まさに暮春云々とある。一体なんのつもりなんだ？ 襟巻でも欲しいというのか？ 手紙に日附はなし、そもそも余に宛てたのか、それとも犬に宛てたのか、てんでわからん。字体もまた変えてあるようだし、行のくばりといい、頭文字の数といい、すべて意想外だ。要するに、其許は、誰かを馬鹿にしているらしいが、察するところ、相手は其許自身に相違ない。余はこれが罪に値するということではないが、ただ一応の注意をしておくのだ。

にんじんの返事

親愛なる父上
前回の手紙につき、急ぎ釈明のため一言します。父上は、あの手紙が韻文になっていることをお気づきにならなかったのです。



この小さい屋根の下には、これまで代る代る、鶏、兎、豚がすんでいたのだが、今は

らっぽで、休暇中は、いっさいの所有権をにんじんが独占している。彼は易々とそこへはいり込むことができる。小屋にはもう戸がないからだ。ひと叢の蓐麻がひよる長く伸びて、

閤をかくしている。で、にんじん

が腹這いになってそれを眺めると、まるで森のようだ。細かい埃が土を覆っている。壁の石が湿気を帯びて光っている。にんじんの髪の毛は、天井をこするのだ。彼はそこにいると自分の家にある気がし、そこでは邪魔な玩具なんかいらぬ。自分の空想だけでけっこう気が紛れるのである。

彼の主な遊びは、小屋の四隅へ、尻で、一つ一つ巣を掘ること

だ。それから、手を鋤の代りにして、埃をかき寄せ、これで目塗りをして、からだを植えつけてしまふのだ。

背中をすべっこの壁にもたせかけ、脚を曲げ、両手を膝の上に組み、じっとしていると、まことに工合がよい。実際、これ以上場所を取らないというわけには行くまい。彼は世の中を忘れ、もう、そんなものを怖れない。大きな雷さえ落ちて来なければ、びくともしないだろう。

食器を洗う水が、すぐそばを、流しの口から流れ落ちる、ある時は滝のように、ある時は一滴一滴。そして、彼のほうへひやりとした風を送ってくる。

突然、非常警報だ。

呼び声が近づく。跫音だ。

「にんじん！ にんじん！」

一つの顔がごもむ。にんじんは、団子のようになり、地べたと壁の間へめり込み、息を殺し、口を大きく開け、じっと視線を据える。二つの眼が闇を透しているのを感じる。

「にんじん！ そこにいるかい？」

顚顚がふくれ、喉がつまり、彼は断末魔の叫びをあげかける。

「いないや、あの餓鬼……。どこへ行きくさったんだ？」

行ってしまうと、にんじんのからだは、ややのんびりし、元の楽な姿勢にかえる。

彼の考えは、また沈黙の長い路を走り続ける。

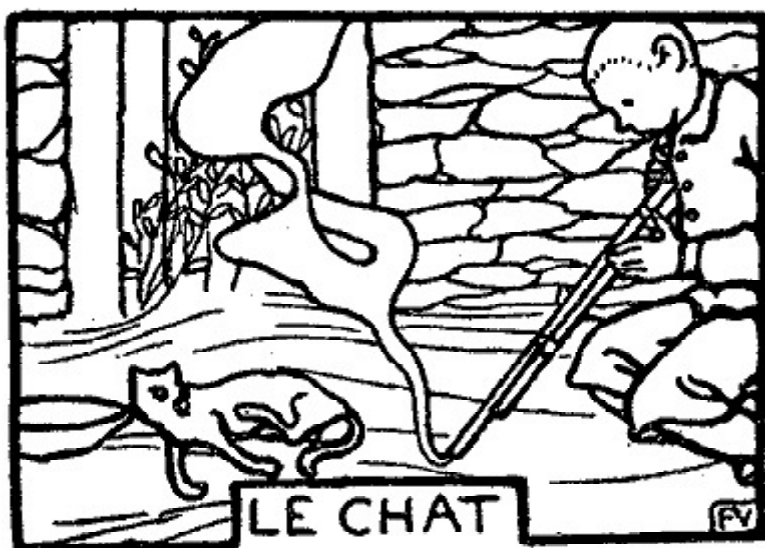
すると、騒々しい音が、耳いっぱいひろがる。天井で、一匹の羽虫が蜘蛛の巣にひっかかり、じたばたしているのだ。蜘蛛は、糸を伝ってすべってくる。腹がパンくずのような白さだ。一時不

安げに、毬まりのようになってぶらさがっている。

にんじんは、なかば尻を浮かし、眼を放さず、大団円だいたんえんを待っている。そして、この悲劇的な蜘蛛が、身を躍らし、星形の脚をすぼめ、獲物えものを抱き締めて食おうとする時、にんじんは、分け前ほも欲しいように、胸をふるわせ、がばと起たちあがった。それだけのことだ。

蜘蛛は、上へ引つ返す。にんじんはまた坐った。我われにかえる。兎のような我れにかえる。心持は夜のように暗い。

やがて、彼の夢想は、砂を混えたか細い流れのように、勾配こうはいがなくなると、水溜りみずたまりの形で、止まり、そして澱よどむ。



いつを自分のところ、つまり彼の小屋へ招待した。主客二人きりなわけだ。もっとも鼠ねずみの一匹やそこら、壁の外そとで冒険を試みるかもわからない。が、にんじんとしては、牛乳一杯しか出さないことにしてある。彼は茶碗を一隅ひとすみに置き、猫を押しゃって、そし

にんじんは、こ
ういう話を聞いた。
——「ざうがに 蜷蛄を捕る
のには、どうちう 雞の臍物
や牛豚ぎゆうがたなどの屑
より、猫の肉が一
番いい」

ところで、彼は
猫を一匹識しっていた。
た。年をとり、病
みほうけ、そここ
この毛が脱け落ち
ているので、誰も
相手にしないのだ。
にんじんは、牛乳
を一杯御馳走ごちそうする
からといって、そ

ていった——

「たらふくつめ込め」

彼は猫の背筋せすじをなで、数々の愛称で呼び、威勢のいい舌の運動を觀察し、ついでほろりとする。

「可哀かわいそうな奴やつだ。残りをたのしめ」

猫は茶碗ちやわんをからにし、底をぬぐい、縁ふちを掃除する。そして、もう、甘い唇を舐めずるよりほかはない。

「すんだか。綺麗きれいにすんだか」

にんじんは、相変わらずなでながら、訊たずねる。

「もちろん、もう一杯お代りが欲しいだろう。が、これだけしか盗み出せなかったんだ。それに、ちっと早いかちっと晚おそいかの違いだ……」

こういって、彼は、その額ひたいに獵銃つっさきの筒先を押しあてる。そして火蓋ひふたを切る。

爆音で、にんじんは、眼がくらむ。彼は、小屋まで飛んでしまったかと思う。煙けむが散った後あとで、見ると、足許あしもとに、猫がたった一つの眼で彼を見据えている。

頭の半分はどっかへ行ってしまった。そして、血が牛乳茶碗の中へ流れ込んでいる。

「死ななかつたかな？ 畜生ちくしょう、よく狙ねらったんだがなあ」

にんじんは、そういつたまま、身動きもできない。片眼だけが、黄色く光り、それが不安なのだ。

猫は、からだを顫ふるわし、生きていることを示す。が、そこを動かうという努力はいっこう試みない。血を外へこぼさないように、わざと茶碗の中へ流しているらしい。

にんじんは、これで初心ではない。幾多の野禽、家畜、それと一匹の犬を、自分の慰みに、または他人の手助けに殺したことがある。彼は、どんな時どうすればいいかということ——もしも、そいつが苦しみなから生きているなら、猶予をしてはならぬ。心を励まし、気を荒らげ、時と場合では、取っ組み合いの危険を犯さなければならぬということを知っている。さもないと、余計な糞人情がひよこり頭を持ち上げる。卑怯になる。暇つぶしだ。ふんぎりがつかない。

はじめ、彼は用心深くちよつかいを出してみる。それから、尻尾をつかみ、銃床で、首筋を、何度となく、これが最後、これが止めの一撃かと思われるほど、激しくどやしつけた。

瀕死の猫は、脚で、狂おしく虚空を掻き、丸く縮まるかと思うと、長々と反り返り、しかも、声は立てない。

「誰だい、一体、猫が死ぬ時は泣くなんていった奴は……」

にんじんは、焦れる。暇がかかりすぎる。彼は獵銃を投げ出す。両腕で猫を抱きかかえる。そして、爪の襲撃に忍えながら、歯を喰いしばり、血を湧き立たせ、ぎゅつと首を締めつけた。

が、しかし、自分も、締めつけられる思いだ。よろめき、へとへとになり、地べたに倒れ、顔と顔とを押しつけ、両眼は猫の片眼に注いだまま、坐ってしまふ。

二

にんじんは、今、鉄の寝台に横たわっている。

両親と、急報を受けたその知合いの連中が、小屋の低い天井の

下を這うようにして、惨劇の行われた場所を検分した。

「どうでしょう、心臓の上で猫を揉みくしゃにしている、それを無理に引き放そうっていうんで、あたしゃ、汗をかきましたよ。それでいて、このあたしをそんなふうに抱き締めてくれたことなにか、ありやしないんですからね」

この残酷の歴史は、やがて、家族の夜伽を通じ、昔、嘶ながらの興をそえることになるのだが、ルピック夫人が、ここでの説明をしている間、にんじんは眠り、そして夢を見ているのだ――

……彼は小川に沿って往きつ戻りつしている。お定まりの月の光が、ちらちらと動いて、女の編針のように入り交る。

玉網の上には、猫の肉が、澄んだ水を透して燃えあがっている。白い靄が草原をすれすれに這い、どうかすると、飄々たる幽霊の姿を隠している。にんじんは、両手を背中に組み、幽霊などちらとも怖くないという証拠を見せる。

牛が一匹近寄って来る。立ち止まる。溜息を吐く。急に逃げ出す。四つの木履を空まで鳴り響かせ、やがて消え失せる。

何という静かさだ！ もしこの饒舌な流れが、婆さんの会合みたいに、彼一人の耳へ、べちゃくちゃ、こそこそと、きりのないお喋りを聞かせさえないければ……。

にんじんは、口を嚙ませるために、それを打とうとでもするよに、そつと玉網の棹を引き上げると、これはまた、蘆の繁みから、大きな図体をした蜷蛄がいくつとなく現われてくる。

後から後から、まだ殖える。どれもこれも、まっすぐに突っ立ち、ぎらぎらと、水から上がる。

にんじんは苦悶に打ちひしがれ、逃げることにすらできない。

刺蝸ぎょうがには、彼を取り囲む。

喉をめがけて、伸び上がってくる。

ぱちぱち音を立てる。

もう、彼らは、はきみ鋏をいっばいにひろげているのだ。



りの中を躍り上がった。仔羊だ。にんじんは、
しく、微笑む。眼がだんだん暗闇に慣れると、細かな部分がは
つきりしてくる。

分婉期が始まっている。百姓のパジヨオルは、毎朝数えてみる
と、仔羊が二、三匹ふえている。それは、母親たちの間をうろつ
き、不器用なからだつきで、粗く彫った四本の棒切れのような脚

にんじんは、最

初、もやもやした
丸いものが、飛ん
だり跳ねたりして
いるのしかわから
なかった。それが、
けたたましい、ど
れがどれやらわか
らない声を立てる。
学校の子供が、雨
天体操場で遊んで
いる時のようだ。

そのうちの一つが
彼の脚の間へ飛び
込む。ちよいと気
味がわるい。もう
一つが、天窓の明

怖かったのがおか

を、ぶるぶる顫らせている。

にんじんは、まだ撫でてみる気がしない。そのうちで、ずうず
うしいのが、そろそろ彼の靴をしゃぶりはじめる、あるいはひと
すべの枯草を口に咬え、前足を彼のほうへのせかける。

年を取った、一週間目ぐらいのやつは、後半身にやたら力を入
れすぎて、からだが伸びたようになり、宙に浮きながら電光形に
歩く。一日たったやつは、瘡せていて、角ばった膝をがくりと突
き、すぐ、元氣いっぱいに起ち上がる。生れたての赤ん坊はねば
ねばだ。舐めてないのだ。その母親は、水気で膨らんだ財布が、
ゆさゆさ揺れる。それが邪魔なので、子供を頭ではね飛ばす。

「不都合な母親だ」

と、にんじんはいう。

「畜生でも人間でも、そこはおんなじさ」

と、パジヨオルはいう。

「きつと、乳母にでも預けたいんだろう、こやつ」

「まあ、そんなとこさ」と、パジヨオルがいう——「一匹から上
になると、哺乳器つてやつをあてがわにやらん。薬屋で売って
る、ああいうやつさ。長くは続かねえ。母親が不便がるだよ。も
っとも、艶消しにしとくだ」

彼は、親羊を抱き上げ、檻の中へ、そいつを別に入れる。頸へ藁
のネクタイを結びつける。逃げた時にわかるようにだ。仔羊は、
その後について行った。牝羊は鑢のような音を立てて食ってい
る。すると、仔羊は、身顫いをし、軟らかな脚をふんばり、鼻先
へべろべろのものをいっばいくっつけ、哀れっぽい調子で、乳を
しゃぶりがる。

「この母親にでも、いまにまた、人情つてものがもつと出るのかねえ」

にんじんはいう。

「尻がもともと通りなおりや、むろんさね。お産が重かっただから……」

パジヨオルがいう。

「僕は、やっぱり、さっきいったようにしたほうがいいと思うなあ。どうして、しばらくの間、子供の世話をほかの牝羊にさせないのさ」

「あつちで断らあね」

なるほど、小屋の隅々から、母親たちの啼き声が交錯し、授乳の時刻を告げている。それが、にんじんの耳には一律単調であるが、仔羊にとってはどこかに違いがあるのだ。なぜなら、めいめいが、まごつきもせず、一直線に母親の乳房へ飛びつくのである。

「ここじゃ、子供を盗んだりする女はいねえ」

パジヨオルがいう。

「不思議だ、こんな毛糸の玉に、家族つていう本能があるのは……」にんじんはいう——「なんて説明するかだ。鼻が鋭敏なせいかも知れない」

彼は、試しに、どれか一つ、鼻を塞いでみようと思ったくらいだ。

彼はまた、それからそれへ、人間と羊とを比較した。そして、仔羊の名前が知りたくなった。

仔羊たちが、ごくごく乳を吸っている間、おっ母さん連は、脇腹

を鼻の頭で激しく小突かれながら、安らかに、素知らぬ顔で、口を動かしている。にんじんは、秣槽の水の中に、鎖のちぎれたのとか、車の轍とか、すり切れたシャベルなどがはいっているのを見た。

「こいつは綺麗だ、この秣槽は……」と、にんじんは、小賢しい調子でいった——「なるほど。金物を入れて、血を殖やそうつてわけだね」

「そのとおり。おめえだって、丸薬を飲まされるだろう」

彼は、にんじんに、その水を飲んでみると勧める。もっと滋養分をつけるために、彼は、その中へなんでも抛り込むのである。

「ダニ公をやるうか、ダニ公を……」

と、パジヨオルはいう。

「ああ、おくれ。ありがたいぞ」

にんじんは、何か知らずに、そういつてみた。

パジヨオルは、母羊の深い毛をかき分けて、爪先で、一匹の、黄色い、丸い、肥った、満腹らしい、すぐく大きなダニをつかまえた。パジヨオルに従えば、この手のダニが二匹もいれば、子供の頭ぐらい李のように食べてしまうというのだ。彼は、そいつをにんじんの掌へのせた。そして、もし戯談なり悪戯なりがしたければ、兄貴や姉さんの、頸筋か髪の毛の中を這わしてやれと勧める。

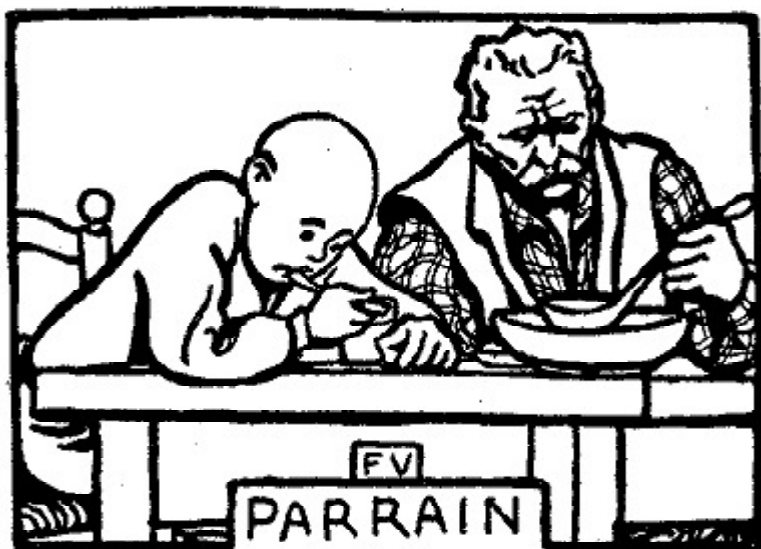
もう、ダニは仕事にかかり、皮膚を襲い出した。にんじんは指にちくちくと痛みを感じた。雲が降っているようだ。やがて、手頸、それから肱だ。ダニが無数に殖え、腕から肩へ食い上がって行く気持だ。

ええい、どうにでもなれ！ にんじんは、そいつを握りしめた。潰つぶしてしまったのだ。で、その手をパジョオルが見てないうちに、牝羊の背中へこすりつけた。

失なくしたといえはいいのだ。

それから一時いっとき、にんじんは、じっと、羊の啼き声を聴いていた。それが、だんだん鎮しずまって行く。と、まもなく、乾草ほしぐさがのろい頤あごの間で噛み砕かれる鈍い音のほか、なんにも聞こえなくなる。

縞ひらこの消えた広袖マントが、飼棚かいだなの柵にひっかかって、それが、ただ一つ、羊の番をしているらしく見える。



「やあ、来たな、坊主」と、彼はいう。

「来たよ、おじさん……。釣竿の用意、しといてくれた？」

にんじんは、そういうが、接吻はしない。

「二人で一つありやたくさんだ」

にんじんは納屋を開けてみる。別に一本、釣竿の用意ができて

どうかすると、ルピック夫人は、にんじんにその名づけ親のところへ遊びに行き、泊まってくることを許すのである。この名づけ親というのは、無愛想な、孤独な爺さんで、生涯を、魚捕りと葡萄酒で過ごしている。彼は誰をも愛していない。我慢ができるのは、にんじん一人きりだ。

いる。こうして、彼は、にんじんをからかうのが常であるが、にんじんのほうでは、万時呑み込んで、もう腹を立てない。老人のこの癖も、二人の間柄をやっこしくするようなことはまずないのだ。彼が「そうだ」という時は、「そうでない」という意味、そのあべこべが、またそうなのである。それを間違えさえしなければいい。

「それが面白いなら、こっちはどうだっておんなじだ」にんじんは、そう考えている。で、二人は、相変わらず仲善した。

この爺さん、平生は一週に一度、一週間分の炊事をするだけだが、今日は、にんじんのために、隠元豆の大鍋を火にかけ、それに、ラードの見事な塊りを抛り込む。で、一日の予定行動をはじめる前に、生葡萄酒を一杯、無理に飲まずのである。

さて、彼らは、釣りに出かける。

爺さんは水の岸に腰をおろし、テグスを手順よくほどいてゆく。彼は、敏感な釣竿を重い石で押さえておく。そして、大きなやつしか釣り上げない。魚は、手拭にくるんで日蔭へ転がす。まるで赤ん坊のおむつだ。

「いいか、浮子が三度沈まなけりや、糸を揚げるじゃないぞ」

にんじん——どうして、三度さ？

おじさん——最初のは、なんでもない。魚がせせったただけだ。二度目が、ほんものだ。呑み込んだんだ。三度目は、もう大丈夫。離れっこない。いくらゆっくり揚げてもかまわんよ。

にんじんは河沙魚^{かわはぜ}を釣るのが面白い。靴を脱ぎ、川にはいり、足で砂の底をかきまわし、水を濁らせてしまふ。馬鹿な河沙魚は、すると、駈け寄ってくる。にんじんは糸を投げ込むことに、一尾ずつ引き上げるのである。おじさんに、それを知らせる暇もない。

「十六……十七……十八……」

おじさんは、頭の真上に太陽が来ると、昼飯に帰ろうという。彼は、にんじんに白隠元^{しろいんげん}をつめ込ませる。

「こんな美味^{うま}いものはないさ」と、おじさんはいう——「しかし、どろどろに煮たやつが、わしは好きだ。噛むとごりごりするやつ、まるで、鷓鴣^{しやこ}の羽根肉^{はねにく}にもぐってる鉛^なの弾丸^{たま}みたいのに、がちりと来るやつ、あれを食うくらいなら、鶴嘴^{つるはし}の先を齧^{かじ}ったほうがましだ」

にんじん——こいつは、舌の上で溶けるね。いつも、母^{かあ}さんのこしらえるのは、そう不味^{まず}かないけど……。でも、こんな具合にはいかないや。クリームを儉約^{けんやく}するからだよ、きつと。

おじさん——やい、坊主、お前の食べるところを見ると、わしやうれしいよ。おつ母^かさんの前じゃ、腹いっぱい食えないだらう。

にんじん——母さんの腹具合によつてだよ。もし母さんがお腹^{なか}をすかしてれば、僕も、母さんの腹いっぱい食うんだ。自分の皿へ取るだけ、僕の皿へも、うんとつけてくれるからね。しかし、母さんが、もうおしまいだっていう時は、僕もおしまいさ。

おじさん——もっとくれっていうんだ、そういう時は……阿呆^{あほう}！にんじん——言うは易^{やす}しき、おじさん。それに、いつも饑^{ひもじ}いく

らいでよしといたほうがいいんだよ。

おじさん——わしは子供がないんだが、猿^{けつ}の尻^{しつ}でも舐^なめてやるぜ、その猿^{さる}が自分の子供なら……。なんとかしろよ。

彼らは、その日の日課^{にっくわ}を葡萄^{ぶどう}畑^{はたけ}で終えるのである。にんじんは、そこで、ある時はおじさんが鶴嘴^{つるはし}を使うのを眺め、一步一步その後をつけ、ある時は、葡萄^{ぶどう}蔓^{つる}の束^{たば}の上で寝ころび、空を見上げて柳の芽を吸うのである。



だ。

「おっ母^かさんが、そんなに怖い^{こわ}のか」
と、おじさんはいう。

にんじん——というよりも、母^{かあ}さんには、僕^{ぼく}がそれほど怖^{こわ}くない
んだよ。母^{かあ}さんが兄貴^{あにさま}を打^ぶとうとすると、兄貴^{あにさま}は箒^{ほうき}の柄^えへ飛

彼はおじさんと一緒に寝^ねはするが、それは、気持よく眠^ねるためではない。部屋^{へや}は寒いには寒い。しかし羽根^{はね}の寝床^{ねど}では暑^{あつ}すぎるのだ。それに、羽根^{はね}は、おじさんの年取^{としと}ったからだには柔^ならかく当^{あた}りもしようが、にんじんは汗^{あせ}びっしょりになってしま^なう。が、ともかく、彼は母親^{はは}のそばを離^{はな}れて寝^ねられるわけ

びついて、母^{はは}さんの前^{まへ}へ立ちふさがるんだ。母^{はは}さんは、手^てが出せずに、それっきりさ。だもんで、兄貴^{あにさま}に向^{むか}かっちゃ、情味^{じやうみ}で行^いくよりしようがないと思^{おも}ってる。それでこ^こういうのさ——フエリックスはとも感じ^{かん}やすい性質^{しやう}だから、打^ぶったり叩^{たた}いたりしてもなんにもならない。にんじんのほうは、まだそれでいいけれどって……。

おじさん——お前^{まへ}も箒^{ほうき}を試^{ため}してみりゃいいのに……。

にんじん——そいつがやれりや、なんでもないさ。兄貴^{あにさま}と僕^{ぼく}とは、よく擲^なり合^あいをするんだ。本気^{まじめ}でやることもあるし、ふざけてやる時もあるけど……。どっちもおんなじぐらい強いんだぜ。だから僕^{ぼく}だって、兄貴^{あにさま}のように、打^うたれないですむわけなんだ。でも、母^{はは}さんに向^{むか}かって、箒^{ほうき}を手^てに持^もつなんてことをしてごら^ん。母^{はは}さんは、僕^{ぼく}がそいつを取^とってやるんだと思^{おも}うよ。箒^{ほうき}は僕^{ぼく}の手^てから母^{はは}さんの手^てに渡^{わた}る。すると、母^{はは}さんは、僕^{ぼく}をひっぱたく前に、たぶん、「ゴッソ」っていうだろう。

おじさん——眠^ねろよ、坊主^{ぼうず}、もう眠^ねろ！

両方^{りやうほう}とも、眠^ねれない。にんじんは、寝返^{ねがえり}りを打^うつ。息^{いき}がつまる。空^{そら}氣^きを捜^{さが}す。爺^{やい}さんは、それが可哀^{かわい}そうなのだ。

突然^{とつぜん}、にんじんがうとうとしはじめた頃^{ころ}、爺^{やい}さんは、彼の腕^{うで}をつかまえる。

「そこにいたか、坊主^{ぼうず}……。ああ、夢^{ゆめ}を見た」と、爺^{やい}さんはいう——「わしや、お前^{まへ}がまだ、泉^{いずみ}の中^{なか}にいるんだと思^{おも}った。覚えてるかい、あの泉^{いずみ}のことを？」

にんじん——覚えてるところじゃないさ。ねえ、おじさん、小言こごとを言うわけじゃないけど、幾度いくども聞きくぜ、その話は……。

おじさん——なあ、坊主、わしは、あのことを考えると、からだじゃう、顫ふるえあがるよ。わしは、草の上で眠ねってた。お前は泉のへりで遊あそんでいた。お前はすべった。お前は落ち込んだ。お前は大きな声を立てた。お前はもがいた。それに、わしは、なんたるこつちや……なにひとつ、聞きこえやせん。その水といったら、猫ねこが溺おぼれるほどもないのだ。だが、お前は、起き上がらなんだ。災難さいなんは、つまり、そこからさ。一体全体、起き上がることぐらい考えかんえつかなかったかい？

にんじん——泉の中で、どんなことを考えてたか、僕ぼくが覚えてると思う、おじさん？

おじさん——それでも、お前まへが水をばちやばちいわせる音で眼めが覚さめた。やっとこさで間に合あったんだ。この糞くそ坊主ぼうず！ 可哀かなそうに、ポンプみたいに水を吐はくじゃないか。それから、着物を着替かえさせた。ベルナルの日曜にちように着る服を着せてやったんだ。

にんじん——ああ。あいつは、ちかちかしたつけ。からだを搔かきづめさ。馬の毛で作つくった服だよ、ありや。

おじさん——そうじゃないよ。だが、ベルナルは、お前に貸してやる洗せんいたてのシャツがなかったんだ。わしは、今、こうして笑わらってるが、あれでもう一、二分、うっちゃらかしといてみる、起おこした時は、お前は死しんでるんだ。

にんじん——今頃は、はるか遠とほくにいるわけだね。

おじさん——よせ、こら！ わしも、つまらんことをいい出した。

で、それからっていうもの、夜、ぐっすり眠ねった例たといがいないのだ。一生安眠あんみんを封ふうじられても、こりや、天罰てんばつだ。わしは文句をいうところはない。

にんじん——僕は、文句をいいたいよ、おじさん。眠ねくつてしょうがないんだ。

おじさん——眠ねろよ、坊主、眠ねろよ！

にんじん——眠ねろっていうなら、おじさん、僕の手を放してよ。眠ねっちゃったら、また貸したげるから……。それから、この脚あしをそっちへ引ひっこめとくれよ。毛けが生はえてるんだもの。人が触さわつてると、僕、眠ねられないんだ。



しばらく寝つか
れないで、彼らは
羽根布団の中はねふとんでも
ぞもぞしている。
おじさんがいう
「坊主ぼうず、眠ねってる
かい？」
にんじん——うう
ん。
おじさん——わし
もだ。どら、起き
てやろうかな。お
前みへも、よかつたら、
蚯蚓みみず捕とりに行こ
う。

「よかろう」
と、にんじんはいった。
二人は寝台から飛びおり、着物をひっかけ、カンテラに火を点
け、そして、裏庭へ出る。
にんじんがカンテラを提さげ、おじさんが半分泥のつまったブリ

キ罐かんを持って行く。この中へ、釣り用の蚯蚓みみずを蓄えて置くのであ
る。それから、その上へ湿しめった苔こけを載のせる。これで、蚯蚓がなくな
ることはない。一日雨が降ったような時は、収獲は豊富である。
「踏みつけないように気をつけろ」と、彼は、にんじんにいう
——「そつと歩けよ。わしも風邪かぜを引きさえしなきゃ、布靴ぬのぐつを穿
くんだ。ちよつとした音でも、蚯蚓のやつ、穴へ引っ込んでしま
うから……。奴やつこさん、家うちから這い出しすぎた時でなけりやつかま
らんだ。急に押さえて、すべらないくらいに、そつとつまむん
だぜ。半分頭をつつこんだら、放はなしちまえ。ちぎるといかん。切
れた蚯蚓は、なんの役にも立たんだ。第一、ほかのやつを腐くさら
しちまう。それに、品のいい魚は、そんなものは見向きもしない。
漁師の中には、蚯蚓をけちけちするのがある。こりや、間違いだ。
丸ごと、生きていて、水の底で縮ちぢこまる蚯蚓でなけりや、上等な
魚は釣れんのだ。魚は、そいつが逃げるとみて、後あとを追っかけ、
安心あんしんしきつて、ぱくりとやる」
「どうも、失敗しくじってばかりいる」と、にんじんは眩くらく——「そ
れに奴らのきたねえ涎よだれで、こら、指がべたべたすらあ」

おじさん——蚯蚓はきたなかない。蚯蚓は世の中で一番きれいな
もんだ。奴あ、土を食って生きてる。だから、潰つぶしてみろ、土
を吐き出すだけだ。わしだったら、食ってみせる。
にんじん——僕ぼくだったら、おじさんに進呈しんせいすらあ。食べてごらん。
おじさん——こいつらは、ちつとでけえや。まず、火であぶらに
や。それから、パンの上へなすりつけるんだ。だが、小さいの
なら、生なまで食うぜ。そら、李すももについてる奴よ、いつてみりや

……。

にんじん——うん、そんなら知ってるよ。だから、家のもんがおじさんをいやだっていうんだ。母さんなんか、ことにそうだ。おじさんのことを考えると、胸が悪くなるってさ。僕あ、真似はしないけど、おじさんのすることは好いと思ってるよ。だって、おじさんは、文句をいわないもの。僕たちは、まったく意気投合してるんだ。

彼は、カンテラを挙げ、李の枝を引き寄せ、李をいくつかちぎる。そして、良いのを取っておき、虫のついたやつをおじさんに渡す。すると、おじさんは、順々に、丸いのをそのまま、種ごと、ひと息に呑み込んで、そしていう。

「こういうのが、一等うまいんだ」

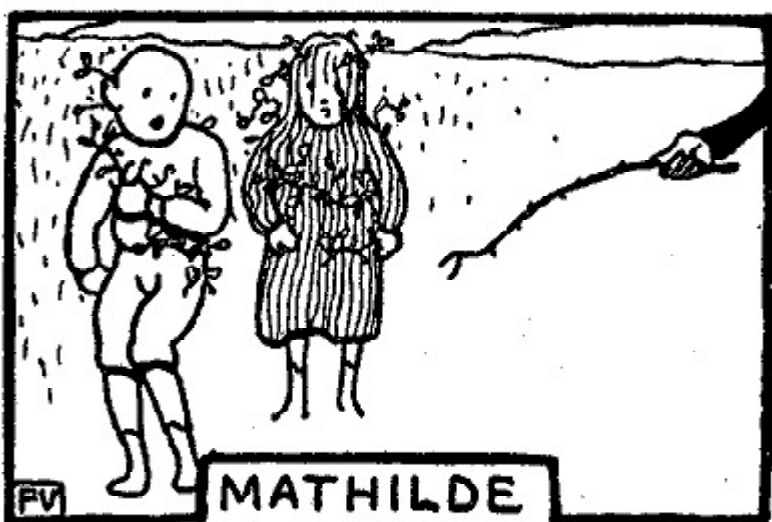
にんじん——なに、僕だって、しまいに、それくらいのことはするさ。そんなのをおじさんみたいに食べてみせるよ。ただ、あとが臭いといやなんだ。母さんが、もしキスした時、気がつくもの。

「臭いもんか」

と、おじさんはいう。そして、にんじんの顔へ息を吐きかける。

にんじん——ほんとだ。煙草の臭いがするつきりだ。こりゃひどい、鼻じゅういっぱい臭うぜ。……僕、おじさんは大好きだ、いいかい。だけど、もし煙管を吸わなかったら、もっと、それこそ、ほかの誰よりも好きなんだがなあ。

おじさん——いうなよ、坊主……。こいつは、人間の持ちをよくするんだ。



「あのね、母さん……」と、姉のエルネスチヌは息を切らしてルピック夫人にいいつけた——「にんじんがね、また原っぱで、マチルドと夫婦ごっこをしているわよ。フェリックス兄さんが着物を着せてんの。だって、あんなことしちゃいけないでしょう」

なるほど、原っぱでは、小娘マチルドが、白い花をつけた牡丹蔓の衣裳で、じつとしゃちこばっていた。おめかしは十分、これならまぎれもなく、オレンジの枝で粧われた花嫁そっくりだ。しかも、つけたわ、つけたわ、疵痛の薬だけに、世の中の疵痛が残らず止まるほどだ。

そこでこの牡丹蔓だが、まず頭の上で冠形に編まれ、それが波を打って頤から、背中、さては腕に沿って垂れさがり、絡み合

い、胴に捲きつき、やがて地べたを這って尻尾となる。それをまたフェリックスが延ばすこと延ばすこと。

やがて、彼は、後すざりをしていう——

「もう動いちゃいけないよ。さ、お前の番だ、にんじん！」

今度は、にんじんが、新郎の衣裳をつける番だ。同じように牡丹蔓を捲きつける。が、ところどころへ、罌粟、山査子の実、黄色いたんぽぽをぱつとあしらう。マチルドと区別をするためだ。彼は、笑いたくない。で、三人とも、それぞれ大真面目である。彼らは、儀式儀式に応わしい空気というものを心得ている。葬式では、始めから終りまで悲痛な顔をしていなければならぬ。婚禮では、ミサがすむまで厳肅でなければならぬ。さもないと、何ごっこをしても面白くないのである。

「手をつないで！」と、フェリックスはいう——「前へ進め！ 静かに！」

彼らは、足をそろえ、からだを離して歩き出す。マチルドは、お引摺りが足に纏わりつくと、自身でそれをまくり上げ、指の間に挟む。にんじんは、片足を上げたまま、優しく、彼女を待っている。

兄貴のフェリックスは、彼らを原っぱじゅうひっぱりまわす。彼は後向きになって歩くのである。両腕を振子のように振って、拍子を取る。彼は、自分が村長のつもりで彼らに会釈をし、それから、司教らしく祝福を与え、ついで、友だちとしてお祝いを述べ、お世辞をいう。それからまたヴァイオリン弾きになり、棒切れと棒切れとをこすり合わせる。

彼は、二人を縦横に歩かせる。

「止まれっ！」と彼はいう——「ずれて来やがった」

が、マチルドの花冠^{はなかむり}を平手で押しつぶすだけの暇で、また、行列は動き出す。

「あ痛^{いた}あ！」

マチルドは、顰^{しか}め面^{つら}をして叫ぶ。

牡丹蔓の節くれが髪の毛をひっぱるのだ。兄貴のフェリックスは、髪の毛ごとそいつを取り除ける。また続行だ。

「ようし……。さあ、婚礼がすんだ。キスし合って……」

二人が遠慮していると、

「おい、どうしたんだい。キスしないかよ。婚礼がすんだら、キスするんだよ。両方から寄っかかって行きな。なんとかいうんだぜ。まるで棒杭^{ぼうくい}みたいだ、お前たちや」

自分が上手^{うわて}とみて、彼は、二人の不器用さを鼻で嗤^{わら}う。多分もう、甘い言葉ぐらい口にしたことがあるのだろう。彼はそこでお手本を示す。まっ先にマチルドにキスをする。骨折り賃^{くわし}というところだ。

にんじんは勇気を奮い起こす。蔓草^{つるくさ}の隙間^{すきま}からマチルドの顔を捜し、その頬に唇をあてる。

「戯^{じやうだん}談だと思わないでね。僕、ほんとにお前と夫婦になってもいいや」

マチルドは、されたとおり、彼にキスを返す。たちまち二人ともぎごちなく、羞^{はにか}んで、真^まっ赤^かになる。

兄貴のフェリックスは、そろそろ敵意を示しだす。

「やあい、照^てれた、照^てれた……」

彼は二本の指をこすり合わせ、唇を中へ捲き込み、足をじたば

たさせた。

「ずうずうしい奴！ほんとに、その気になってやがらあ」

「第一、照^はれてなんかいやしない」と、にんじんはいった——「それから、囁^{ささ}したけりや、囁^{ささ}したっていいよ。僕がマチルドと夫婦になるのを、兄さん、いけないっていいえるかい。母さんがいいっていえばだよ」

しかし、折も折、その母さんが、自分で、「そいつはいかん」と返事をしに来了。彼女は原っぱの界^{さかい}の木戸を押し開ける。そして、告^つげ口^{ぐち}をしたエルネスチヌを従えて、はいつて来了。生籬^{いけがき}のそばを通る時、彼女は茨^{いばら}の枝をへし折り、棘^{とげ}だけ残して葉をもぎ取った。

彼女は、まっすぐにやって来る。嵐と同様、避けることはできない。

「ぴしゃっと来るぞ」

兄貴のフェリックスはいった。もう原っぱの端^{はし}まで逃げて行き、からだを隠^{かく}して眼だけ出している。

にんじんは決して逃げない。平生^{へいぜい}から、臆^{おくびよう}病ではあるが、早く始末をつけたほうがいいのだ。それに、今日は、なんとなく勇猛心が起こっている。

マチルドは、慄^{ふる}えながら、寡婦^{やもめ}のようにしゃくり泣きをしている。

にんじん——心配しないでいいよ。母さんって人、僕を識^しってるんだ。僕だけとちめようてんだ。万事引き受けるよ。

マチルド——そりゃいいのよ。だけど、あんたの母さん、なんで

もううちの母さんにいいつけるわ。うちの母さん、あたしを打つわ。

にんじん——折檻せつかんする。セツカンするっていうんだよ、親が子供をぶつ時は……。お前の母さん、折檻するかい？

マチルド——ええ、時々……。事柄ことがらによるわ。

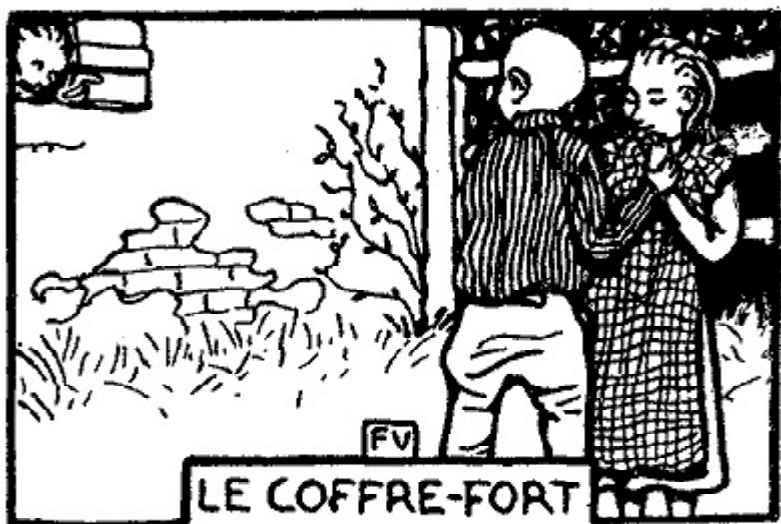
にんじん——僕なんか、もうきまつてるんだ。

マチルド——だけど、あたし、なんにもしやしないわ。

にんじん——いいったら……。そら、エヘン。

ルピック夫人は近づいた。もう逃げようたつて逃がさない。暇ひまは十分にある。彼女は歩を緩める。側そばへ寄れるだけ寄る。姉のエルネスチヌは、これ以上近寄ると、棒がはね返つて来た時に危あぶないと思ひ、行動の中心地帯を境として、その線上に立ち止まる。にんじんは、「お嫁さん」の前に立ちふさがる。「お嫁さん」は、ひとときわ激しく泣き出す。牡丹蔓の白い花が入り乱れる。ルピック夫人は茨の枝を振り上げる。まさに打ち降おろそうという時だ。にんじんは、蒼あおざめ、腕を組み、そして首を縮め、もう腰のへんが熱あつく、脹ふくらがあらかじめひりひり痛い。が、彼は、傲然ごうぜんといひ放つ——

「いいじゃないか、そんなこと……戯談じょうだんなんだもの……」



翌日、にんじん
はマチルドに会つ。
彼女は彼にいう

「あんたんちの母^{かあ}
さん、うちの母さ
んにあのことをい
いつけに來たわよ。
あたし、うんとお
尻^{しり}をぶたれちゃっ
た。あんたは？」

にんじん——僕、
どうだったつけ、
忘れちゃった。だ
けど、お前、ぶた
れるわけではないよ。

僕たちなんにも悪いことしやしないんだもの。
マチルド——ええ、そうよ。

にんじん——僕、お前と夫婦になつてもいいつていつたろう、あ
れ、真面目^{まじめ}にそういったんだよ、ほんとだよ。

マチルド——あたしだって、あんたと夫婦になつてもいいわ。
にんじん——お前は貧乏で、僕は金持ちだから、ほんとなら、お

前を輕蔑^{けいべつ}しちゃうんだけど、心配しないだつていいよ。僕、お
前を尊敬^{けいけい}してるから……。

マチルド——お金持ちつて、いくらもつてんの。
にんじん——僕んちには、百万円あるよ。

マチルド——百万円つて、どれくらい？

にんじん——とてもたくさんさ。百万長者^{ひゃくまんぢやう}つていや、いくらお金
を使つたつて使いきれないんだから……。

マチルド——うちの父^{ちち}さんや母さんは、お金がちつともないつて、
よくこぼしてるわ。

にんじん——ああ、うちの父さんや母さんだつてそうだ。誰でも、
人に同情^{どうじやう}されようと思つてこぼすんだ。それと、妬^{ねた}んでる奴^{やつ}に
お世辞^{せじ}を使うのさ。だけど、僕たちは、金持ちだつてことは、
ちゃんとわかつてるんだ。毎月^{まいげつ}一日^{いちじつ}には、父さんが一人つきり
でしばらく自分の部屋へひっこんでる。金庫の錠^{じやう}前^{まえ}がギギ
イつて音を立てるのが聞こえるんだ。夕方^{ゆふがた}だろう、それが……。
まるで青蛙^{あおがえる}が鳴くみたいさ。父さんは誰^だあれも知らない——
母さんも、兄貴^{にい}も、姉^{ねえ}さんも誰^だあれも知らない文句^{もんぐ}をひと言^{こと}
うんだ。それを知つてゐるのは、父さんと僕とだけさ。すると、
金庫の扉が開く。父さんは、そんなからお金を出して、お勝手
のテーブルの上へ置きに行く。なんにもいわずにさ。ただ、お
金をがちやがちやつていわせるだけだ。それで、竈^{へっつい}の前で用
をしてる母さんに、ちゃんとわかるんだ。父さんが出て行く。
母さんは後ろ^{うしろ}を振り向く。お金をかき集める。毎月毎月、その
とおりのことをするんだ。それが、もうずいぶん長く続^{つづ}いてる
もんだもの、金庫の中に、百万円の上^{うへ}はいつてゐる証拠^{しやうこ}だろう。

マチルド——で、開ける時に、父さんがいう文句って、そりや、どんな文句？

にんじん——donなって、訊^きくだけむだだ。僕たちが夫婦になったら教えてあげるよ。ただ、どんなことがあっても人にしゃべらないって約束しなきゃ……。

マチルド——今、すぐ教えて……。そしたら、今すぐ、人にしゃべらないって約束するわ。

にんじん——だめだよ。父さんと僕との秘密なもの。

マチルド——あんなこといって、自分でも知らないくせに……。

知ってるなら、あたしに伝えるわけだわ。

にんじん——おあいにくさま、知ってますよだ。

マチルド——知らないよだ。知らないよだ。やあい、やあい、いい気味^{きび}だ。

「よし、知っていたら、何よこす」

と、にんじんは、厳^{おご}かにいった。

「なんでもいいわ。なに？」

マチルドは、ためらい気味^{きみ}だ。

「僕がさわりたいところへさわらせろよ。そしたら、文句を教えてやら」

にんじんが、こういうと、マチルドは、相手の顔を見つめた。よくわからないのだ。彼女は、狡^{ずる}そうな灰色の眼を、思い切り細くした。さあ、こうなると、知りたいことが、一つでなく、二つになったわけだ。

「先へ文句を教えてよ、にんじん」

にんじん——じゃ、指切り^{ゆびき}だよ。教えたら、僕がさわりたいところへさわらせるね。

マチルド——母さんが、指切りなんかしちゃいけないって。にんじん——じゃ、教えてやらないから。

マチルド——いいわよ、そんな文句なんか……。あたし、もうわかつちやった。そうよ、もうわかつちやったわ。

にんじんは、しびれを切らし、手っ取り早く^{ごと}事運ぶ。

「ねえ、マチルド、わかてるもんか。ちつともわかつてやしないや。だけど、君がしゃべらないっていうなら、それでいいよ。

父さんが金庫を開ける前にいう文句はね、いいかい、オペレケニユウ。さあ、もうさわってもいいね」

「オペレケニユウ！ オペレケニユウ！」——一つの秘密を知った悦び^{よろこ}と、それがいいかげんじゃないかという心配とで、マチルドは、後^{あと}ずさりをする——「ほんと？ あたしをだましてんじゃないの？」

で、にんじんが、返事もせずに、いきなり片手を伸ばして向かって来るので、彼女は逃げ出す。彼女のケケケケという笑い声がにんじんの耳にはいる。

彼女の姿が消えると、後^{うし}ろで、誰かが嘲笑^{あざわら}う声がある。

後^{うし}ろを振り向く。廐^{うまや}の天窓^{てんまど}から、お屋敷の下男が頭を出し、歯^むを剥^むいている——

「見たぞ、にんじん。おっ母^かさんにいつつけちゃろう」

にんじん——ふざけてたんだよ、ピエエルおじさん。あの娘をつかまえようと思ったんじゃないか。オペレケニューってのは、僕がいかげんに作った名前だよ。第一、ほんとのことは、僕だって知りやしないよ。

ピエエル——安心しな、にんじん、オペレケニューはどうだっていいんだ。おめえのお母さんにそんなことあいやしねえ。それより、もう一つのことをいわあ。

にんじん——もう一つのことって？

ピエエル——そうよ、もう一つのことよ。おらあ、見たぞ、見たぞ、にんじん。そうじゃねえっていつてみな。へえ、年にしちや、やるぞ、おめえ。いいから、みてろ、今夜、耳がどうなるか。いやってほどひっぱられるぞ、やい！

にんじんは、別にいうべきことはない。髪の毛の自然な色が消えたかと思うほど顔を赤くし、両手をポケットにつっこみ、鼻をすすりながら、臺のように遠ざかって行く。



の左の脚は、もう一方の脚に引きずられ、決してそれに追いつかない。彼は、杖をもっている。そしていう――

「来ない、にんじん？　うちのお父つあんが川へ網をかけてるんだ。手伝いに行こう。それで、僕たちは杖でオタマジャクシをしゃくおうよ」

「母さんに訊けよ」

にんじんは、ひ

とり、中庭で遊ん

でいる。それも、

ルピック夫人が窓

から見張りのでき

るように、まん中

にいたのである。

で、彼は、神妙

に遊ぶ稽古をす

る。そこへちよう

ど、友だちのレミ

イが現われた。同

い年の男の子で、

跛足をひき、しか

も、しょっちゅう

走ろうとばかりす

る。自然わるい方

だ。自然わるい方

と、にんじんは答える。

レミイ――どうして？　僕がかい。

にんじん――だって、僕だと許しちゃくれないからさ。

ちようど、ルピック夫人が、窓ぎわに姿を現わす。レミイはいう――

「おばさん、あのねえ、すみませんけど、僕、オタマジャクシ捕りに、にんじんを連れていつていいですか」

ルピック夫人は、窓ガラスに耳を押しつける。レミイは、声を張り上げて、もう一度いい直す。ルピック夫人は、わかった。口を動かしているのが見える。こっちの二人には、なんにも聞こえない。で、顔を見合わせて、もじもじする。しかし、ルピック夫人は、頭を振っているのではないか。明らかに、不承知の合図をしているのだ。

「いけないってさ」――にんじんはいう――「きっと、後で、僕に用事があるんだろう」

レミイ――じゃあ、しょうがないや。とっても面白いんだけどな

あ。なあんだい、いけないのか。

にんじん――いろよ。ここで遊ぼう。

レミイ――いやなこった。オタマジャクシ捕りに行ったほうが、ずっといいや。暖かいんだもん、今日は……。僕、杖に何杯も捕ってみせるぜ。

にんじん――もう少し待ってろよ。母さんは、いつでも、はじめ

いけないっていうんだ。後あとになって、どうかすると、また意見が変へわるんだ。

レミイ——じゃ、十五分かそこらだよ。それより長くはいやだぜ。

二人とも、そこに突つつ立たったまま、両手をポケットに入れ、素知そしらぬ顔で、踏段ふみだんのほうに気を配くばっている。と、やがて、にんじんは、レミイを脇わきで小突こづく。

「どうだ、いったとおりだろう」

なるほど、戸が開あいて、ルピック夫人が、片手ににんじんのための箒ほうきを持ち、踏段ふみだんを一段おありた。が、彼女は、不審ふしんげに、立ち止まる。

「おや、お前さんまだいたの、レミイ？ もう行いつちままったのかと思おもった。お父とうつあんにいいつけるよ、そんなとこで無駄遊むだあそびをしてると……」

レミイ——おばさん、だって、にんじんが待つてろろっていうんだもの……。

ルピック夫人——なに、そりゃほんとかい、にんじん？

にんじんは、そうだともそうでないともいわない。自分ながら、もうわからないのだ。彼はルピック夫人のどこからどこまでを識しり抜ぬいている。だからこそ、今もまた、彼女の腹はらの中を見抜ぬいたわけだ。ところが、このレミイの間拔野郎まぬけやろうが、事ことを面倒めんどうにし、なにもかもぶち毀こわしてしまった。にんじんは、もう結末けつまつがどうであらうとかまわないのである。彼は、足で草を踏みにじり、そつ

ぽを向むいている。

「そんなこというけど、考えてごらん」と、ルピック夫人はいう——「母さんは平生へいぜいでも、一度いいったことを取り消したりなんかしないだろう」

その後へは、ひと言ことも附つけ加くえない。

彼女は、また踏段ふみだんを登のぼって行く。ついでに箒ほうきも持つてはいってしままう。にんじんがオタマジヤクシをしゃくうために持つて行く箒ほうきだ。そして、そいつは、彼女がわざわざ生なまの胡桃くるみをあけて来たのである。

レミイは、もう、はるか彼方かなたにいる。

ルピック夫人は、ほとんど戯談じよだん口くちをきかない。それでよその子供たちは、彼女のそばへ来ると用心用心をする。まず学校の先生程ほど度に怖ころしいのである。

レミイは、向むこうのほうを、川を目がけて、一目散いくもくさんに走はっている。その駈はけつぷりの早さときたら……相変あへわらず遅おそれる左の足が、道の埃ほりへ筋すぢをつけ、踊り上がり、そして鍋なべのような音おとを立てている。

せつかくの一日を棒に振はって、にんじんは、もう、何をして遊ぶ氣にもならない。

彼は、すばらしい慰なぐさみを取り逃のがした。

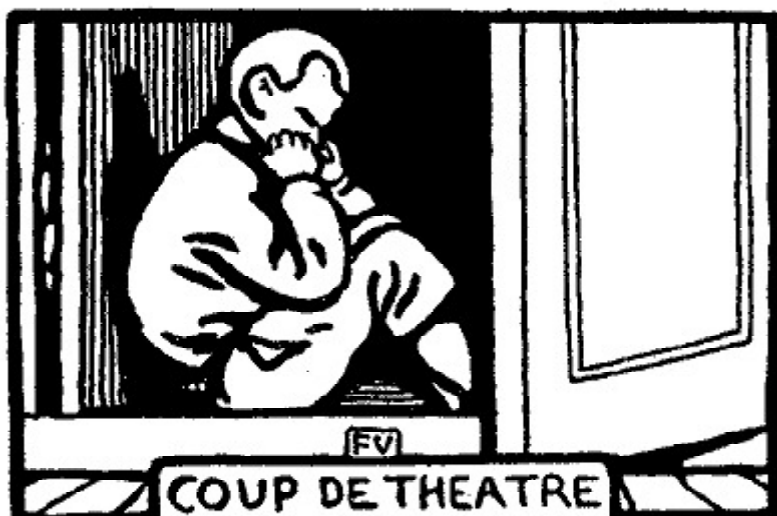
これから、そろそろ口惜くやしくなるのだ。

彼は、それを待つばかりである。

佗わしく、頼たのりなく、にんじんはじつとしている——退屈たいくつが来るなら来こい！ 罰ばちが当たるなら当たれ！ だ。

だいじゅつたい
大事出来

第一場



——
わかったよ。

第二場

ルピック夫人——
どこへ行くんだ
い？

にんじん（彼は新
しいネクタイをつ
け、靴へはびしょ
びしょに唾をひっ
かけた）——父さ
んと散歩に行くの。
ルピック夫人——
行くことはならな
い。わかったかい？
さもなきや——
（彼女の右手が、
勢いをつけるため
に、後ろへさがる）
にんじん（低く）

にんじん（柱時計の下で考え込みながら）——おれは、どうした
いってうんだ？ 痛い目にあわなきや、それでいいんだ。父
さんは、母さんより、そいつが少ない。おれは勘定したんだ。
父さんには気の毒だが、まあしょうがない。

第三場

ルピック氏——（彼はにんじんを可愛がっている。しかし、いっ
こう、かまいつけない。絶えず、商用のため、東奔西走して
いるからだ）——さあ、出かけよう。
にんじん——ううん、僕、行かないよ。

ルピック氏——行かないたあ、なんだ？ 行きたくないのか？

にんじん——行きたいんだよ。だけど、だめなんだ。

ルピック氏——わけをいえ、どうしたんだ。

にんじん——なんでもないの。だけど、家にいるんだ。

ルピック氏——ああ、そうか、また例の気紛れだな。うるさい真似
はよせ。一体、どうすりゃいいんだ！ 行きたいっていうかと
思うと、もう行きたくない。じゃ、いいから家にいろ。そして、
勝手に泣き面かくがいい。

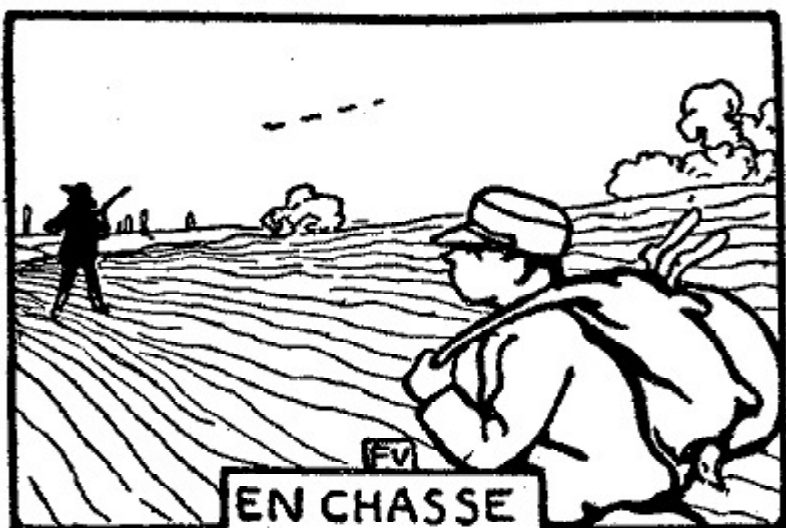
第四場

ルピック夫人——（彼女はいつでも、人の話がよく聞こえるよう
に、用心深く、戸の蔭で聴き耳を立てているのである）——よ
しよし、可哀そうに！（猫撫声で、彼女は、彼の髪の毛の

中に手を通し、それをひっぱる）——涙をいっぱい溜^ためてるよ、この子は……。そうだろうとも、父さんが……。、（そこで彼女は、ルピック氏のほうをそつと見る）——いやだっというもんを無理に連れて行こうとするからだね。母さんはそんなことしないよ、そんな残酷^{ざんこく}ないじめかたは……。、（ルピック夫婦は、背中を向き合わせる）

第五場

にんじん（押入れの奥である。二本の指を口の中へ、一本を鼻の孔へつつこみ）——誰^だれもかれも、孤児^{みねしこ}になるってわけにやいかないや。



出さない。手の指が捻じ切れそうだ。足の爪先が膨れて、小槌の形になる。

ルピック氏が、猟の初めに、兎を一匹殺すと、

「こいつは、そのへんの百姓家へ預けるか、さもなけりや、生籬の中へでも匿しといて、夕方持って帰るとしようや」

こいう。にんじんは、

ルピック氏は、息子たちを交る交る猟に連れて行く。彼らは、父親の後ろを、鉄砲の先を除けて、すこし右のほうを歩く。そして、獲物を担ぐのである。ルピック氏は疲れを知らぬ歩き手だ。にんじんは、苦情もいわず、遮二無二

がんばって後をついて行く。靴で怪我をする。そんなことは暖気にも

い。行く。靴で怪我をする。そんなことは暖気にも

い。行く。靴で怪我をする。そんなことは暖気にも

生籬

「ううん、僕、持ってるほうがいいんだよ」

そこで、一日じゅう、二匹の兎と、五羽の鷓鴣とを担いで廻るようなことがある。彼は獲物囊の負い革の下へ、あるいは手、あるいはハンケチを差し込んで肩の痛みを休める。誰かに遇うと、大仰に背中を見せる。すると、一瞬間、重いのを忘れるのである。

が、彼は飽きあきしてくる。ことに、何ひとつ止めず、見栄という支えがなくなると、もうだめだ。

「ここで待ってろ。わしは、その畑をひと漁りしてくる」
時として、ルピック氏はこいう。

にんじんは焦れて、日の照りつける真下に、突っ立ったまま、じっとしている。彼は、親爺のすることをみている。畑の中を、畦から畦へ、土くれから土くれへと、踏みつけ踏みつけ、耙のように、固め、平らして行く。鉄砲で、生籬や灌木の茂みや、薊の叢をひっぱたく。その間、ピラムはピラムで、もうどうする力もなく、日蔭をさがし、ちよつと寝転んでは、舌をいっぱいに垂れ、呼吸をはずませている。

「そんなとこに、なにがいるもんか」と、にんじんは心の中でいう——「そうそう、ひっぱたけ！ 蓐麻でもへし折るがいい。秣掻きの真似でもしろ！ もしおれが兎で、溝のくぼみか、葉の蔭に棲んでいんだつたら、この暑さに、ひよこひよこ出かけることはまず見合わせだ！」

で、彼は、ひそかにルピック氏を呪い、小さな悪口を投げかける。

すると、ルピック氏は、またひとつの柵を飛び越えた。傍ら

の首 蓑 畑を狩り立てるためだ。今度こそ、兎の小僧が二匹や三匹、どんなことがあったっていいはずはないときめていたのだ。

にんじんは、そこで呟く――

「待ってろっていったけど、こうなると、くつついて行かなきゃなるまい。初めの調子の悪い日は、終いまで悪いんだ。親爺！いいから走れ！汗をかけ！犬がへとへとになろうと、おれが腰を抜かそうと、かまうことあない！どうせ坐ってるのと、結果はおんなじさ。手ぶらで還るんだ、今夜は」

そういえば、にんじんは、他愛のない迷信家である。

(彼が帽子の縁へ手をかける度ごとに)ピラムが、毛を逆立て、尻尾をぴんとさせて、立ち止まるのである。すると、ルピック氏は、銃尾を肩に押しあて、ぬき足さし足で、できるだけその側へ近づいて行く。にんじんはもう動かずにいる。そして、感動の最初の火花が、彼を息づまらせる。

(彼は帽子を脱ぐ)

鷓鴣が舞い立つ。さもなければ、兎が飛び出す。そこで、にんじんが、(帽子を下へおろすか、または、最敬礼の真似をするかで)、ルピック氏は、失敗るか、仕止めるか、どっちなのである。

にんじんの告白によれば、この方法も百発百中というわけにはいかぬ。あまりしばしば繰り返してやると、効き目がないのである。好運も同じ合図にいちいち応えることは面倒なのであろう。で、にんじんは、控え目に間を置くのである。そうすればまず大概は当たるといわけた。

「どうだい、撃つところを見たかい？」と、ルピック氏は、まだ温

かい兎をつるし上げ、それから、そのブロンドの腹を押さえつけて、最後の大便をさせる――「どうして笑うんだい」

「だって、父さんがこいつを仕止めたのは、僕のお蔭なんだもの」にんじんは答える。

また今度も成功だというので、彼は得意なのだ。そこで、例の方法を、ぬけぬけと説明したものである。

「お前、そりや、本気か？」と、ルピック氏はいった。

にんじん――いいや、そりや、僕だって、決して間違いはないとはいわないさ。

ルピック氏――もういいから、黙つとれ、阿呆！わしから注意しといてやるが、もし、頭のいい兎っていう評判を失くしたくなけりや、そんなでたらめはよその人の前でいわんこった。こつびどく嗤われるぞ。それとも、万が一、わしをからかおうとでもいうのか？

にんじん――ううん、そんなことないよ、父さん。だけど、そういわれてみると、ほんとだね。ごめんよ。僕あ、やつぱりお人好しなんだ。



追っかけられてるようだ。休む暇といったら桑の実とか野生の梨とか、または、口がしびれ、唇が白くなり、そして喉の渴きをとめるうっぱ草の実とかをちぎる時だけである。それに、彼は獲物囊の力クシの中に、焼酎の罎をもっている。それを、ごくごくぐり、彼ひとり、あらし飲んでしまう。ルピック氏は、猫に夢中で、請求するのを忘れていたからだ。

猫はまだ続くのである。にんじんは、自分が馬鹿に思えてしかたがなく、後悔のしるしに、肩をぴんと上げる。それから、新しく元気を出して、父親の足跡を拾って行く。つまり、ルピック氏が左の足を置いたところへ、自分も左の足を置くというふうにある。いきおい大股になる。人喰鬼にでも

「ひと口どう、父さん」

風は「いらん」という音しか運んでこない。にんじんは、今薦めたそのひと口を自分で飲み干し、罎をからっぽにする。頭がふらふらになる。が、父親の後を追いかける。突然、彼は立ち止まる。耳の孔へ指をつっこむ。乱暴に廻す。引き出す。それから、耳を澄ます恰好をして、ルピック氏に叫びかける——

「あのね、父さん、僕の耳の中へ、蠅が一匹はいったらしいよ」

ルピック氏——除いたらいいだろう。

にんじん——奥の方へ行っちゃったんだよ。届かないんだもの。ブーンっていつてんのが聞こえるよ。

ルピック氏——放っとけ。ひとりで死ぬよ。

にんじん——でも、もしかして、卵を生んだら？ 巣をこさえた

ら？ え、父さん？

ルピック氏——ハンケチの角で潰してしろ。

にんじん——焼酎をすこし流し込んで、溺れさしちまったらどう？ そうしてもいい？

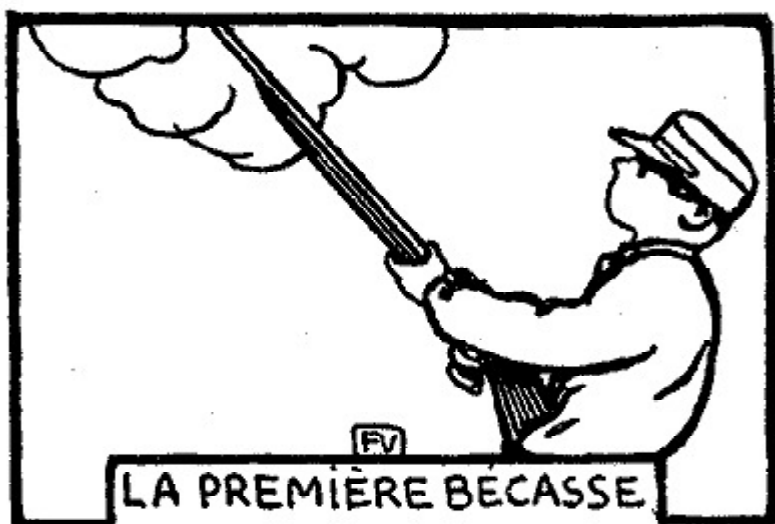
「なんでも流し込め！」と、ルピック氏はどなる——「だが、早くしろ」

にんじんは罎の口を耳にあてがい、もう一度そいつをからっぽにする。ルピック氏が、わしにも飲ませろといい出した時の用心にである。

で、やがて、にんじんは、駈け出しながら、うきうきと叫ぶ

「そらね、父さん、僕、もう蠅の音が聞こえなくなったよ。きつ

と死んだんだろう。ただ、やつめ、これみんな飲んじゃがった」



「そこにいろ、一番いい場所だ。わしは犬を連れて林をひと廻りしてくる。鳴^{しぎ}を追いつ立てるんだ。いいか、パイパイって声がしたら、耳を立てる。それから眼をいっぱい開^あける。鳴が頭の上を通るからな」

ルピック氏は、こういった。

にんじんは、両腕で鉄砲を横倒しに抱いた。鳴を撃^うつ。鵜^うを一羽殺^{ころ}す。つのはこれが初めてだ。彼は以前に、父の猟銃で、鷓鴣^{しやこ}の羽根をふつとばし、兎を一匹捕^とり損^{そこな}った。

鵜は、地べたの上で、犬が立ち止まっているその鼻先で、仕止めたのである。はじめ、彼は、土の色をした丸い小さな球のようなものを、見るともなしに見据^{みす}えていた。

「後^{あと}へさがって——。それじゃあんまり近すぎる」

ルピック氏は彼にそういった。

が、にんじんは、本能的に、もう一步前へ踏み出し、銃を肩につけ、筒先^{つつさき}を押しつけるようにして、ぶつ放した。灰色の毬^{たま}は、地べたへめり込んだ。鵜はというと木^こっ葉微塵^{はみじん}、姿は消えて、ただ、羽根のいくらかと血まみれの嘴^{くちばし}が残っていただけだ。

それはそうと、若い狩猟家の名声が決まるのは、鳴を一羽撃ち止めるということだ。今日という日こそ、にんじんの生涯を通じて、記念すべき日でなければならぬ。

黄昏^{たそがれ}は、誰も知るとおり、曲者^{くせもの}である。物みなが煙のように輪郭^{りんかく}を波打たせ、蚊^かが飛んでも、雷^{かみなり}が近づくほどにざわめき立つのである。それゆえ、にんじんは、胸をわくわくさせ、早くその時になればいいと思う。

鵜^うの群^{ぐみ}れが、牧場^{まきば}から還^{かえ}りに、柏^{かしわ}の木立^{こだち}の中で、ぱつとばじけるように散ると、彼は、眼を慣らすために、それを狙^{ねら}ってみる。銃身^{すいき}が水気^{すいき}で曇ると、袖でこする。乾いた葉が、そこそこで、小刻みな蹶音^{あしおと}をたてる。

すると、やがて、二羽の鳴が、舞い上がった。例の長い嘴で、そのために、飛びかたが重い。それでも、情愛こまやかに、追いつ追われつ、身顫^{みふる}いする林の上に大きな輪^わを画くのである。

ルピック氏が、あらかじめいったように、彼らは、ピッピッピイと啼^ないてはいるが、あんまりかすかなので、こっちへやって来るかどうか、にんじんは心配になりだした。彼は、しきりに眼を動かしている。見ると、頭の上を、二つの影が通り過ぎようとしている。銃尾^{じゅうび}を腹にあて、空へ向けて、いいかげんに引鉄^{ひきがね}を引いた。

二羽のうち一羽が、嘴を下にして落ちてくる。反響が林の隅々へ恐ろしい爆音を撒き散らす。

にんじんは、羽根の折れたその鳴を拾い、意気揚々とそれを打ち振り、そして、火薬の臭いを吸い込む。

ピラムがルピック氏より先に駆けつけてくる。ルピック氏は、平常よりゆっくりしているわけでもなく、また急ぐわけでもない。

「来ないつもりなんだ」

にんじんは、褒められるのを待ちながら、そう考える。

が、ルピック氏は、枝をかき分け、姿を現わす。そして、まだ煙を立てている息子に向かい、落ちつき払った声でいう――

「どうして二羽ともやつつかなかったんだ」



にんじんは、釣
ってきた魚の鱗
を、今、はがして
いる最中だ。
河沙魚、鮒、それ
に鱸の子までい
る。彼は、小刀で
こそげ、腹を裂く。
そして、二重に透
きとおった気泡
を踵でつぶす。腸
はまとめて、これ
は猫にやるのだ。
彼は働いているつ
もりだ。忙しい。
泡で白くなった桶
の上へのしかかり、

一心不乱である。が、着物を濡らさないようにしている。
ルピック夫人が、ちよつと様子を見に来る。

「よしよし、こりゃいい。今日は、素敵なフライを釣ってきてく
れたね。どうして、お前も、やる時はやるじゃないか」

そういつて、彼女は、息子の頸と肩を撫でる。が、その手をひ
っこめるとたん、彼女は苦痛の叫びをあげる。

指の先へ釣針が刺さっているのだ。

姉のエルネスチヌが駈けつける。兄貴のフェリックスもこれ
に続く。それから間もなく、ルピック氏自身やってくる。

「どら、見せてごらん」

と、彼らはいう。

ところが、彼女は、その指をスカートで包み、膝の間へ挟んで
いる。で、針はますます深く喰い込むのである。兄貴のフェリッ
クスと姉のエルネスチヌが、母親を支えていると、一方でルピ
ック氏は、彼女の腕をつかみ、そいつをひっぱりあげる。すると、
指がみんなに見えるようになる。釣針は表から裏へ突き通って
いた。

ルピック氏は、それを抜こうとしてみる。

「いや、いや、そんなふうにしちゃ……」

ルピック夫人は、尖った声で叫ぶ。なるほど、釣針は、一方に
かえりがあり、一方にとめがあつて、ひっかかるのである。

ルピック氏は、眼鏡をかける。

「弱ったなあ。針を折らなけりゃ」

どうして、それを折るかだ。ご亭主も、こうなると手のくだし
ようがなく、ちよつと力を入れただけで、ルピック夫人は、飛び
上がり、泣き喚くのである。何を抜き取られるというのだ。心臓
か、命か？ もっとも、釣針は、良く鍛えた鋼でできている。

「じゃ、肉を切らなけりや……」

ルピック氏はいう。

彼は眼鏡をかけなおす。ナイフを出す。そして、指の上を、よ
くも磨いでない刃でやわらかくこする。むろん、刃は通りつこな

い。彼は押さえつける。汗をかく。やつと血が滲み出す。

「あいた、た、あいつ」

ルピック夫人は叫ぶ。一同は慄えあがる。

「もっと、早く、父さん」

と、姉のエルネスチヌがいう。

「そんなふうに、ぐったりしてちゃだめだよ」

兄貴のフェリックスが母親にいう。

ルピック氏は、癰癤が起こつてきた。ナイフは、盲滅法に、

引き裂き、鋸引きだ。ルピック夫人は、「牛殺し、牛殺し」と喚

いているが、はては、気が遠くなる、幸いなことに。

ルピック氏は、それを利用する。顔は蒼ざめ、躍気となり、肉

を刻み、掘る。指は、それ自身、血にまみれた傷口だ。そして、

そこから、釣針が落ちる。

やれやれ！

その間、にんじんは、なんの手助けもしない。母親の最初の悲

鳴といっしょに、彼は逃げ出した。踏段に腰をおろし、両手で頭

を抱え、そもそも事の起こりは……と、考えてみた。たぶん、糸

を遠くへ投げたつもりでいたのが、針だけ背中へひっかかってい

たんだろう。で、彼はいう――

「どうも食わなかったと思ったら、じゃ、別に不思議はないわけ

だ」

彼は、そこで、母親の痛がる声を聴いている。第一、それが聞

こえても、別に悲しい気持ちにもならない。もう少したって、今度

は自分が、彼女よりも大きな声で、できるだけ大きな声で、喉が

つぶれるほど喚いてやろうと思っている。そうすれば、彼女は、

さっそく意欲返しができたつもりになり、彼を放っておくに違いないからだ。

近所の人たちが、何事かと思い、彼に訊ねる――

「どうしたんだい、にんじん？」

彼は答えない。耳を塞いでしまう。彼の赤ちゃけた頭がひっこ

む。近所の人たちは踏段の下へ列をつくり、便りを待っている。

そうこうするうちに、ルピック夫人が乗り出してくる。彼女は、

産婦のように血の気が薄らいでいる。しかも一大危険を冒したと

いう得意さがつつみきれず、ていねいに繃帯を巻いた指を前のほ

うへ差し出している。痛みの残りをじっと堪えて、彼女は、その

場の人々に笑いかけ、短い言葉で安心させ、それから、優しく、

にんじんにいう――

「母さんをあんな痛い目に遭わして、こいつめ……。だけど、母

さんは怒ってやしないよ、ね、お前が悪いんじゃないもの」

未だ嘗て、彼女はこういう調子でにんじんに話しかけたことは

ないのである。面喰って、彼は顔をあげる。見ると、彼女の指は、

布片と糸で、さっぱりと、大きくがんじょうに包まれている。貧

乏な子供のお人形さんそっくりだ。彼の干からびた眼が、涙でい

っぱいになる。

ルピック夫人は前へこごむ。彼は、肱を上げて防ぐ身構えをす

る。癖になつてゐるからだ。しかし、彼女は、鷹揚に、みなの前

で、彼に接吻をする。

彼は、もう、何がなんだかわからない。泣けるだけ泣く。

「もういいんだっていうのにさ。赦してあげるっていつてるじゃ

ないか。母さんは、そんなに意地悪だと思つてるのかい？」

にんじんの咽^{むせ}び泣きは、いちだんと激しくなる。

「馬鹿だよ、この子は。首でも締められてるみたいにな」

母親の慈愛に、しみりさせられた近所の人たちに向かい、彼女はそういうのである。

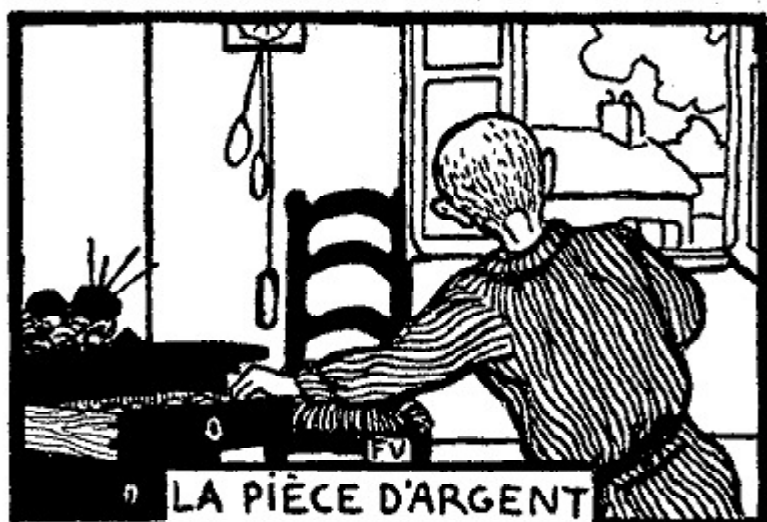
彼女は、一同の手に釣針を渡す。彼らは、もの珍しげに、それ^{あらた}を検める。そのうちの一人は、こいつは八号だと断定する。そろそろ彼女は口が自由に利^きけ出す。すると、からみつくような舌^{しゅう}で、大方の衆^{おおかた}に惨劇のしだいを物語るのである――

「ほんとに、あん時ばかりは、どんなはずみで、この子を殺しちゃまったかも知れません。可愛^{かわい}くなけりやですよ、むろん。うっかりできないもんですね。こんな小^ちっぱけな針でも……。あたしや、天まで釣り上げられるかと思いましたよ」

姉のエルネスチヌは、そいつを遠くのほうへ、庭の隅^{すみ}かなんか、穴があれば穴の中へでもうつちゃってしまい、その上へ土をかぶせて踏み固めておくように提議する。

「おい、戯^{じやうたん}談^{だん}いうない」と、兄貴のフェリックスはいう――「おれが、とつとくよ。そいつで釣りに行かあ。とんでもねえ、母さんの血んなかへ漬^つかった針なんてなあ、申し分、この上なしだ。捕^とれるっちゃねえぞ、魚が！ 股^{もも}みたいなでつけえやつ、気の毒だが、用心しろ！」

そこで、彼は、にんじんをゆすぶる。こっちは、罰を免れたので、相変わらずきよんとしている。それでも、自ら責めているふうをまだ誇張^{かちょう}して見せ、かすれたしゃくり泣きを喉から押し戻し、ひっぱたき甲斐^{がひ}のある、その醜^{みにく}い顔^{おもて}の、糠^{ぬか}み^かいたいな斑点^{しみ}を、大^{おお}水^{みづ}で洗い落^おとしていいる。



つめている)——ああ、そうか。返してよ、ルピック夫人——返すって、何をさ? 失くなったもんがあるのかい。母さんは、いいかげんに訊いてみたんだ。そうしたら、やっぱりそうだ。何を失くしたのさ。

ルピック夫人——お前、なんにも失くしたもんはないかい、にんじん? にんじん——ないよ。

ルピック夫人——すぐに「ない」なんて、どうしていうのさ、知りもしないくせに。まずカクシをひっくり返してごらん。

にんじん——(カクシの裏を引き出し、驢馬の耳みたいに垂れた袋を見

にんじん——知らない。

ルピック夫人——そらそら! 嘘を吐こうと思って、もう、うろろしてるじゃないか、あわ喰った鮎みたいに……。ゆつくり返事をおし。何を失くした? こまかい?

にんじん——そうそう、うつかりしてた。こまだった。そうだよ、母さん。

ルピック夫人——そうじゃないよ、母さん。こまなもんか。こまは先週、あたしを取り上げたんだ。

にんじん——そいじゃ、小刀だ。

ルピック夫人——どの小刀? 誰だい、小刀をくれたのは?

にんじん——だれでもない。

ルピック夫人——情けない子だよ、お前は……。こんなこといつてたら、きりがありやしない。まるで、母さんの前じゃ口がきけないみたいじゃないか。だけどね、今は二人つきりだ。母さんは優しく訊いてるんだよ。母親を愛してる息子(むすこ)は、なんでも母親にほんとのことをいわなけりゃ。どうだろう、母さんは、お前が、お金を失くしたんだと思うがね。銀貨さ。母さんはなんにも知らないよ。でも、ちゃんと見当がつくんだ。そうじゃないとはいわせないよ。そら、鼻が動いている。

にんじん——母さん、そのお金は僕(ぼく)でした。おじさんが、日曜にくれたんです。そいつを失くしちゃったんだ。僕が損しただけさ。惜しいけど、僕、あきらめるよ。それに、そんなもん、大して欲(ほ)しくないんだもの。銀貨の一つやそら、あつたつて無(な)くったつて!

ルピック夫人——それだ。減(へ)らず口は好(こ)いかげんにおし。それを

また、あたしが聴いてるからだ、お人好しみたい。じゃ、なにかい、おじさんの志を無にしようっていうんだね。そんなに前を甘やかしてくれるのに……。どんなに怒ることか。

にんじん——だって、もしか僕が、そのお金を好きなことに使ったとしたらどうなの？ それでも、一生そのお金の見張りをしなくてはなりやしないかしら？

ルピック夫人——うるさいっ！ 偉そうに！ このお金はね、失くしてもいけないし、ことわらない前に使ってもいけません。こりやもうお前に渡さないよ。代りがあるなら持つと。捜しと。造れるなら造ってごらん。まあ、そこはいいようにするさ。あっちへおいで。つべこべいわずに！

にんじん——はあ。

ルピック夫人——その「はあ」は、これからやめてもらおうかね。一風変わったつもりか知らないけど……。それから、すぐに鼻唄を歌ったり、歯と歯の間で口笛を吹いたり、気楽な馬方の真似をしたら、今度は承知しないよ。母さんにや、そんなことしたって、なんにもなりやしないんだ。

二

にんじんは、小刻みに、裏庭の小径を往きつ戻りつしている。彼は呻き声を立てる。少し捜しては、時々鼻をすする。母親が観ているような気がする時は、動かずにいる。さもなければ、しゃがんで、酸模を、また細かな砂を指の先でほじくっている。ルピック夫人の姿が見えないと思うと、もう捜すのを止して、顔を前

に突き出し、しゃなりしゃなりと歩き続ける。

一体全体、例の銀貨はどこに落ちてるんだらう？ はるか上の、木の枝か、その辺の古果の奥か？

時として、何も捜していない、何も考えていない人たちが、金貨を拾うということもある。現にあつたことなのだ。しかし、にんじんは、地べたを這い廻り、膝と爪とを擦り切らし、しかも、ピン一本拾わずにしまうだらう。

さまよい疲れ、当てのない望みに疲れ、にんじんは、とてもだめだと諦めた。で、母親のようすを見に家へ帰ってみる決心をした。たぶん彼女はもう落ちついてるだらう。銀貨がみつからなければ、もう仕方がない。

ルピック夫人は、影も姿も見えない。彼は、おそろおそろ呼んでみる——

「母さん……ねえ……母さん……」

返事がない。彼女はたった今出かけたばかりだ。そして、仕事の抽斗を開けたままにしている。毛糸、針、白、赤、黒の糸巻の間に、にんじんは、いくつもの銀貨を発見した。

それらの銀貨は、そこで、歳月を経ているらしかった。どれもこれも眠っているようだ。稀に眼を覚ましているものもある。隅から隅へ押し合い、入り混じり、そして数は無数だ。

つまり三つかと思えば四つ、そうかと思えばまた八つなのだ。数えようにも数えようがない。抽斗をさかさまにし、毛糸の毬をひっかき廻せばいいのだ。あとは証拠といえど何がある？

とつさの思いつき、これが、こと重大な場合でないと彼を見放さないのである。このとつさの思いつきで、彼は今、意を決し、

腕を差し伸べ、銀貨を一つ盗んだ。そして逃げ出した。

見つかったらという心配で、彼は、ためらうことも、後悔することも、またもう一度仕事机のほうへ引返すこともできないのである。

彼はまっすぐに飛び出した。あんまり先へのめって、止まることすらむずかしい。小径をぐるぐる廻り、ここという場所を探し、そこで銀貨を「失く」し、踵で押し込み、腹這いに寝転がる。そして、草に鼻をくすぐらせながら、めったやたらに這いずって、不規則な円をそこに描く。一人が眼隠しをして匿された品物のまわりを廻ると、一人の音頭取りがはらはらしながら、脚を叩いて、

「もう少し、お蔵に火が点きそう、もう少し、お蔵に火が点きそう……」

こう叫ぶあの無邪気な遊びそのままだ。

三

にんじん——母さん、母さん、あれ、あつたよ。

ルピック夫人——母さんだって、あるよ。

にんじん——だって……。そらね。

ルピック夫人——母さんだって、こら……。こら……。

にんじん——どら、見せてごらん。

ルピック夫人——お前、見せてごらん。

にんじん——（彼は銀貨を見せる。ルピック夫人は、自分のを見せる。にんじんは二つを手に取り、較べてみ、いすべき文句を

考える）——おかしいなあ。どこで拾ったの、母さんは？ 僕は、この小径の梨の木の下で拾ったんだ。見つける前に二十度もその上を歩いてるのさ。光ってるんだらう。僕は、はじめ、紙ぎれか、それとも、白い葷だらうと思ってたんだもの。だから、手を出す気にならなかったの。きつと僕のポケットから落っこったんだらう、いつか草ん中を転がり廻った時……気違いの真似をして……。しゃがんでみてごらん、母さん、この野郎がうまく隠れたところをさ、隠れ家をさ。人に苦勞させやがって、こいつ得意だらう。

ルピック夫人——そうじゃないとはいわない。母さんは、お前の上着の中にあつたのをみつけたんだ。あんなにいつてあるのに、お前はまた、着物を着替える時にカクシのものを出しとくのを忘れてる。母さんは、ものを几帳面にすることを教えようと思つたんだ。自分で懲りるように自分で捜しなさいといったんだ。ところが、捜せばきつと見つかるっていうことが、やっぱりほんとだった。そうだらう、お前の銀貨は、一つが二つになった。えらい金満家だ。終りよければ総てよしだがね、いっついてあげるが、お金はしあわせの元手じゃないよ。

にんじん——じゃ、僕、遊びに行つていい、母さん？

ルピック夫人——いいとも、遊んでらっしゃい。子供くさい遊びはもう決してるんじゃないよ。さ、二つとも持つてお行き。

にんじん——ううん、僕、一つでたくさんだよ。母さん、それし

まっというて、またいる時まで……。ね、そうしてね。

ルピック夫人——いやいや、勘定は勘定だ。お前のものはお前が持つていなさい。両方とも、これはお前のもんだ。おじさん

のと、梨の木のと……。梨の木のほうは、持主が出れば、こりや別だ。誰だろう？　いくら考えてもわからない。お前、心当りはないかい？

にんじん——さあ、ないなあ。それに、どうだっていいや、そんなこと……。明日^{あした}考えるよ。じゃ、行ってくるよ、母さん、ありがとう。

ルピック夫人——お待ち。園丁^{えんてい}のだったら？

にんじん——今すぐ、訊^きいて来てみようか？

ルピック夫人——ちよつと、ぼうや、助けておくれ。考えてみておくれ。父^{とう}さんは、あの年で、そんなうっかりしたことをなさるはずはないね。姉^{ねえ}さんは、貯金はみんな貯金箱に入れておくんだからね。兄^{にい}さんはお金を失くす暇^{ひま}なんかない。握^{にぎ}るといっしょに消えちまうんだから……。そうしてみると、どうもこりや、あたしだよ。

にんじん——母さんだって？　そいつあ、変^{へん}だなあ。母さんは、あんなにきちんと、なんでもしまつとくくせに……。

ルピック夫人——大人^{おとな}だって、どうかすると、子供^{こども}みたいな間違^{まちが}いをするもんだよ。なに、検^{しら}べてみればすぐわかる。とにかく、こりや、あたしの問題^{しやうだい}だ。もう話はわかった。心配^{しんぱ}しないでいいよ。遊^{あそ}んどいで。あんまり遠くへ行かずに……。その暇^{ひま}に母さんは、仕事^{しごと}机^{ひきだし}の抽斗^{ひきだし}の中をちよつとのぞいて来るから……。

にんじんは、もう走り出していたが、振り向いて、一時^{いつしき}、遠ざかつて行く母親^{おと}の後を見送^{おく}っている。やがて、突然、彼は彼女を追^おい抜く。その前に立ちふさがる。そして、黙^{もく}って、片一方の頬

を差し出す。

ルピック夫人（右手を振り上げ、崩^{くず}れかかる）——お前の嘘^{うそ}吐^つきなことは百も承知^{しやうち}だ。しかし、これほどまでとは思^{おも}ってなかった。嘘の上へまた嘘だ。どこまでも行くさ。初めに卵一つ盗めば、その次ぎは牛一匹だ。そして、しまいに、母親を締め殺すんだ。

最初の一撃が襲^{おそ}いかかる。



の意見を陳べるのである。

「僕としちゃあ、家族っていう名義は、およそ意味のないもんだと思うんだ。だからさ、父さん、僕は、父さんを愛してるね。ところが、父さんを愛してるっていうのは、僕の父さんだからというわけじゃないんだ。僕の友だちだからさ。実際、父さんにや、父親としての資格なんか、まるでないんだもの。しかし、僕あ、

ルピック氏、兄

貴のフェリックス、姉のエルネスチヌ、それと、にんじん、この四人は、根のついた切株が燃えている暖炉の傍らで、寝るまでの時間を過ごす。四つの椅子が、それぞれ前脚を中心に、前後に揺れる。議論をしているのだ。で、にんじんは、ルピック夫人がそこにいない間に、自分一個

父さんの友情を、深い恩恵として眺めている。それは決して報酬というようなもんじゃない。しかも、寛大にそれを与え得るんだ」

「ふむ」

と、ルピック氏は応える。

「おれはどうだい？」

「あたしは？」

と、兄貴のフェリックスに、姉のエルネスチヌである。

「おんなじことさ」と、にんじんはいう——「偶然が、ただ君たちを、僕の兄、僕の姉と決めただけだ。それを僕が君たちに感謝するわけではないだろう。僕たち三人が同時にルピックの姓を名乗ってるからって、それは誰の罪だ？ 君たちは、それを拒むことはできなかったんだ。望んでもいない血縁に繋がれることが、君たち、満足かどうか、僕あ、それを知る必要もない。ただ、兄さん、僕あ、君の庇護に対して、それから、姉さん、君の手厚い心尽しに対して、僕あお礼をいうよ」

「はなはだ行き届きません」

と、兄貴のフェリックスはいう。

「どこから考えついたの、そんな夢みたいなこと？」

姉のエルネスチヌはいう。

「それに、僕のいつてることは……」と、にんじんは付け加える——「一般的には、たしかにそういえるんだ。個人的問題は避けよう。だから、母さんがもしここにいれば、母さんの前で、僕あ、おんなじことをいうよ」

「二度はいえないだろう」

と、兄貴のフェリックスがいう。

「僕の話の、どういふところが悪いの?」と、にんじんは答える——「僕の考えを変に取らないでくれよ。僕に愛情が欠けていると思つたら間違いだ。僕あ、これで、見かけよりや、兄さんを愛しているんだぜ。しかし、この愛情たるや、月並な、本能的な、紋切型もんきりがたのようなもんじゃない。意志が働いている。理性に導かれている。いわば論理的なものだ。そうだ、論理的、僕の捜している言葉はこれだ」

「おいおい、その癖はいつやめるんだい、自分で意味のわからんような言葉をやたらつかう癖は……?」

ルピック氏は、そういつて起ち上がった。寝に行くのである。が、それでもなお言葉をついだ——

「ことに、そいつを、お前の年で、ほかのものに言つて聞かせるなんて……。もし亡なくなったお前のお祖父じいさんに、そんな軽口をわしがこればかりでも言つてみる。さっそく、蹴くつ飛ばされるか、ひっぱたかれるかして、わしがどこまでもお祖父さんの息子だつてことを知らされるだけだ」

「暇つぶしに話してるんだからいいじゃないの」

と、にんじんは、そろそろ不安である。

「黙つてるほうが面白い」

ルピック氏は、蝋燭ろうそくを取り上げた。

父親の姿は消える。兄貴のフェリックスが、その後にくついで行く。

「じゃ、失敬、昔のお灸友あひともだちー」

と、彼はにんじんにいう。

それから、姉のエルネスチヌが座を起つ。そして、厳かに

「おやすみなさい」
と、いった。

にんじんは、ひとり取り残されて、途方に暮れる。

昨日、ルピック氏は、物の考え方について、もっと修行をしろと、彼に注意したのである——

「我々つて、いったいなんだ? 我々なんて、ありやせん。総ての人つていうのは、誰でもないんだ。お前は、聞いてきたことをぺらぺら言いすぎる。ちつとは自分で考えるようにしろ。自分一個の意見をいえ。初めは、一つきりでもかまわん」

最初に試みたその意見が、さんざんなあしらいを受けたので、にんじんは、暖炉だんろの火に灰をかぶせ、椅子を壁に沿つて並べ、柱時計におじぎをして、部屋へ引き退る。その部屋というのは、穴倉へ降りる階段に通じていて、みなが穴倉の間と呼んでいるのである。夏は涼しくて気持のいい部屋だ。狐の獲物は、そこへ置く裕ゆに一週間はもつのである。最近殺した兎が、皿の中で鼻から血を出している。いくつもの籠は、牝鶏めんどりにやる粒餌つぶえでいっぱいだ。にんじんは、両腕をまくりあげ、臂ひじまでつつこんで、そいつをかき廻す。いつまでやっても飽きない。

平生なら、外套掛けにひっかけてある家じゅうのものの着物が、彼の眼を惹くのである。それはまるで、めいめいの長靴を、きちんと上の棚にのせておいて、さてゆうゆうと首を縊くつた自殺者のようだ。

しかし、今夜は、にんじんは怖くないのである。寝台の下をのぞいて見ることもしない。月の光も、木の影も、庭の井戸さえも、

気味が悪くない。井戸といえは、こいつは、窓から飛び込みたいもののために、わざわざ掘つてあるように見えるのだ。

怖いと思えば怖いのだろう。が、彼は、もう怖いなんていうことは考えない。シャツ一枚で、赤い敷石の上を、なるたけ冷たくないように踵かかとだけで歩くことも忘れている。

それから、寢床へはいり、湿しめった漆喰しっくいのところどころにできた水脹みずぶくれを見つめながら、彼は、自分の意見を推し進める。なるほど、自分のために納しまっておかねばならぬから、これを自分の意見というのであろう。



もうよほど前から、

にんじんは、

ぼんやり、大きな

ポプラの、一番て

っぺんを見つめて

いる。

彼は、空ろな考

えを追う。そして、

その葉の揺れるの

を待つ。

その葉は、樹か

ら離れ、それだけ

で、軸もなく、の

んびりと、別個の

生活をしているよ

うに見える。

毎日、その葉は、

太陽の初めと終りの光線を浴び、黄金色に輝く。

正午からこつち、死んだように動かない。葉というよりも点だ。

にんじんは我慢がしきれなくなる。落ちついていられない。する

と、ようやく、その葉が合図をする。

その下の、すぐ側の葉が一つ、同じ合図をする。ほかの葉が、

また、それを繰り返して、隣り近所の葉に伝える。それが、急いで、

次へ送る。

そして、これが、危急を告げる合図なのである。なぜなら、地

平線の上には、褐色の球帽が、その繻縁を現わしているからだ。

ポプラは、もう、顫えているのだ！ 彼は動こうとする。邪魔

になる重い空気の間を押しのけようとする。

彼の不安は、山毛櫸へ、柏へ、マロニエへと移って行き、や

がて、庭じゅうの樹という樹が、互いに、手まね身ぶりで囁き

合う。空には例の球帽が、みるみるうちに拡がり、そのくつきり

と暗い縁飾りを、前へぐんぐん押し出していることを報せ合うの

である。

最初、彼らは、細い枝を震わせて、鳥どものおしやべりを止め

させるのである。生豌豆を一つ抛るように、気紛れにぽいと啼

いていた鵪、ペンキ塗りの喉から、やたらにころころという声

を絞り出すところを、にんじんもさつきから見えていた山鳩、それ

から例の鵪の尾の、それだけで、なんとも困りものの鵪……。

その次は、彼らは、敵を威嚇するために、その太い触角を振

り廻しはじめる。

鉛色の球帽は、徐々に侵略を続けている。

しだいに天を覆う。青空を押し退け、空気の抜け孔をふさぎ、

にんじんの呼吸をつまらせにかかる。時として、それは、自分の

重みのために力が弱り、村の上へ墜ちて来るかと思われることが

ある。しかし、鐘楼の尖端で、ぴたりと止まる、ここで破られ

てはならぬというふうに。

いよいよすぐそこへ来た。ほかから挑みかける必要はない。

恐慌が始まる。ざわめきが起る。

総ての樹木は、荒れ狂い、取り乱した図体を折り重ねる。その奥には、つづらな眼と、白い嘴に満たされた幾多の巢があるであらうと、にんじんは想像する。梢が沈む。と、急に眼を覚ましたように、起き上がる。葉の茂みが、組を作つて駈け出す。が、間もなく、こわこわ、素直に、戻つて来る。そして、一所懸命に縋りつく。アカシヤの葉は、華車で、溜息をつく。皮を剥がれた白樺の葉は、哀れっぽい声を出し、マロニエの葉は口笛を吹く。そして、蔓のある馬兜鈴は、壁の上へ重なり合つて波のような音をたてている。

下のほうでは、ずんぐりむっくり、林檎の木が、枝の林檎をゆすぶり、鈍い力で地べたを叩く。

その下では、スグリの木が赤い滴を、黒ずぐりがインク色の滴を垂らしている。

さらに下のほうでは、酔っ払ったキャベツが、驢馬の耳を打ち振り、上気せた葱が、互いに鉢合せをして、種で膨らんだ丸い実を砕く。

どうしてだ？ 何事だ、これは？ そして、一体、どんなわけがあるのだ？ 雷が鳴るのでもない。雷が降るわけでもない。稲光ひとつせず、雨一滴落ちて来ず……。とはいえ、あの混沌たる天上の闇、昼の日なかに忍び寄るこの真夜中が、彼らを逆上させ、にんじんを縮み上がらせたのだ。

今や、件の球帽は、覆面した太陽の真下で、拡がれるだけ拡がった。

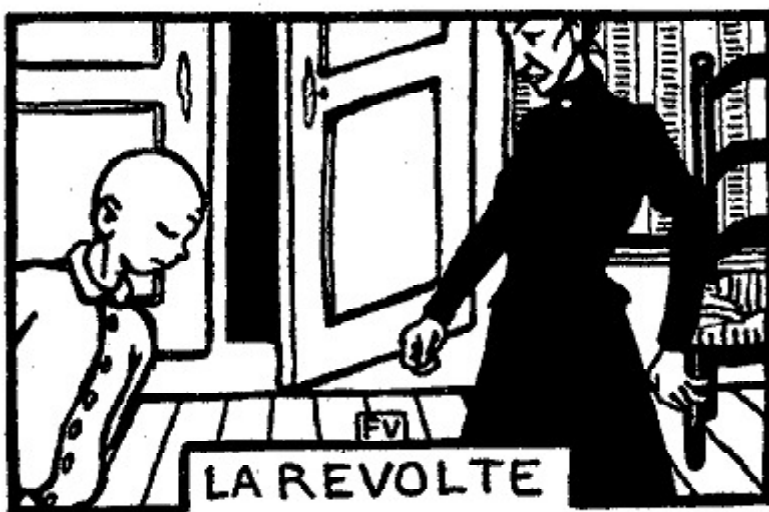
動いている。にんじんはちゃんと知っている。すべてて行く。正体はばらばらの浮雲だ。さあ、もうおしまいだ。お日様が見ら

れるわけである。だが、そのうちに、空いっぱい天井を張つてしまつても、にんじんの頭は、かえつてそのために締めつけられ、額のへんへ喰い込むように思われる。彼は眼をつぶる。すると、例の球帽は、情容赦もなく、瞼の上へ眼かくしをしてしまう。

彼は彼で、両方の耳へ指をつっこむ。ところが、嵐は、叫びと旋風に乗つて、外から、家の中へ侵入する。

そして、街で紙片を拾うように、彼の心臓をつかむ。揉む。皺くちやにする。丸める。握り潰す。

やがて、にんじんは、これが自分の心臓かと思う。わずかに、飴玉の大きさだ。



にんじん——いやだよ。僕は、水車へなんか行かないよ。
 ルピック夫人——なんだって？ 水車へなんか行かない？ なに
 をいうの、お前は？ 誰なのさ、用を頼んでるのは？ ……な
 んの夢を見てるんだい？

ルピック夫人——
 にんじんや、あの
 ね、いい子だから
 水車へ行って、バ
 タを一斤もらって
 来ておくれな。大
 急ぎだよ。お前が
 帰るまでに食事を
 はじめずに待って
 てあげるからね。
 にんじん——いや
 だよ。
 ルピック夫人——
 「いや」っていう
 返事はどういう
 の？ さ、待って
 てあげるから……。

にんじん——いやだよ。
 ルピック夫人——これこれ、にんじん、どうしたというのさ、一
 体？ 水車へ行って、バタを一斤もらっておいでって、母さん
 のいいつけだよ。

にんじん——聞こえたよ。僕は行かないよ。

ルピック夫人——母さんが、夢でも見てるのかしら……？ 何
 事だろう、こりや……？ お前は、生れて初めて、母さんのい
 うことを聴かないつもりだね？
 にんじん——そうだよ。

ルピック夫人——母さんのいうことを聴かないつもりなんだね？
 にんじん——母さんのね、そうだよ。

ルピック夫人——そいつは面白い。どら、ほんとかどうか、……

走って行って来るかい？

にんじん——いやだよ。

ルピック夫人——お黙り！ そうして行つといで！

にんじん——黙るよ。そうして行かないよ。

ルピック夫人——さ、このお皿を持って駈け出しなさい！

二

にんじんは黙る。そして、動かない。

「さあ、革命だ」

と、ルピック夫人は、踏段の上で、両腕を挙げて叫んだ。

なるほど、にんじんが彼女に向かって「いやだ」といったのは、
 これが初めてだ。これがもし、何かの邪魔でもされたとか、また、

遊んでいる最中でもあったのならまだしもだ。ところが、今、彼は、地べたに坐り、鼻を風に曝し、二本の親指をあっちへ向けこっちへ向け、そして、眼をつぶり、眼が冷えないようにしていたのだ。が、いよいよ、彼は、昂然として、母親の顔を直視する。母親はなにがなんだかわからない。彼女は、救いを求めるように、人を呼ぶ――

「エルネスチヌ、フェリックス、面白いことがあるよ。父さんも一緒に来てごらんって……。アガアトもだよ。さあ、誰でも見たいものは、来た、来た！」

そこで、通りをたまに通る人々でも、立ち止まって見られるわけだ。

にんじんは中庭の真中に、隔たりを取って、じつとしている。危険に面して、自分ながら泰然自若たることに感心し、またそれ以上、ルピック夫人が打つことを忘れているのは不思議でならぬ。この一瞬は、それほど由々しき一瞬であり、彼女はために策の施しようがないのだ。平生用いる贅しの手真似さえ、赤い切先のように鋭く燃えるあの眼つきに遇っては、もう役に立ちそうもない。とはいえ、いかに努めても、内心の憤りは、たちまち唇を押し開け、笛のような息と共に外に溢れ出た。

「みんな、いいかね、あたしや、丁寧に頼んだんだ、にんじんにさ、ちよつとした用事だよ、散歩がてら、水車まで行きやいいんだ。ところが、どんな返事をした。訊いてみておくんない。あたしがいいかげんなことをいうみたいだから……」

めいめい、察しがついた。彼の様子を見ただけで、訊くまでもないと思う。

優しいエルネスチヌは、側へ寄って、耳のところでぞつという――

「気をつけなさい。ひどい目に遭うわよ。あんたを可愛がつてる姉さんのいうことだから聴きなさい。『はい』っていうもんよ」

兄貴のフェリックスは、見物席に納まっている。誰が来たって席は譲るまい。もし、にんじんがこれから走り使いをしなくなると、その一部が当然自分のところへまわってくるのだということまでは考えていない。彼は弟を声援したいくらいだ。昨日までは軽蔑していた。濡れた牝鶏程度に扱っていた。今日は、対等だ。見上げたもんだ。彼は雀躍りする。なかなか面白くなってきた。

「世の中がひっくり返った。世の終りだ。さあ、あたしや、もう知らない」と、へこたれて、ルピック夫人はいった――「あたしや、引き上げるよ。誰か口を利いてみるさ。そして、あの猛獣を手馴れずけてもらいましょう。息子と父親と対い合って、あたしのいいところで、なんとか話をつけてごらん」

「父さん」と、にんじんは、こみあげてくる感情の発作のなかで、締めつけられるような声を出した。ものを言うのにまだ調子が出ないのである――「もし、父さんが、水車へバタを取りに行けっというんなら、僕、父さんのためなら……父さんだけのためなら、僕、行くよ。母さんのためなら、僕、絶対、行くのいやだ」

ルピック氏は、この選り好みで、気をよくするどころか、むしろ、当惑の体である。たかがバタの一斤ぐらいで、そばから家じゅうのものにけしかけられ、そのため自分の威光にものをいわせるといふのは、なんとしても具合が悪いのだ。

そこで彼は、ぎごちなく、草の中を二、三步あるいて、肩をび

くんとあげ、くるりと背を向けて、家^{うち}の中にはいってしまふ。
当分、事件は、そのままというわけだ。



誰も？」

にんじんは、ルピック氏がこういう方法で彼を誘い出すのだと気がつく。彼は同じく起ち上がり、椅子をいつものとおり壁のほうへ運び、おとなしく父親の後に従う。

最初のうち、彼らは黙って歩く。訊問はすぐには開かれない。ただ、避けることは不可能だ。にんじんは、頭の中で、およその

夕方、食事がす

む。ルピック夫人は、病気で寝て

るので、いっ

姿を見せない。み

んな黙りこく

いる。習慣から

もあり、また、遠

慮からでもある。

ルピック氏は、ナ

フキンを結び、そ

いつを食卓の上へ

投げ出し、そして

いう――

「旧道の羊飼

場まで散歩に行くが、

一緒に来ないか、

見当をつけてみる。そして、返答のしかたを稽古してみる。用意ができた。激しくゆすぶられた拳句の彼は、いまいささかも後悔するところはない。昼間あれほどの大事件にぶつかったのだ。それ以上の何を怖れるものか。ところで、ルピック氏は、決心をする。その声がまた、にんじんを安堵させた。

ルピック氏――何を待ってるんだ？ 今日、お前がやったことは、

どういうんだ、ありや？ わけをいってみる。母さんはあんな

に口惜しがってるじゃないか。

にんじん――父さん、僕、今まで永い間、いいだせずにいたんだ

けど、いいかげんに形をつけちゃおう。僕、ほんとをいうと、

もう、母さんが嫌いになったよ。

ルピック氏――ふむ。どういふところが？ いつから？

にんじん――どういふところって、どこもかしこも……。母さん

の顔を覚えてからだよ。

ルピック氏――ふむ。そいつは嘆かわしいこった。せめて、母さ

んがお前にどんなことをしたか、話してごらん。

にんじん――長くなるよ、そいつは。それに、父さん、気がつか

ない、なんにも？

ルピック氏――つかんこともない。お前がよく膨れっ面をしてる

のを見たよ。

にんじん――僕、膨れるっていわれると、なお癢に障るんだ。

そりやむろん、にんじんは、真剣に人を恨むなんてこと、でき

ないんだよ。奴さん、膨れっ面をするだろう。ほっとけばい

いのさ。するだけしたら、落ちつくんだ。機嫌を直して、隅っ

これから出て来るよ。ことに、奴さんにかまつてゐる風をしちやいない。どうせ、大したことじゃないんだから。ごめんよ、父さん。大したことじゃないっていうのは、父さんや母さんや、それから、ほかのものにとつてはさ。僕あ、ときどき膨れつ面をするよ。そりやそれに違いないけど、ただ形の上さ。しかし、どうかすると、まったくの話、心の底から、何をつていう風に、腹を立てることもあるの。で、その侮辱は、もう、どうしたつて忘れやしないさ。

ルピック氏——まあ、まあ、そういわずに、忘れちまえ。からかわれて怒る奴があるか。

にんじん——ううん、ううん、そうじゃないよ。父さんはすっかり知らないからさ。家にいることは、そうないんだもの。

ルピック氏——出歩かにやならんのだ。しょうがない。

にんじん（我が意を得たりという風に）——仕事は仕事だよ、父さん。父さんは、いろんなことに頭を使つてゐるから、それで気が紛れるんだけど、母さんときたら、今だからいうけど、僕をひっぱたくよりほかに、憂さばらしのしようがないんだよ。それが、父さんの責任だとはいわないぜ。なに、僕がそつといいつけりやよかったのさ。父さんは、僕の身方になつてくれたんだ。これから、ぼつぼつ、もう以前からのことを話してみるよ。僕のいうことが大袈裟かどうか、僕の記憶がどんなもんだか、みんなわかるさ。だけどね、父さん、さつそく、相談したいことがあるの。僕、母さんと別れちゃいたいんだけど……。どう、父さんの考えで、一番簡単な方法は？

ルピック氏——一年にふた月、休暇に会うだけじゃないか？

にんじん——その休暇中も、寮に残っちゃいけない？ そうすりや、勉強のほうも進むだろう？

ルピック氏——そういう特典があるのは、貧乏な生徒だけだ。そんなことでもしてみろ。世間じゃ、わしがお前を捨てたんだつていわあ。それに第一、自分のことばかり考えちゃいかんよ。わしにしてみても、お前と一緒にいられんようになるじゃないか。

にんじん——面会に来てくれればいいんだよ、父さん。

ルピック氏——慰みの旅行は、高くつかあ、にんじん。

にんじん——是非っていう旅行を利用したら……。？ ちょっと廻り路をしてさ。

ルピック氏——いや、わしは、今まで、お前を兄貴や姉さんとおんなじに取り扱つてきた。誰を特別にどうするっていうことは、決してしなかった。そいつは変えるわけにいかん。

にんじん——じゃ、学校のほうを止そう。寮を出しておくれよ。お金がかかりすぎるとでもいつてさ。そうすりや、僕、何か職業を選ぶよ。

ルピック氏——どんな？ 早い話が、靴屋へでも丁稚奉公にやつて欲しいっていうのか？

にんじん——そうでもいいし、どこだっていいよ。僕、自分の食べるだけ稼ぐんだ、そうすりや、自由なもの。

ルピック氏——もう遅い、にんじん。靴の底へ釘を打つために、わしはお前の教育に大きな犠牲を払ったんじゃない。

にんじん——そんなら、もし僕が、自殺しようとしたことがあるっていったら、どうなの？

ルピック氏——おどかすな、やい。

にんじん——嘘じゃないよ。父さん、昨日だって、また、僕あ、首を吊ろうと思ったんだぜ。

ルピック氏——ところで、お前はそこにいるじゃないか。だから、まあまあ、そんなことはしたくなかったんだ。しかも、お前は、自殺をしそなったという話をしながら、得意そうに、頤を突き出している。今までに、死にたいと思ったのは、お前だけのようになっているんだ。やい、にんじん、我身勝手の末は恐ろしいぞ。お前はそっちへ布団をみんなひっぱって行くんだ。世の中は自分一人のもんだと思ってる。

にんじん——父さん、だけど、僕の兄貴は幸福だぜ。姉さんも幸福だぜ。それからもし母さんが、父さんのいうように、僕をからかって、それがちつとも楽しみじゃないっていうんなら、僕あ、なにがなんだかわからないよ。その次ぎは、父さんさ。父さんは威張ってる。みんな怖がっているよ。母さんだって怖がっているさ。母さんは、父さんの幸福に対して、どうすることもできないんだ。これはつまり、人類の中に、幸福なものもいるっていう証拠じゃないか。

ルピック氏——融通のきかないちっぽけな人類だよ、お前は。その理窟は、屁みたいなだ、そりや。人の心が、いちいち奥底まで、お前にはつきり見えるかい？

ありとあらゆることが、もう、ちゃんとわかるのか、お前に……？

にんじん——僕だけのことならだよ、ああ、わかるよ、父さん。少なくとも、わかれようと努めてるよ。

ルピック氏——そんならだ。いいか、にんじん、幸福なんていうもんは思い切れ！ ちゃんといつといてやる。お前は、今より幸福になることなんぞ、決してありません。決して、決して、ありませんぞ。

にんじん——いやに請合うんだなあ。

ルピック氏——あきらめろ。鑑 兜で身を固めろ。それも、年なら二十になるまでだ。自分で自分のことができるようになれば、お前は自由になるんだ。性質や気分は変わらんでも、家は変えられる。われわれ親同胞と縁を切ることもできるんだ。それまでは、上から下を見おろす気でいろ。神経を殺せ。そして、他の者を観察しろ。お前が一番近くににいる者たちも同様にだ。こいつは面白いぞ。わしは保証しとく、お前の気安めになるよ。うな、意外千万なことが目につくから。

にんじん——そりやそうさ。他の者は他の者で苦労はあるだろうさ。でも、僕あ、明日、そういう人間に同情してやるよ。今日は、僕自身のために正義を叫ぶんだ。どんな運命でも、僕のやりやまじだよ。僕には、一人の母親がある。この母親が僕を愛してくれないんだ。そして、僕がまたその母親を愛していないんじゃないか。

「そんなら、わしが、そいつを愛してると思うのか」

我慢ができず、ルピック氏は、ぶつけるようにいった。これを聞いて、にんじんは、父親のほうに眼をあげる。彼は、しばらく、そのむつかしい顔を見つめる。濃い髭がある。あまりしゃべり過ぎたことを恥じるように、口がその中へ隠れてしまっ

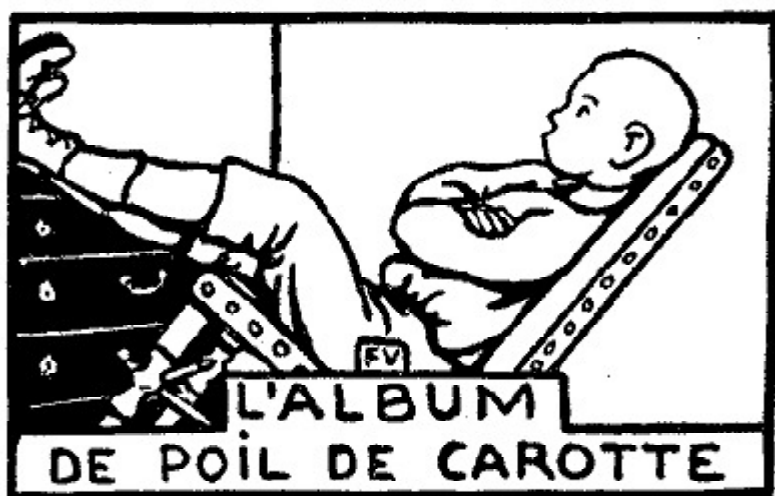
ている。深い襷ひたのある額めじり、眼尻めじりの皺しわ、それから、伏せた瞼まぶた……歩きながら眠っている恰好かっこうだ。

一時いつとき、にんじんは、口をきくことができない。この秘ひかな悦よろこび、握にぎっているこの手、ほとんど力まかせに縋すがっているこの手、それがすべてどこかへ飛んで行ってしまふような気がするのだ。やがて、彼は、拳こぶしを握り固め、闇の彼方かなたに、うとうとと眠りかけた村のほうへ、それを振ってみせる。そして、大袈裟おおげさな調子で叫ぶ――

「やい、因業婆いんごうば！ いよいよ、これで申し分なした！ おれはお前が大嫌きらいなんだ！」

「こら、止よせ！ なにはともあれ、お前の母さんだ」と、ルピック氏はいう。

「ああ」と、にんじんは、再び、単純でしかも用心深い子供になり――「僕の母さんだと思ってこういうんじゃないんだよ」



たまたまどこか

の人が、ルピック一家の写真帖をめぐってみると、きまって意外な顔をする。姉のエルネスチヌと兄貴のフェリックスは、立ったり、腰かけたり、他処行きの着物を着たり、半分裸だったり、笑ったり、額に八の字を寄せたり、種々様々な姿で、立派な背景の中に納まっている。

「で、にんじんは？」

「これのはね、ごく小さな時のがあったんですけれど……」と、ルピック夫人は答えるのである——「そりや可愛く撮れてるもんですから、みんな持ってたてしまっただけです。だから、一つ

も手許には残ってないんです」

ほんとのところは、未だ嘗て、にんじんの撮った例がないのだ。

二

彼はにんじんで通っているが、その通り方は、ひと通りではない。家のものが彼のほんとの名をいおうとしても、すぐにはちょっと浮かんでこないのである。

「どうしてにんじんなんてお呼びになるんです？ 髪の毛が黄色いからですか」

「性根ときたら、もっと黄色いですよ」

と、ルピック夫人はいう。

三

その他の特徴を挙げれば——

にんじんの面相は、まずまず、人に好感をもたせるようにできていない。

にんじんの鼻は、土竜の塚のように掘れている。

にんじんは、いくら掃除をしても、耳の孔に、しょっちゅうパン屑を溜めている。

にんじんは、舌の上へ雪をのせ、乳を吸うようにそれを吸って、溶かしてしまう。

にんじんは燄をおもちゃにする。そして、歩きかたが下手で、

尙せむし儂かしらと思うくらいだ。

にんじんの頸くびは、青い垢あかで染まり、まるでカラアを着けているようだ。

要するに、にんじんの好みは一風変わっている。しかも、彼自身、麝香じやこうの香いはしないのである。

四

彼は一番に起きる。女中と同時だ。で、冬の朝など、日が出る前に寝台から飛び降り、手で時間を見る。指の先を時計の針に触れてみるのである。

コーヒールとココアの用意ができる。すると、彼は、何のひと片きれでもかまわない、大急ぎでつめ込んでしまう。

五

誰かに彼を紹介すると、彼は顔をそむけ、手を後ろから差し伸べ、だんだん縮こまり、脚あしをくねらせ、そして、壁をひっかく。

そこで、人が彼に、

「キスしてくれないのかい、にんじん」

と、頼みでもすると、彼は答える――

「なに、それにや及ばないよ」

六

ルピック夫人――にんじん、返事をおし、人が話しかけた時には……。

にんじん――アギア、ゴコン。

ルピック夫人――ほらね、そういつてあるだろう、子供はなんか頼ほばったまま、ものを言うんじゃないって……。

七

彼は、どうしても、ポケットへ手をつっこまずにはいられない。ルピック夫人がそば来ると、急いで引き出すのだが、いくら早くやったつもりでも、遅すぎるのである。彼女はとうとうポケットを縫ぬいつけてしまった――両手をつっこんだまま。

八

「たとえば、どんな目に遭あおうと、嘘うそを吐くのはよくない」と、懇ねんころに、名づけ親のピエール爺じいさんはいう――「こいつは卑いやしい欠点だ。それに、なんの役にも立たんだろう。だって、どんなこつても、ひとりでに知れるもんだ」

「そうさ」と、にんじんは答える――「ただ、時間がもうからあ」

九

怠け者の兄貴、フェリックスは、辛かろうじて学校を卒業した。彼は、のうのうとし、ほっとする。

「お前の趣味は、一体なんだ」と、ルピック氏は尋ねる——「もうそろそろ食って行く道を決めにやらん年だ、お前も……。なにをやるつもりだい？」

「えっ！ まだやるのかい？」
と、彼はいう。

十

みんなで罪のない遊戯ゆげをしている。

ベルト嬢が、いろんなことを訊ねる番に当たっていた。

にんじんが答える——

「そりゃ、ベルトさんの眼は空色だから……」

みんなが叫んだ——

「すてき！ 優しい詩人だわ」

「ううん、僕あ、眼なんか見ないでいったんだよ」と、にんじんはいう——「なんていうことなしにいつてみたまでさ。今のは、慣用句だよ。修辞学しゅうじがくの例にあるんだよ」

十一

雪合戦ゆきがっせんをすると、にんじんはたった一人で一方の陣を承うけたまわ

る。彼は猛烈だ。で、その評判は遠くまで及んでいるが、それは彼が雪の中へ石ころを入れるからである。

彼は、頭ねらを狙う。これなら、勝負は早い。

氷が張って、ほかのものが氷滑こおりすべりをしていると、彼は彼で、

氷の張ってない草の上へ、別に小さな滑り場をこしらえる。
天狗跳てんぐとびをすると、彼は、徹頭徹尾、台になっているほうがいいという。

人捕ひととりの時は、自由などに未練はなく、いくらでも捕まえさせる。

そして、隠れんぼでは、あんまり巧うまく隠れて、みんなが彼のことを忘れてしまう。

十二

子供たちは丈せいくらべをしている。

ひと目見ただけで、兄貴のフェリックスが文句なしに首から上ほかのものより大きい。しかし、にんじんと姉のエルネスチヌとは、一方がたかの知れた女の子なのに、これは肩と肩とを並べてみないとわからない。そこで、姉のエルネスチヌは、爪先つまさきで背伸びをする。ところが、にんじんは、狡さるいことをやる。誰にも逆さからうまいとして、軽く腰をかめるのである。これで、心もち高低のあるところへ、ちよつぴり、差が加わるのである。

十三

にんじんは、女中のアガアトに、次のように忠告をする——

「奥さんとうまく調子を合わせようと思うなら、僕の悪口をいつてやりたまえ」

これにも限度がある。

というのは、ルピック夫人は、自分以外の女が、にんじんに手を触れようものなら、承知しないのである。

近所の女が、たまたま、彼を打つといって脅したことがある。ルピック夫人が駈けつける。えらい権幕だ。息子は、恩を感じ、もう、顔を輝かしている。やっと連れ戻される。

「さあ、今度は、母さんと二人きりだよ」と、彼女はいう。

十四

「猫撫声！ そりゃ、どんな声をいうんだい？」

にんじんは小さなピエエルに訊ねる。このピエエルは、おっ母さんに甘やかされているのである。

「おおよそ合点がいったところで、彼は叫ぶ——」

「僕あ、そんなことより、一度でいいから、馬鈴薯の揚げたのを、皿から、手づかみで食ってみたい。それから、桃を半分、種のあるほうだけ、あいつをしゃぶってみたいよ」

彼は考える——

「もし母さんが、僕を可愛くって食べちまうっていうんだったら、きつと真つ先に、鼻っ柱へ齧りつくだろう」

十五

時々、姉のエルネスチヌも兄貴のフェリックスも、遊び倦きると、自分たちの玩具を気前よくにんじんに貸してやる。にん

じんはこうして、めいめいの幸福を一部分ずつ取って、慎ましく自分の幸福を組み立てるのである。

で、彼は、決して、あまり面白く遊んでいような風は見せない。玩具を取り返されるのが怖いからだ。

十六

にんじん——じゃ、僕の耳、そんなに長すぎるなんて思わない？ マチルド——変な恰好だと思っわ。どら、貸してごらんさい。

こんなかへ泥を入れて、お菓子を作りたくなるわ。

にんじん——母さんがこいつをひっぱって、熱くしときさえすりゃ、ちゃんとお菓子が焼けるよ。

十七

「文句をいうのはおよし！ いつまでもうるさいね。じゃ、お前は、あたしより父さんのほうが好きなんだね」

と、ルピック夫人は、折にふれ、いうのである。

「僕は現在のままさ。なんにもいわないよ。ただ、どっちがどっちより好きだなんてことは、絶対にない」

と、にんじんの心の声が応える。

十八

ルピック夫人——なにしてるんだい、にんじん？

にんじん——なにつて、知らないよ。

ルピック夫人——そういうのは、つまり、また、ろくでもないことをしてるってこった。お前は、一体、いつでも、知ってるのかい、そんなことを？

にんじん——こうしてないと、なんだか淋しいんだもの。

十九

母親が自分のほうを向いて笑っていると思い、にんじんは、うれしくなり、こっちからも笑ってみせる。

が、ルピック夫人は、漠然と、自分自身に笑いかけていたのだ。それで、急に、彼女の顔は、黒ずぐりの眼を並べた暗い林になる。にんじんは、どぎまぎして、隠れる場所さえわからずにいる。

二十

「にんじん、笑う時には、行儀ぎようぎよく、音を立てないで笑っておくれ」

と、ルピック夫人はいう。

「泣くなら泣くで、どうしてだか、それがいえないって法はない」と、彼女はいう。

彼女は、また、こうもいう——

「あたしの身にもなつてくださいよ。あの子ときたら、ひっぱたいたつて、もうきゅうとも泣きやしませんよ」

二十一

なお、彼女はこういうのである——

——空に汚点しみができたり、道の上に糞ふんでも落ちてると、あの子は、こりや自分のものだと思ってるんです。

——あの子は、頭の中で何か考えてると、お尻のほうは、お留守るすですよ。

——高慢なことといったら、人が面白おもしろいっていつてくれば、自殺じくでもし兼ねかませんからね。

二十二

事実、にんじんは、水をいれたバケツで自殺くわだを企てる。彼は、勇敢に、鼻と口とを、その中へじつと突っ込んでいるのである。その時、ぴしゃりと、どこからか手が飛んできて、バケツが靴の上へひっくり返る。それで、にんじんは、命を取り止めた。

二十三

時として、ルピック夫人は、にんじんのことを、こういうふうにいる——

「ありや、あたしそっくりでね、毒はないんですよ。意地が悪いっていうよりや、気が利きかないってほうですし、それに、大事おほことをしでかそうったつて、ああ尻が重くっちゃ」

時として、彼女は、あつさり承認する——

もし彼に、けちな虫さえつかなければ、やがては、羽振り（はぶ）を利（き）かす人間になるだろうと。

二十四

「もし、いつか、兄貴のフェリックスみたいに、誰かがお年玉に木馬をくれたら、おれは、それへ飛び乗って、さっさと逃げちまう」

これが、にんじんの空想である。

二十五

彼にとっていつさいが屁（へ）の河童（かわづま）だということを示すために、にんじんは、外（そと）へ出ると口笛を吹く。が、後（あと）をつけて来たルピック夫人の姿が、ちらりと見える。口笛は、ぱったり止（と）まる。あたかも彼女が、一銭の竹笛を歯で噛（か）み破ったかのごとく、そいつは痛ましい。

それはそうと、嚏（くしゃみ）が出る時、彼女がひよっこり現われただけで、それが止まってしまふことも事実だ。

二十六

彼は、父親と母親の間で、橋渡し（つと）しを勤める。

ルピック氏（し）はいう――

「にんじん、このシャツ、ボタンが一つとれてる」

にんじんは、そのシャツをルピック夫人のところへ持って行く。すると、彼女はいう――

「お前から、指図（さしず）なんかされなかったっていいよ」

しかし、彼女は、針箱を引き寄せ、ボタンを縫いつける。

二十七

「これで、父（とう）さんがいなかったら、とつくの昔、お前は、母（かあ）さんをひどい目に遭（あ）わしけるとこだ。この小刀（こがたな）を心臓へ突き刺して、藁（わら）の上へ転（ころ）がしといたにきまつてる」

と、ルピック夫人は叫ぶ。

二十八

「涙（はな）をかみなさい！」

ルピック夫人は、ひっきりなしにいう。

にんじんは、根気（こんき）よく、ハンケチの表側（おもてがわ）へかみ出す。間違（まちが）って裏側（うらがわ）へやると、そこをなんとかごまかす。

なるほど、彼が風邪（かぜ）を引くと、ルピック夫人は、彼の顔（かお）へ蠟燭（ろうそく）の脂（あぶら）を塗り、姉のエルネスチヌや兄貴のフェリックスが、しまいに妬（や）けるほど、べたべたな顔にしてしまふ。それでも、母親

は、にんじんのために、特にこう付け加える――

「こりや、どっちかっていえば、悪いことじゃなくて、善（い）いことなんだよ。頭（かぶ）ん中の脳（のう）がせいせいするからね」

ルピック氏が、今朝から彼をからかいどおしなので、つい、にんじんは、どえらいことをいってしまった。

「もう、うるさいったら、馬鹿野郎！」

にわかに、周囲の空気が凍りつき、眼の中に、火の塊りができたとに思われる。

彼は口の中でぶつぶついう。危ないと見たら、地べたへ潜り込む用意をしている。

が、ルピック氏は、いつまでも、いつまでも、彼を見据えている。しかも、危ない気配は見えない。

三十

姉のエルネスチヌは、間もなくお嫁に行くのである。で、ルピック夫人は、彼女に、許婚と散歩することを許す。ただし、にんじんの監視の下にある。

「先へ行きなさいよ。駈け出したっていいわ」

彼女は、こういう。

にんじんは先へ歩く。一所懸命に駈け出しては見る。犬がよくやるあの走りかただ。が、うっかり、速度を緩めようものなら、彼の耳に、慌しいキスの音が聞こえてくるのである。

彼は咳払いをする。

神経が昂ぶってくる。ちょうど、村の十字架像の前で、彼は帽子を脱いだついでに、そいつを地べたに叩きつけ、足で踏みにし

り、そして叫ぶ――

「おれなんか、絶対に、誰も愛してくれやしない！」

それと同時に、ルピック夫人が、しかもあのすばやい耳で、唇のへんに微笑を浮かべながら、塀の後ろから、物凄い顔を出した。すると、にんじんは、無我夢中で附けたす――

「そりや、母さんは別さ」